
超次元ゲイム ネプテューヌmk2 もう一人の協力者

らい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 もう一人の協力者

【Zコード】

Z6621W

【作者名】

らい

【あらすじ】

どこにでも居るような一人の青年、沖中宏樹。そんな彼に降りかかる「レでもかと言つくらいのテンプレな不幸。でもやつぱりテンプレだけあって転生することができることとなつた。彼が転生先に選んだのは「超次元ゲームネプテューヌmk2」。さて、彼はこの世界でどのように生きていいくのか。

現在は原作2章にてキラーマシンと戦闘中。

プロローグと物語の誕生能力の咀嚼（前書き）

ひとつあげず、書を始めてみました。

プロローグと物語の転生時能力のお品書き

「さて、Jリーカーは一体どうなんだろう」「うう、そつ言つて、俺は辺りを見渡してみる。

見渡しては見たが、何もない白い空間が広がつてゐるだけだった。何か思ひつきそうなんだが、心がそれを拒否している。

まあ、いい。ちょっと思い出してみるか。

俺こと沖中宏樹は、久しぶりに取つた有給休暇を利用し、秋葉原に来ていた。

ぶつちやけ、今日から数日間休みをもらつたので、そのとき何やらゲームを探しに来たのだ。

まだまだ未消化のゲームもあるが、それはそれ。それに、ウォレット残額も少なくなつてきたし、買っておこうかと。で、JR改札から出てソフマップに向かおうとして、小さこの女子が道路に飛び出すのを見て。

……そこで記憶が終わつてゐる。

「……あ、そういうことか

俺は、結論にぶち当たつた。

何のJリーカーではない。女の子を助けようとして……自分が身代わりになつた、といつたことだつた。

『そういうことじやよ』

どこからともなく、そんな声が聞こえてきた。その声はさらに続ける。

『しかも、その少女は元々助かる予定だつたのだがな

「……え、」

声の主によると、少女は元々奇跡的に助かる「予定」だつたらしい。だが、俺が介入したことにより、「確定」に助かつた。

その代わり、何も被害を受けるはずのなかつた俺が、「死亡」ということになつてしまつたとのこと。

そのため、被害者「〇」のはずの事故が被害者「一」となつてしまつたらしい。

そうなつてしまつたため、原因追求をしたところ、ある記述を発見した。

それは、俺の名前の今日以降の予定がすべて黒く塗りつぶされている書類だつたらしい。

しかも、それをやつたのはこの頃の主の孫だったそうな。

『本当に申し訳ない。なんと言つて詫びればよいか…………』

声の主の声のトーンは少し下がり、色々と言葉を選んで話しているようだつた。

「まあ、いいじゃないですか。あの子は助かつたんでしょう?」

『つむ、まあそれはそななんじやが』

「で、俺は元の世界には生き返れない、と」

『そういうことじや。話が早くて助かる』

「つてことは、転生は可能?」

『ああ、もちろん。つこでに迷惑を掛けた詫びに、能力の付加もできるが』

転生キタ

（。 。 ）

「で、どんな世界でも可能? アニメも? ゲームも?」

『その辺はまかせる。抜かりはない』

「じゃあ、「ほくのかんがえたさいあよつのやうび」でも実行をせてもらいましょうか。」

「じゃあ、世界は『超次元ゲームネオテューヌmk2』の世界で」

『ちょっとみて、あのトンデモ世界か?』

「ええ、あのトンチキ（褒め言葉）な世界です、『で、能力は？』

『えとですね、武装神姫の武装が欲しいです。で、…………つてことをやりたいんですが、可能ですか？』

『それくらいはお安い御用じゃ』

『じゃ、それに追加で。全能力は女神たちの擬人化状態と同等、かつ…………した場合は女神化した時と同じくらいの力量で』

『まあ、それもどうにかなるな』

『んじゃあとは、今言つたのがレベル1の状態で、レベルがカансストしたら女神より強くなるとかは可能？』

『…………もちろん可能じゃが、凶悪じゃな』

『いや、じゃないと面白くありませんからね』

『他には何かないか？』

『んじゃ、原作開始の4年前からスタートで』

『ん、そんなことか？そんなことは簡単だが、どうするんじゃ？』

『もちろん、4女神と顔見知りになつておく。それだけだよ』

『わかった。名前はどうする？』

『今ままでいいけど……『ケース』で』

『『ケース』じゃな。』

『あ、あと『イストワール』には怪しまれないようにして欲しい』

『それは基本じゃの。おぬしのことは書かれてこないと聞いておこう。あとはないか？』

『女神や、女神候補生と友好な関係を築きたいな』

『あいわかった（魅力MAXな）』

『さて、と。これで設定は終わった。あとはおぬしが世界に行くだけじゃ』

『ありがとな、神様』

『おや、わしは一度も「神」とは言つてないつもりじゃったが』

『いや、こんなことできるのは神様だけだろ？』

『では、おぬしの次の人生に幸のあらん』ことを
「サンキュー、神様」

そう言って、彼の姿が薄くなり始めた。
転生が開始されたのだ。

さて、ここから彼の姿が完全に消えてからが彼の第一の人生の開始となる。
わしは、それをゆっくりと眺めさせてもらひつかの。

プロローグと物語の誕生時能力の品書き（後書き）

れて、始まつてしましました。

すでに、自分の中のプロジェクトと違うんですけど……（汗
最低でも週1更新くらいにはしたいと思います。

オリジナルキャラ設定（前書き）

ということです、主人公の設定です。

オリジナルキャラ設定

キャラクター名

ケイズ

武装

近接攻撃

M4ライトセイバー

近接戦闘時にはこの武装をよく使用する。

いわゆるライトセイバー。

双剣モードでよく使われる。

M8ライトセイバー

M4ライトセイバーの強化版

だが、出力が上がったためかエネルギー切れが早い。
そのため、あまり使われない。

M4ダブルライトセイバー

M4ライトセイバー2振りを柄の部分で連結した武装。
M4ライトセイバーで攻撃時にこの形にすることが多い。

遠隔武装

アルヴォPDW11

いわゆるオート小銃。

あまり威力は高くないが、命中率が高いため愛用。

LC5レーザーライフル

いわゆるレーザー砲。

エネルギーチャージに時間がかかるため、使用頻度

はない。

が、出力は現段階ではピカイチ。

オリジナルキャラ設定（後書き）

ということで、オリ主君の武装紹介でした。

まあ、見る人が見れば分かるとおり、あんばるm_k2の武装です。ちよつとまだ隠し玉がありますが、それはまたいずれ。

ということで、次回予告。

超次元ゲームネプテューヌの世界に降り立ったケイス。さて、彼はどこに降り立つたんでしょうかね。

（指定してなかつたしね）

次回、第1話「やっぱりはじめは紫でしょ」をお楽しみに。
…って、楽しみにしててくれる人がいるんだろうか…

第1話 はじまりはスライムとともに（前書き）

サブタイトルが前回の次回予告と違つ?
仕様です。

さて、ケイスはゼロの大陸に行くことになったのや。

第1話 はじまりはスライヌとともに

さて、ここはどこだらう。

そういえば、転生先の指定をしてなかつたな。

そう言つて、ケイスは辺りを見渡す。

近くには木々が生い茂り、草の匂いまでする。

(ここは、プラネットユースカリーンボックスか)

俺はそう推理する。

ラステイションであればこのよつな場所はないだらうし、ルウイー
であれば雪に覆われているため、除外。

後もうひとつ、決定付けるものがあればな。

そう思いながら、辺りの草に体を預け寝転がつた。
空は青く広がり、平和そのものだ。

(そういえば、まだ原作の4年前だしな。まだ女神が健在だから平
和なんだろう)

そう思い寝ようとしたが、そつは問屋が卸してくれないようだつた。

「スラー！」

スライヌだった。

まじつことなきスライヌだった。

「なんだ、スライヌかよ。ビウせならダイコンダーとか馬鹿くらい
連れて来いよ」

そう言われ腹が立つたのか、スライヌはケイスに攻撃を開始した。

……まあ、ちくちくアタック程度だったが。

ああ、めんどくせえ。

放つておくか。そのうち飽きてどうか行くだろ。

そう思いながら、もう一度寝ようとしていた。

side ????

ああ、もつお姉ちゃんどこに行っちゃったんだろ。

いーすんさんは「別にいいですよ、いつものことですから」「って言ってたけど、やっぱり見つけてお仕事をしてもらわないとね。そう思い、お姉ちゃんがいつも暇をつぶしている森に来てみた。

「お姉ちゃん、どこにいるのー？」

返事がない。

ここにじやなかつたのかな？

そう思つたときだった。

「スラッシュ、スラッシュ、スラッシュ」

あれはスライヌの鳴き声。

しかも、何か攻撃しているっぽい！

私は鳴き声のする方へ駆け出した。

そして、そこで見たのは、倒れている人に攻撃しているスライヌだった。

「こひーつ、やめなさい

そう言って私はスライヌの方に駆け出した。

そんな私に気づいたのか、スライヌは一目散に逃げていった。

side ??? END

「大丈夫、ですか？」

スライヌのちくちくアタックが止みどこかへ逃げて行つたあと、そんな声が聞こえてきた。

……この「ほつちゃん」ボイスは……ネプギアか。そんなことを考えていると、

「あの、どこか怪我されているんですか？」

そう言つて心配そうに顔を近づけてきた。

近い、近い。

「いや、「めん」「めん。寝てた」

ズルツと口れる音がする。

「さすがに煩いなあと思つてたんだが、追つ払つてくれたんだ。あ

りがと」

にこつと笑いながら、そういう風にお礼を述べる。

「い、いえ。でも本当に大丈夫なんですか？」

やつぱり心配そうに聞いてくる。うーん、やつぱり優等生だなあ。

「大丈夫大丈夫。ほら、ね」

そう言つてスライヌが攻撃していた部分を見せる。

ちょっとほつれはしているが影響はない。

「さて、と

そう言つて立ち上がり、ネプギアのほうを見る。

「冒険家、ケイスといいます。今回はありませんでした」

そう言つて、右手を差し出す。

その手を取つて、彼女はこつとつた。

「私はネプギアといいます。お力になれて何よりです

“えりりかりともなく、笑いあつた。

「やつじえはケイスさん、どうしてあんなとこに？」
森の中を歩きながらネプギアが聞いてくる。

「いや、お恥ずかしながら路銀が足きてね。何か稼ごうと思つたん
だけど協会もギルドも分からなくて、あそこでフテ寝してた」
大嘘である。

「あ、そりなんですか。ギルドはちよつと分かれさせんけど、協会
になら」
案内できますよ？」

ちつとも疑おうとしない。ええ娘や。

「ほんと? 助かるよ」

そう言つて、両手を握つて感謝の意を表した。
心なしかネプギアの頬が染まつていたが、氣のせいだらう。

「それじゃ、協会にこな案内します。ついてきていただけます?」
そう言つて、ネプギアは森の出口に向かつて歩き始めた。
俺はその後をついていくことにした。

俺の冒険はここから始まる。
さて、これからどうなるのか……。

..... SAVE

第1話 はじまりはスライヌとともに（後書き）

ネプギアに協会まで連れてきてもらったケイス。
ここで衝撃の事実が…？

次回、「協会にて（仮）」

「スライヌにいじめられてた人を保護してきましたー」「ちょっと待てい」

第2話 協会へGO（前書き）

ネプギアに救われた（？）ケイス。
彼は、仕事を求めて協会に向かっていた。

第2話 協会へGO

side ネプギア

ケイスさん、ちゃんとついてきてるかな？

そう思い、私は後ろを振り向く。

ちょっと離れてはいるけど、ちゃんとついてきてるみたいだ。

でも、何かちょっと寂しい。

私はそこで立ち止まって後ろを振り返り、ケイスさんが追いつくのを待った。

side ネプギア END

ネプギアちゃんが立ち止まって、じつちを見ていた。

どうしたんだろう。

「どうした？ 何か忘れ物でもあった？」

俺はそう問い合わせたが、返ってきたのは思ってもみない言葉だった。

「何か、話しながら行きませんか？」

side ネプギア

あ、唐突過ぎたかな。

何か、ケイスさんが困ってる様に見えた。

ありえない言葉を聞いたかのような顔をしてる。

そんなに変かな、お話したいっていうのは。

それとも、私なんかとお話したくないってことなのかな……。

side ネプギア END

うわ。ネプギアちゃんが何か泣きそうになつてゐる（汗）。
さすがに、そんな表情を見せられて「ヤダ」と答えられるほど俺も
鬼じゃない。

「いいよ。どんな話をしようか」

そう答えると、ネプギアの表情がぱあっと笑顔になつた。
うん、やっぱり女の子は笑顔のほうがいいや。

「ケイスさんつて冒険者つて言つてましたよね。でも、そんな軽装
で冒険しているんですか？」

ああ、『』もつとも。

武器のひとつも持つてないからな。

「まあ、ね。それに武器とかは、よつと
と言つて、武器を召還するようにイメージする。
すると、両手に質量が発生する。

「『』の通り、いつでも出せるからね」

そう言いながら召還した武器を霧散させる。

そしてネプギアちゃんのほつを見ると、目をキラキラさせていた。

「『』いです。武器を召還できる人、はじめて会いました」

そのあとも、どうこう風にやつてこのかとか、他にどんな武器があるのかとか、色々と聞かれた。

まあ、悪い気はしないし、知つておいてもうつたほつが動きやすい
つてのもあつたから、全部見せたけどね。今のところ呼べる武装は。

「へえ。畠窓間から呼び出すイメージ、ですか」
難しそうですね、と苦笑いしながら尋ねてくる。

こつちも実際どんな風になつていいかわからないから、有耶無耶に
したが。

突つ込まれると回答に困るしな。

そんなこんなで、協会についた。

「へえ、ゲームでは外観は表示されてなかつたけど、こんな感じだつたんだ。

普通の教会と同じような感じで、違つとひどいえは、十字架がないくらいか。

「いーすんさん、ただいまー」

ネプギアちゃんはそう言いながら入つていつた。

「おいおい、俺に女神候補生つてこと言つてないのにいいのかよ。

「あ、ネプギアさん、お帰りなさい。あら? わたしらの方はびかり様ですか?」

そう言いながら声の主は俺のほうを見る。

「あ。いーすんさんだ。ちつこいのつ。

「えつとね、お姉ちゃんを探してたときに、スライヌにいじめられてたから助けたんですよー」

「いや、ネプギアちゃん。確かに事実かもしれないけど、それはあんまりじや……。

「プラネテユースの教祖、イストワール様ですね。私は旅の冒険家、ケイスと申します。お見知りおきを」

「一応、はじめだからね。このくらいやつておかないと」

「自己紹介、ありがとうございます。私のことはご存知のようですが、一応。教祖を務めております、イストワールと申します。そして、本日は協会に何の御用でしょうか?」

「いきなり眼光が鋭くなる。まあ、女神候補生にくつついて来る人間なんてそうそういないし、怪しそぎるわな。

「すいません、路銀が足きてしまいなか職があれば、と思いまして。そのときに、そちらのネプギアさんと知り合つたんですよ」

「そう言つと、いーすんさんはネプギアちゃんのほうを向き、事実かを確認していよつだつた。

まあ、金がないのは事実だし、何かの討伐とかないかなーとか思つていたし。

「本当に心苦しいのですが、紹介できるのもがないのですよ
ま、そりだらうねえ。

「ギルドを紹介しますが、行つてみますか?」

「おお、それでもいいや。

そう思つていると、ネプギアちゃんがいーすんさんに何か話して
いた。

side ネプギア

「いーすんさん、私も一緒にギルドに行つてみてもいいですか?」
ケイスさんがどんな戦い方をするのかが気になつていた私は、いー
すんさんにそう聞いてみた。

「ダメです。ネプギアさん、貴方は女神候補生なんですよ?何かが
あつてからでは遅いんです」

いーすんさんはそう言つて、了承してくれなかつた。うー、ケチ。
「じゃあ、私が女神候補生だつてことを打ち明けて、そのボディー
ガードとしてついてつもらつて言つのはどうでしよう?」

私もそんなに簡単には退かない。だつて、お姉ちゃんやアイエフさ
ん、コンパさん以外の戦い方つて見たことがないから。

「それじゃ、彼にアイエフさんと模擬戦をやってもらいましょう。
それで、彼が勝てたらその通りにしてもいい、ということにでもし
ましようか」

やたつ。これで、ケイスさんと一緒に行動できる、かも。

side イストワール

ネプギアさんにも困ったものです。

彼女が信じているようですから、いい人なのでしょうが。
それでも、多分アイエフさんには勝てないでしょうから、この案件
は杞憂ですね。

さて、それじゃアイエフさんを呼びましょうか。

side イストワール END

「できれば早くギルドに紹介して欲しいんだけど」「俺はそうネプギアちゃんといーすんさんに話しかける。

「ちょっとだけ待ってください。ちょっとテストのよつなことをして
もらおうと思いまして」

そういうて、いーすんさんは連絡を取り始めた。
で、ネプギアちゃんは、と。うと。

「すいません、ケイスさん。私がケイスさんと一緒にギルドに行つ
てみたい、つて言つたらこんなことになつちやつて」

まあ、そうだろうなあ。原作でもギョウカイ墓場から帰つてきたと
きに初めてギルドに行く、つて描写になつてたし。

ん? もしかして、ちょっとした原作ブレイクか? これは。
「で、何でそんなことになつてるの?」

まあ、多分女神候補生だからつてことだけなんだらうけど。

「あ、はい。それは、私がプラネテュース(ここ)の女神候補生だ
から、みたいです」

あー、やつぱり。

「で、ボディーガード的な位置なのね、俺が」

「はいっ」

ふう、まあいつか。

さて、それじゃ対戦相手を待ちましょつかね。

...SAVE

第2話 協会へGO（後書き）

腕試しをすることになったケース。

その相手はアイエフ。

双剣使い同士、どんな戦いになるのやら。

次回、第3話 「原作キャラとの戦い（仮）」

「へえ、結構強そうじゃない」

「お手柔らかにお願いしますね、アイエフさん」

第3話 少女と双剣と新たな力（前書き）

ひょんなことからアイエフと模擬戦を行うことになったケイス。
彼は勝つことができるのか。

第3話 少女と双剣と新たな力

ここは、プラネテューヌの協会の中庭。俺の前には、戦闘準備万端といった感じでアイエフが軽く体を動かしていた。

というか実は、別にこの人と戦わなくてもいいんじゃない？

side アイエフ

なーんだ。

冒険者、って言つてたからもつとゴシイのを想像してたけど、案外ひ弱そうなのね。

これなら、簡単に勝てそうだわ。でも、何でネプギアはこんなのが気になつてるのかしら。

side アイエフ END

「それでは、はじめてください」

そう、いーすんさんの声が響いた。

その次の瞬間、アイエフは先手必勝とばかりに突っ込んできた。こつちは、武器も用意してないつてのに。

「銃よ」

そう言つと、俺の右手にアルヴォ P D W 1-1 が現れる。

それをアイエフに向か、トリガーを引く。

ドガガガガッ。

アイエフは咄嗟にその銃撃を横に跳んで避け、そこからまたこちら

に迫る。

「危ないじゃない！」

「速攻で突っ込んできたアイエフ（あなた）に言われたくない」
そう言いつつ、アルヴォ P D W 1-1を右手から消す。
そして、両手にM4ライトセイバーを出す。
コレで迎え撃つ！

s i d e アイエフ

さつき、何ももってなかつたわよね、彼。
で、いきなり銃を乱射するなんて。
どこから出したのよ、なんて思つてたら剣！？
何の手品よ、全く。

s i d e アイエフ END

「面白い手品ね」

「手品かどうか、すぐに分かるさ」

双剣 vs 双剣

その戦いの火蓋は切つて落とされた。

アイエフの右手が上から切りかかる。
ケイスはそれを左手の剣で受ける。

その瞬間、アイエフは左手を横から屈ぐ。

ケイスはそれに反応し、右手の剣で受け流す。

「なかなか、やるじゃない」

「そちらこそ」

その後も何回も剣戟の応酬が続いたが、双方ともに決定打を「えら
れず数分が過ぎた。

そのとき、一人の戦いに動きがあった。

アイエフが、ケイスから少しだけ間を取つたのだ。

「一気に力タをつけてあげる」
アイエフはそう言つと、俺のほうに突つ込んできた。

（うわっ、マズっ）

そう思つうが、体が思つように動いてくれない。

なんとか両腕を前に持つて行き、防御体制を整える。

「フフフ、どこまで耐えられるかしら。『ソウルズコンビネーション…』」

縦横無尽に双剣が振られる。かつ、蹴りも同じように放たれる。

キンッ、キンッ、ギヤギヤギヤッ！

数発もらつてしまつたが、どうにか凌いだ。

「ハア、ハアッ」

自然と息も荒くなつてしまつ。

「随分、やるじゃない」

アイエフは不敵な笑顔を浮かべながらそう言つた。
確かに、防げたのはかなり運がよかつたからだ。

「お褒めに預かり、恐悦至極」

そう言ひながら、ライトセイバーを構える。

「じゃ、コレで終わりにしてあげる」

そう言つて、アイエフが再び突つ込んできた。
マズい。

そつ思つたときだった。

キイイイイ。

そんな音を立てて、辺りの時間が止まつていた。

だが、その中で動く影が2つある。

ひとつはケイス自身。

もうひとつは、奇妙な足音を立てながら、ケイスのほうへ近づいてきた。

まるで、ロボットが歩いているかのようだ。

『オヌシが、あの神とやらが言っていた少年でゴザルか？』

俺の目の前まで歩いてきた影がそうつぶやく。

なんか、この言葉遣い、聞いたことがあるんだが。

『どうしたのゴザル？ さては、拙者がカッコよくて見惚れていたでゴザルか？』

間違いない。

『いや、なんでもない。爆炎斬鬼丸』

『おお、拙者の名前を知っているとは。拙者も有名になつたでゴザルなあ。』

いやいや、そうじゃないってば。

『で、どういうことなんだ？』

ちょっと（どころではないが）不思議に思つたため、聞いてみた。

『拙者の力、受け取つて欲しいでゴザル』

？？？あ。もしかして。

『神様から、そう頼まれたつてことか？』

『ウム』

『装備とか技とか？』

『ウム』

『でも、俺機械じゃないから使えないかもしけないけど、大丈夫なのか？』

『そこは、『おやくそく』とやらで大丈夫だと申しておつたでゴザル』

『ちなみに、他の仲間は？』

『全員違う大陸、と言うのでゴザルか？バラバラになつたでゴザル』

つてことは、全部の大陸を廻れば、全員の力が使えるようになるわ

けか。

「よつしゃ、じや、すぐにやつてくれ」

『承知!』

そう言つと、一斬鬼丸（彼）は光となり俺に吸収されていった。その瞬間、彼の持つ装備、技が知識として俺の中に蓄積された。
く斬鬼丸の技術をすべて覚えた』

『さて、拙者にできるのはここまで『ザル』
それを最後に、彼の言葉は聞こえなくなつた。

で、元の時間軸に戻つたんだが。

やつぱりアイエフが突つ込んでくる最中で。
さて、どうしようかと考えながら剣を捌いていた。

「な、何で？さつきは手を抜いていたの？」

そう言われ、気付く。

考え方をしながら、剣を捌いていることに。

（技とかだけじゃなく、こういうのも引き継がれるのか）

「手を抜いていたわけじゃなくて、思い出しただけだ。捌き方を」
そう言いながら、少し後ろに下がる。

（そういえば、一回やつてみたかつたんだよね）

そう思いながら、双剣のライトセイバーを消す。

そして、一回り大きなM8ライトセイバーを片方だけ召還する。

「さて、ではこちらから行くぞ」

そして、今度は俺の方からアイエフに突つ込んだ。

アイエフに肉薄したときに、技を放つ。

『虚空……雷撃剣』

剣捌きは左から右へ廻ぐだけ。

ただ、剣速が尋常でないほど早い。

すなわち、「雷撃」のように。

アイエフはどうにか反応はできだが、そのまま吹き飛ばされてしま

つた。

そして木に叩きつけられ、氣を失つてしまつたようだ。

... S A V E

第3話 少女と双剣と新たな力（後書き）

アイエフに勝つたケイス。

そこに、ネプテューヌが現れる。

次回、「第4話 プラネテューヌに血の雨は降つたり降らなかつたり（仮）」

今回登場してもらつた、爆炎斬鬼丸さんですが、

その昔「POP COM」というパソコン雑誌に掲載されていた漫画のキャラクターです。

本文にもあつたとおり、他の仲間も登場予定です。

彼らのことについては、そのうち説明しようと思っています。

それでは、また次回。

第4話 ギルドでの騒動（前書き）

辛うじてアイエフとの戦闘で勝利したケイス。
彼には無事、仕事が『えられるのだろうか？

第4話 ギルドでの騒動

ふう、どうにか勝ったか。

というか、斬鬼丸の力がなかつたらヤバかつたな。

そう思いながら、木に叩きつけられたアイエフのほうへ向かった。

side アイエフ

イタタタタ。

まったく、よくもやつてくれたじゃない。

それに、途中まで手を抜いて戦われちゃうし。

ま、それについては、様子見と油断させる意図があったのかもしけないけどね。

そのとき、目の前に影が現れた。

さつき私をここまで吹っ飛ばしたアイツだ。

アイツは

「大丈夫か？」

と言いながら手を差し伸べてきた。

癪に障るけど、しょうがない。

私はその手を取つて、引き起こしてもらった。

side アイエフ END

「本当に申し訳なかつた。怪我はないか？」

そう言いながら、俺は頭を下げた。

理由はともあれ、下手をすれば大怪我をさせてしまう可能性があつ

たからだ。

けど、アイエフは「大丈夫よ」の一言で片付けてしまった。
やっぱり強いな、彼女は。

「ケイスさん、本当にすいです。アイエフさんに勝つちやうなん
て」

「そうですね。彼女はプラネテユースの有効戦力の一人だと言つ
に」

ネプギアといーすんさんがそのように言つてきた。

「いやいや、運がよかつたんですよ」

俺はそう答えた。

「それでは約束通り、ギルドに案内しましょうか」

いーすんさんは「では、ついて来てください」といつと、ふよふよ
と浮かびながら中庭を出て行つた。

どうやら、ギルドに案内してくれるようだ。

「あ、私も行きます」

そう言つて、ネプギアもついてきた。……本当に行く気満々だった
のね。

一行がギルドにつくと、中で何かもめているようだった。
どうしたんだろうと思い中の人には声を掛けると、

「ネプテューヌ様が、一番高いクラスの討伐依頼を受けようとして
いたため、みんなでとめていたんですよ」
と返ってきた。

side ネプテューヌ

「だからーらー、そんなの大丈夫だつて。わたしが強いのみんな知
つてるでしょ？」

「ですから、先ほどから何度も申し上げている通り、何かがあつてからでは遅いのです」

「うー、このわからず屋めー。」

そんな時、横から割り込みの声が入った。

「だったら、俺が一緒に行こ」

「…誰？」

side ネプテューヌ END

思わず口を出してしまったが、この空気をどうすればいいんだ。何か、みんな俺のほうを見てヒソヒソやつていい。

「失礼ですが、あなたは？」

「あ、すいません。今日プラネットューヌに来たケイスと申します」

俺は正直にそういう。

「そうですか。では、このギルドに来るのは……」

「ええ、はじめてです。ですが、護衛くらいならできると想いますよ？」

そういうと、ざわざわとなり始めた。

ま、無理もないか。女神の護衛が簡単とか言つちゃつたし。

「貴方は護衛を何だと……」

ギルドの人があつとめたとき、いーすんさんが口を挟んだ。

「大丈夫ですよ、ギルドマスター。彼なら信用できます」

「え？？」

「先ほど、彼にはネプギアさんの護衛となる試験を受けていただきました。結果は合格でした」

「ちょ、おまつ。」

「ちなみに、どのような試験だったのですか？」

「そこ、いらんことを聞くくな。

「アイエフさんとの戦闘。そして、勝利です」

そう言つと、アレだけざわざわしていたギルドの中がピタッと静かになつた。

「やー、わー ありがとうね。助かつたよー」
ネプテューヌは俺のほうに笑顔を向けてくる。

「あ、自己紹介がまだだつたよね。私はネプテューヌだよ。プラネットューヌの女神をやつてるんだー」

「私はケイスと言います。よろしくお願ひします、ネプテューヌ様」「固い、固いよケイスさん。もつとフランクにやつてもいいってかまわないよ?」

「わかつた。こんな感じでいいですか、ネプテューヌ?」「

「OKだよ」

そんなことをやつてこぬつて、わつをアイロフと戦つたときの話になつた。

「そういえば、アイちゃんに勝つたんだつて? 強いんだー」「いえいえ、ちゅうじ運がよかつただけですよ」「それでもだよ。私だつて結構苦戦するんだから」「そうなんですか。でも、女神化すれば勝てるんでしょう?」「まあねー。つてあれ? 女神化とか話したつける? やべー、知識のでしゃべつちまつた。どうじよ。

「いや、あはは。だつて、わつき女神様つて言つてたじやないですか。でも、俺たちの知つてる女神様とネプテューヌさんの姿が違うから、変身とかするのかな、つて」

脂汗をだらだらと流しながらじどりひどりに答えた。

「すーじー。あたりだよ。」

「通じちやつたよ、オイ。」

「わういえば、ギルドで何の依頼を受けたんですか?」

ちょっと興味があり、聞いてみた。

「いやー、山岳地帯に野良ドラゴンが出たって事だったんでそれ
退治を受けたんだよ」

「オイ、マジヤバいって。それは。
俺、もしかしてそこで死ぬんかな。」

side ネプギア

お姉ちゃんにケイスさんを取られちゃった。
私が一緒にクエストを受けるはずだったのに。
でも、次は一緒にクエストを受けられるよね?」

side ネプギア END

..... S A V E

第4話 ギルドでの騒動（後書き）

ネプテューヌと一緒にクエストを受けたケイス。
そこでは、何が待っているのか。

次回、第5話 初めてのクエスト（仮）

クエストがクエストなんで、おそらくネプが変身すると想います。
うまく書けるか不安ですが。
それでは、また次回。

第5話 はじめてのクヒスト、強力な武装（前書き）

成り行きでネプテューヌと野良ドーラゴンの討伐をする」とになったケイス。

果たして、彼に無事明日は来るのか？

第5話 はじめてのクエスト、強力な武装

「それじゃー、行つてくるねー」

「ネプロテュースはみんなにそう声を掛けていた。

対する俺は、

「ああ、なんでこんなことになつてるんだろ」

そうつづぶやきながら、支度をしていた。

「ま、どうにかなるわよ」

アイエフはそう言つたが、なかなか吹つ切れるものでもない。

つて、待てよ。

そつこえぱこのクエストの報酬を聞いてなかつた。

「なあ、ギルドマスターさん。このクエストの報酬つていかほゞ～。
「えーと、ですね。このくらいです」

そう言いながら一枚の紙を出してきた。

何々？ 成功報酬で100万クレジット？

「よし、ネプロテュース。早く行くぞ」

そう言つて、支度をする手を早めた。

side ネプロテュース

うわ。現金だなあ、ケイスさんは。
でも、不思議と嫌な感じはしない。
何でだろ？。

そんなことを思つていると、ネブギアが話しかけてきた。

「お姉ちゃん、無理だけはしないでね？」
心配性だなあ、我が妹ながり。

「大丈夫だよ。そんなに危なくないってば。それに…」

「そう言いながら、ケイスさんのほうを向く。

「今日はケイスさんも一緒にだから。だから、あまり無理はしないよ」

「うん、うだね」

わたしは、どつちかつて言つとケイスさんが無理をしないかどつかつて方が気にかかるんだけどね。

side ネプテューヌ END

「じゃ、こつてきまーす」

ネプテューヌがそんな元気な声を出した。

街の方からは、「しつかりねー」とか「怪我しちゃ駄目ですよー」とか、そんな声が聞こえてきた。

ちなみに行き先はハネダマウンテン。

ハネダシティから少し離れたところにある山だ。プラネテューヌからだと、歩いて数時間らしい。

「そういえば、ケイスさんって得物は何を使つてるの?」

ネプテューヌが歩きながらそんな風に聞いてきた。

「アイエフたちから聞いてないか?剣と銃だよ」

「見せて見せて」

ネプテューヌが目をきらきらさせながら言つてきた。

おそらく、『何もない』といふから取り出す』つて言つのを聞いているんだね!」

やっぱり、ネプギアの姉さんだ。よく似てるよ。

そう思いながら、ほいっとM4ライトセイバーを取り出す。

そして、それをネプテューヌに渡してやつた。

「へえ、軽いし扱いやすいね。わたしにぴったりだ」

「…やらんぞ」

ネプテューヌは「けちー」といしながら返してきた。

「あと、銃のほうだが…」

そう言いながらアルヴォPDW11を取り出し、すぐに引き金を引く。

ダダダダダダ。

アルヴォPDW11の向き先には数匹のスライヌがあり、全弾命中していた。

「へー、すゞいね。そんなことができるんだ」

ネプテューヌはぱぱぱちと手を叩きながらその様を見ていた。

「本当はもうひとつあるんだが、それは後で、な

で。

そういひしている間に、目的地に到着。

ちなみに、目の前には数匹のドラゴン。

「ああ、これが今回の討伐対象か」

俺がそう言つと、ネプテューヌは首を横に振りながらこう言つた。
「たぶん、このドラゴンは見張りか何かだよ。本命は後で来るよ、
多分」

来てほしくないなあ。

と思つてこると、4匹のドラゴンがこちらに切り込んできた。
だが、1匹だけ俺たちの来たほうと逆方向に走つていった。

マジで仲間を呼んでくる気か。

だが、そっちを気にしている余裕もなく、切り込んでいたドラゴン
の対処に追われる。

俺はすぐにM4ライトセイバーを2振り取り出し、両手に構えた。

「よし、行くぞ」

そう言つて、ドラゴンを迎え撃つ。

「つお、めづ」

マジで硬かつた。ドラゴンメイルとか、硬いわけだよ。

それでも、何回か斬つていふうちに傷を負わせることができ、倒す

「ことができた。

「そつちはどうだ？」

「「Jたちも今終わつたトコだよー」

「どうにか凌いだな、と思いながら地面に座り込んだ。が、やつぱりそれだけでは終わらなかつた。

「ケイスさん、新しいのが来たよ、多分2~3匹」

お~おい、勘弁しろよ。

ドラゴンたちは、やつぱりこちらに突つ込んできた。

だが、先ほどの戦闘後といふこともあり、おれは少し疲れていた。ネプテューヌもそれは変わらないようだつた。

「ネプテューヌ、ここは変身してどうにか時間を稼いでくれ」

俺はそう言つと、M4ライトセイバーをしまい、チャージの体制に入る。

「わたしひとりで？」

「ああ、凌ぐだけでいい。少ししたら、俺のほうで殲滅する」

「わかつたよ！変身！」

そつぱつと、ネプテューヌは女神化した。

side ネプテューヌ

「さあ、どこからでもかかつてらつしゃい」

私はそつぱつと剣を構えた。

それを警戒してか、ドラゴンたちはそこで立ち止まつてしまつた。

そして、ある方向をいつせいに向く。

そう、ケイスがいる方向だつた。

「それだけは、絶対にさせない」

そう言いながら、私はドラゴンたちを必死で止めていた。止めようとしていた。

でも、一人では限界があり、数匹は段々とケイスに近付いて行つてしまつ。

その数匹に對して剣を振る。

そうすると今度は他の数匹がケイスに近付いてしまう。

結果的に、全部が近付いてしまうことになつてしまつた。

「駄目つ。ごめん、ケイス」

ドラゴンたちはケイスのすぐそこまで近付いてしまつた。

そんな時だつた。

「サンキュー、ネプテューヌ。どうにかなつたぜ」

そんな声が聞こえてきた。

side ネプテューヌ END

「ネプテューヌ、すぐこっちに来い」

そう言って、ネプテューヌの

手を引っ張り、俺の後ろへ移動させる。

「いいモン見せてやるよ」

そう言って、俺は「C5レーザーライフルを呼び出した。

すでに、チャージも完了させてある。

「行くぜ、ファイヤー!!」

そう言ってトリガーを引く。

辺りが閃光に包まれ、俺たちとドラゴンはその閃光に巻き込まれた。

数秒後、そこに残つていたのは俺とネプテューヌだけだつた。

「ねえ、今何したの?」

ネプテューヌはそう聞いてきた。

「今のは、光の力を溜め込んで、それを爆発させたみたいなもんだ

ま、嘘は言つてない。レーザーも光だからな。

「それが奥の手だつたんだ。そんなのが相手じゃ私でも勝てないわ

よ

「いや、コレはさつきみたいに発射するのに時間がかかっちゃうん
だ。だから、誰かと協力しないと難しい、ってわけ」
そう言うと、ネプテューヌは妙に納得していた。
「だから、私をスケープゴートにしたのね」
……あ。

……SAVE

第5話 はじめてのクエスト、強力な武装（後書き）

クエストを無事に終わらせて帰ってきたケイス。

そんな彼に待っていたのは……。

次回、第6話 旅立ち（仮）

ちなみに、羽田山って本当にありますよ、ええ。

まあ、ハネダシティの元ネタの場所ではないですが。

それでは、また次回。

第6話 旅立ち（前書き）

すいません、投稿が遅れました。

野良ドラゴンの討伐を終えたケイズ。

その帰り道……。

第6話 旅立ち

「そーいえばセー、ケイスー」
とぼとぼとプラネテュースに歩いている最中、ネプテュースが話しかけてきた。

「何?」

「プラネテュースで働いてみる気、ない?」
「はい?」

「プラネテュースで働いてみる気つて……。」

「それって、仕官のお誘いですか?」

「あー、そんなに堅つ苦しいことじゃないんだけど、大体そんな感じー」

やつぱりそつか。

「とりあえず、辞退をせてもらいますよ」

「そう言つうと、ネプテュースは不思議そうな顔をして「何で?」と尋ねてきた。

「端的に言つうと、今の世界を見て廻りたいから、かな」

「プラネテュースで仕官しても、自由に行動できるよ?」

「おいおい、そりや自由すぎやしないか?」

「ネプテュースはそう思つていても、周りはそつは思わないよ」

「そんなフリーダムに行動できるのは、君だけだ。」

「でも……。ネブギアも気になつてゐみたいだし……」

「そりや、氣のせいだ。それか、アイエフを負かした人間として興味があるつて程度じやないか?」
「ま、そんなもんどううなあ。」

「それにさ、ちょっと嫌な予感もするんだよね

「嫌な予感?」

「ああ。何か悪いことが起つたそつな、そんな予感」
1年後に起るからな、アレが。

「そんなことないよー？私たち、女神がいねばゼリがなるよ
だといいんだだけね」

「それにね」

「ん？」

「それに、プラネテユースの女神たちに会つたんだ。他の女神にも
会つてみたくなつたんだよね」

ネプテューヌは、「そつかー」と言いながら先を歩いていった。
どうやら、諦めてくれ……

「じゃ、他の女神に紹介するから、それだつたらいいよねー」

……なかつたようだ。

「まあ、紹介してくれるつてのならなんかではないけど、自分の足で
いろんなところを歩いても見たいし」

「そつか。でも、他のところを廻つて満足したら、プラネテユース
に来てくれる？」

……なんか、食い下がるなあ。

「そのときに、プラネテユースが一番いいと思ついたらね

「うん、約束だよ？」

「ああ」

プラネテユースに段々と近づいてきた頃。

「そういえば、プラネテユースに帰つたらどうあるの？..」

ネプテューヌがふいにそう聞いてきた。

「そういえば、ネプギアと一緒にクエストに行くつて約束してたん
だよなあ」

別に嫌なわけではないが、なにやら気が重い。

「何で落ち込んでるの？」

「いや、ネプギアとのクエストどうつかな、つて
そう言いながら、またため息をつく。

「簡単な、スライス退治とかでいいんじゃないの？」

「え？」

それは駄目なんじゃね？

「だつて、ネプギアは多分ハイキング気分で行くと思つよ。私の妹だし」

いや、自分を基準にしないでくれ。

つて、ちょっと待て。

「つてことは、このクエストはハイキング気分で受けたのか？」

「ギク！」

まあ、どうにかなつたし別にいいよ、今さう。

「別にいいや。でも、本当にスライヌ退治とかで大丈夫なのか？」

「そうだね。お弁当持つて、おやつと水筒を持って行くつてのはいいかもねー」

ふむ、それならその手も考えておこう。

そんなこんなで帰つてきました、プラネテュース。

「おかえり、ケイスさん。それに、お姉ちゃんも」
俺たちを迎えてくれたのはネプギアだった。

「うう、ネプギアがケイスさんに取られちやつた気分……」

何を落ち込んでるんだ？ ネプテューヌは。

「それで、どうだつたの？ ドラゴン退治は」

「あつさり終わつちやつたよ。ケイスさんの一撃で」

「へえー、そうだつたんだー……つて、ええー？」

おお、ネプギアが驚いとる。

「え。でも。ケイスさんつて剣と銃しか持つてないですよね？」

「それがねー……」

ネプテューヌがこつちを見てウインクする。

出せつて事か。

「よつと。こんなもんがあつたりする」

そう言って、レーザーライフルを出す。

「聞いてないですよ、そんな武器

「器」

「話してなかつたしな」

「おお、女神様、ご無事でしたか」

ギルドにつくなり、ギルドマスターがそう話しかけてきた。

「うん、大丈夫だったでしょ？ それじゃ、換金換金！」

そう言つと、ギルドマスターは店員に指示して、報酬を持って来させた。

「これが、今回の報酬、100万クレジットだ」

そう言つと、テーブルの上にドカッと置いた。

うん、確かにそのくらいありそうだ。

「で、二人で山分けか？」

「ううん。独り占めで」

ちょ。聞いてないぞ、そりや。

そう思つていると、ネプテューヌはこつちを振り返りにいつ言つた。

「ね、ケイスさんの独り占めでいいよね？」

「いや、やっぱり山分けだ」

二人で協力して討伐したんだ。そうしないと、公平じゃない。

「分かつたよ。じゃ、半分は預からせてもらつ（・・・・・・・・）

ね？」

で、50万クレジットなんて大金持つてゐるわけには行かないんで、手元に少しだけ残して後は全部銀行に預けた。

「さて、と。あとは、ネプギアとの約束だけか」

そう言つて、ネプギアのほうを見る。

「え？ 私ですか？ あ……」

思い出したようだ。

そのときネプテューヌがちょっと離れたところから声を掛けた。

「ちょっと、ネプギア。こつちにちょっと来てー」

side ネプギア

うー、お姉ちゃん。なんて間の悪い。

これから、ケイスさんとクエストに行けるかもしぬないっていうのに。

「何？お姉ちゃん」

私は極めて不機嫌そうな顔をしながらそう言った。

「えっとねー、ケイスさんとのクエスト、今回は我慢してくれないかな？」

やっぱり。

「何で？わたし、楽しみにしてたんだよ？」

「わかるわかる。だけどね……」

そう言つと、お姉ちゃんは急に声のトーンを変えてこう呟つけてきた。
「多分、今ケイスさんと一緒にクエストに行つたら、迷惑を掛けちゃうかもしれないよ、ネプギア」

「そんなことないよ！」

「ケイスさんは、すごい強いよ。だから、もうと強くなつてから一緒にクエストに行つてもらつたほうがいいと思うな、私は」
でも、クエストって強くなるために受けるんじゃないのかな？
「だから、約束をするんだよ。再会の」

「再会の？」

「うん、そう。そして、一人前になつたネプギアを見てもらつたほうが、ケイスさんは好きになつてくれるんじゃないのかなー」「え、何でお姉ちゃん……。

「『何で分かるの？』って顔してるね。そりや分かるよ、姉妹だもの」

「お姉ちゃんの言つ通りかもしれないね」

ありがとー、と言つてわたしはケイスさんのほうへ向かつた。

「どうしたんだ？」

ネプギアがネプテューヌからやつと開放された。
何を話してたんだろうな。

「あ。えーとね、クエストの件だけど……」

「どうした？ 何か要望があるのか？」

「ひとつ、教えてください。ケイスさんはいろんな国に行つてみた
いんですか？」

「ネプテューヌに呼ばれてたのはこれが。

「まあ、それに関しては否定はしない

事実だしな。

「だつたら、他の国全部廻つた後に、またプラネテューヌに来てく
れませんか？」

「ネプテューヌめ、何か言つたのか？」

「わたしは、今はまだ『ごい弱いです。それこそ、ケイスさんと一緒にクエストに行つたら迷惑を掛けちゃうかもしない』

「いや、そんなことは……」

「だから、時間をください。ケイスさんに迷惑を掛けないくらいま
で強くなつておきますから」

ネブギアの顔は、真剣そのものだつた。

「わかつた。だつたらさ、俺もその約束を忘れないよつ」

「そう言って、俺は1振りの剣を戻還した。
うまくいつてくれよ。

「出でよ、『バルムンク』」

一振りの剣が出てきた。そして、術式固定。

「これを、預かっておいてくれ

「これを、わたしに？」

「うん、持つておいて欲しい。そして、それで戦えるよつになつて
いてくれるとうれしいな」

「は……はいっ！」

ネプギアは、うれしそうにその剣を両手に抱えていた。

そして時間は2日ほど過ぎたある日。

「それじゃ、そろそろ行くよ」

おれは2日ほどかけて旅支度をしていた。

何しろ、地図も良く分からないので色々と頭に入れる」とが多すぎ

るからだ。

「うん。 それじゃ、元気でねー？」

ネプテューヌは、元気に見送ってくれている。

それに、彼女には一つ頼み」とをしておいた。

他の国の女神に、俺が会いに行くといふことを伝えてもらひたい。う

ことだ。

「ネプテューヌ、アレのこと頼んだよ？」

「分かってるよ。みんなに連絡しておくから、安心しておいで」

それが一番心配なんだよ。

「ケイスさん、気をつけてくださいね」

ネプギアは、いつも通りに話しかけてくれた。

「ああ、ありがとう、ネプギア。そっちこそ気をつけろよ？」

「もちろんです。ケイスさんと約束しましたから。強くなるって

そう言いながら、ニコシと笑ってくれた。

「そうだね。それじゃ、剣の手入れも忘れずにね」

「はい、大事に預からせてもらいます！」

そう言いながら、腰に下げている件に目を向ける。

先日預けた『バルムンク』だ。

「それじゃ一人とも、元気でなー！」

そう言って、2人の女神と別れた。

さて、と。どこに行こうか。

やつぱり順番的にはルヴィーかなあ。

新たな国を目指し、俺は歩き始めた

... S A V E

第6話 旅立ち（後書き）

ルウェイーを田指して旅をするケイス。そこで、新しい出会いが待っていた。

次回、第7話 新たな出会い（仮）

次回は、誰と出会いんだろうねえ。

ケイス「俺が知るか！」

まあ、順当に行けば、ルウェイーの双子だろうなあ。

ケイス「他にあんのか？」

そりや、プランつてこともあるかもしないし、道に迷つてラステイションに行くこともありえるし。

ケイス「おい、後者は笑えねーぞ」

ケイス「そういえばさ、ネプギアに渡した『バルムンク』だっけ。アレって、出せたのか？」

ライトセイバーの電源が切れたら出す予定だったけど、初めのうちでそんなことあるわけないしねえ。

それに、元々は渡す予定はなかつたのだよ。

ケイス「だつたら、どして」

いやあ、後々のことを考えて。

ケイス「だつたら、どして」

ケイス「だつたら、どして」

ケイス「だつたら、どして」

それでは、また次回。

祝！初感想を頂戴しましたー。

励みになります。ありがとうございます。

と書いた上で。

プラネットコース編が終わったので、

取得した武器や設定をまとめておきます。

【取得した設定】

爆炎斬鬼丸の技、能力、装備。

【装備】

転移の数珠、およびそこにしまわれていた武装の数々

転移の数珠：別次元から武装などを呼び出すためのアイテム。
似たものに、四次元ポケットや王の財宝ゲート・オブ・パレロがある。

転移の数珠での保管場所に、ケイスの武器も存在している。
転移の数珠は、ケイスの首にネックレスとして装備されている。

【技】

虚空雷撃剣

剣をすばやく横に薙ぎ、敵を切り捨てる技。

剣速が速いため、熟練の剣士でも反応ができないことがある。

【能力】

超高速並列思考

簡単に言ってしまえば、やるいと思えば右手と左手で別の相手と同時に戦える程度の能力。

そのため、きちんと「見ていれば」どにどのような攻撃が来るかがすぐに分かる。

3話では、それおかげでアイエフの攻撃を凌いでいた。

敵の察知

ただし、機械系のモンスターに限る

斬鬼丸自身が機械の塊なので、そのセンサー類で検知している。

「ケイス」で、結局『斬鬼丸』って何者なんだ？」

「えと、前にも書いたと思うけど、ポップコムって雑誌に載つてた『リバーサー』って漫画に出てくる、機械剣士」

「ケイス」で、何でそれをこの小説に入れようと思つたんだ？」

「カツコイイから。以上」

「ケイス」「おいおい」

「まあ、3割くらい冗談。本当は、1回このネタで書いてみたかっただけ」

「ケイス」ちょい待て。7割くらい真実じゃねーか」

「まあね。それより、本当はその漫画に出てくるセンカってのとシンコンつてキャラの力を使いたいってのが本当のところ」

「ケイス」で、出てくるのか？その2人は

「もちろん。だって、3話で出したでしょ？それぞれの大陸に1人ずつ仲間がいるって」

ケイス「セーにつながるのか。…あれ? そういえばもう一人の仲間つてのは?」

「ああ、ダイクってこう見えないおっさん」

ケイス「えー」

「…の姿をした世界最高の魔導師」

ケイス「セーの『えー』を返せ」

「ロイツは『ロイツです』こんだよ。魔法に強けりや機械にも強い。んでもって、ある装備品のおかげで魔力の消費がほとんどナシ」
ケイス「ちよ、おまつ。魔法戦に関しては最強キャラになるじゃねーか」

「そだね。けど、『ロイツ』には弱点があつてな」

ケイス「まつまつ。で、その弱点とは?」

「女に弱い」

ケイス「……弱点ってこうのか? それ」

ケイス「せういえば、前回(6話)の最後に俺、バルムンク出して、ネプギアにあげてたけど」

「ほこほこ」

ケイス「こつ出したよくなつたんだ？」

「野良ゾリコン倒した後、レベルが上がつて」

ケイス「え？」

「ちなみに現在、数値の上ではレベル30くらいだから」

ケイス「他には、何が出せるんだ？」

「とりあえず、何でも。使つた回のあとがきにでも説明を書くやー」

ケイス「適当だなあ」

「やういえば、書くのを忘れてた」

ケイス「何を」

「この世界の設定」

ケイス「いやいや、設定はあるだろ？原作があるんだし」

「いやいや。」、「原作の4年前。女神たちがマジックンヌ退治に出かける1年前の話だから」

ケイス「まあ、そりゃそつだけど」

「ちなみに、1～6話で何か不思議に思わなかつた?」

ケイス「何を

「ん。ネプギアが女神化しないこと

ケイス「あ、そういうば

「ということじで。現時点では、女神候補生は女神化できませんって」と

ケイス「何で?」

「いやね、不思議に思つてたんだよ。何でネプギアだけマジHコン
ヌ退治に連れて行つてもらえたのか。俺の中の答えでは、原作の3
年前では女神候補生のうち女神化できるのはネプギアだけだつたん
じやなかろうかと」

「ルウイーの2人についてはミナが止めていたつて可能性もありえ
るけどな」

ケイス「まあ、あり得るなあ

「といふことで、そんな設定で行きます

幕間 設定のまとめ～プラネットコース編～ + 駄話（後書き）

設定を書き忘れていたので、急遽こんな形で出しました。

今後は、何か新しい要素が出たら、あとがきに書くようにしないで
は。

第7話 新たなる出会い（前書き）

プラネットユースでの事を終えて、ルウェイーに向かっているケース。 これは、どのような出会いが待っているのか

第7話 新たなる出会い

「ああ、ルウェイーはまだかー」

俺はそう言いながらプラネットユースとルウェイーを結ぶ街道を歩いていた。

気候的には、どちらかと言えば寒いに属するだらうか。

雪が降つてゐるため、寒いのは当たり前なわけだが。

そのため、先ほど立ち寄つた街でコートを買い、それを羽織つている。

「マスター、無理をせず車で行つたほうがよかつたのでは?」

そう言って、胸ポケットから顔を出すアーンヴァル。

え? ロイツがどこから来たかつて?

ロイツは、斬鬼丸の装備の一部を使って組み上げた、俺オリジナルの兵装。

姿形、声まで武装神姫のアーンヴァルと一緒にだ。

しかも、大きさも15cmくらいときている。

ただ、彼女が装備できる兵装が全くないため、素体状態のままだ。
「いやいや、歩いていつたほうが、生の情報を集めやすいだろ?」

それに、原作の誰かに会えて不思議じやないしな。

side ???

ちょっと街から離れたところまで来ちゃつたなあ。

それに、目的のキノコもたくさん取れたし。

「そろそろ、教会にかえろつか。ミナちゃんも心配してんだひつじ

「……うん」(「ククク')

ミナちゃんには、キノコを探つてくるとしか言つてないから、早く帰らないと。

じやないと、また『そろそくたい』を組織してわたしたちを探しに

行きかねない。

そう思つた時だった。

ちょっと離れたところから、

『ギュイーン、ガシヨン、ガシヨン』

と機械の動く音が聞こえた。

わたしたちは、咄嗟に岩陰に隠れてその音の主を探した。

前に、お姉ちゃんに教えてもらつた、怖いモンスターの一体。たしか、D S T T つて名前だつたと思う。

だけど、あのタイプのモンスターは、国際展示場の方にしかいないつて聞いてたのに。

「どうしよう、ロムちゃん」

「……こわい」（びくびく）

ほんとに、どうしよう。

教会に帰るために今は隠れてるといふから出なへちゃいけないし、出たらあのモンスターに見つかっちゃう。

そんな時。

「くちゅん」

ロムちゃんがかわいいくしゃみをした。

『ルルルルルルル、ギュイーン、ギュイーン』

間違いなく、見つかっちゃつたみたい。

D S T T は、確実にわたしたちのいるといふ方向かつてた向かつてるようだつた。

何か、ひつかかる。

「どうしたんです? マスター。変な顔をして」
これは、突つ込まないといけないんだろうつか。いやいや、何かそもそも言つていられない状態のような気が。

side ???: END

「いや、機械の探知に何かが引っかかったみたいなんだ。アーンヴァル、お前の方の探知に何か引っかからないか？」

「えっとですね、……あ。人が一人近くにいるようです。大きさから言って子供のようですね」

「方角と距離は？」

「東に500メートルと言つていろでどうか」

うん、大体あつてる。

ん？ 何か、移動速度が速くなつたな。移動方向は南といつところか。

「あ、マスター。先ほどの反応ですが、片方だけが動き出しました。

東方向へ」

「もう片方は？」

「そのままどどまつています」

あ、こっちの反応も、南東へ方向を変更した。

と言つことは、この一人が危ない！

俺はそこから東の方角へ駆け出した。

side ???

どうにかして、ロムちゃんから引き離さないと。

そう思つて、わたしは隠れていた岩陰から飛び出した。

「モンスター、わたしはここよー、追いつけるもんなら追いついてみなさい！」

わたしはそう言つと、一目散に走り出した。

そんなに移動速度の速そうなモンスターじゃないし、楽勝よね。

でも、わたしの予想は悪いほうに裏切られた。

モンスターは飛行形態になつてわたしのほうに迫ってきた。

そして、田の前にモンスターが来てしまつた。

もうだめつ。

わたしはそこで田を閉じた。

side ??? END

やべえ。

田の前では女の子が走っていて、それにロボットが飛行形態で近づいていた。

こうなつたら、じつに注意を引き付けるか。

そう思い、アルヴォPDW1-1を呼び出す。

そして、女の子に当たらぬように、しかも近づきながらトリガーを引く。

キンキンキンッと弾かれてしまったが、注意を引き付けることはできたようだ。

side ???

田を閉じて衝撃に備えていたんだけど、何も来る気配がない。

さつき、なにか金属音が鳴つたみたいだけど、じつはひつ。

わたしはおそるおそる田を開けてみた。

そこでは、さつきのモンスターと見たことのない男の人が銃で応戦していた。

「やつぱ、銃じや駄目か」

そう言って手に持った銃が消え、代わりに剣が姿を現す。

「とりあえず、これでどうだっ！」

そう言ってロボットに一撃を加え、後退させた。

side ??? END

お。田を開いたな。

「よお、無事か？」

「うん、どうにか無事だけど。アンタ誰？」

「お、ついでにキツイお言葉。

「俺はケイスつてんだ。よろしくな」

「わたしは……つて。アイツが何か撃つてきそうよ？」

そう言われてロボットのほうを見ると、何かチャージをしていた。

「アーンヴァル、電磁フィールド展開だ」

「イエス、マスター」

アーンヴァルはそう言ひと俺たちの前にフィールドを張つた。ロボットは、何かビーム方のよつたものを撃つてきたが、電磁フィールドに阻まれ、俺たちに命中することはなかつた。もちろんその後、剣のみで倒してやりましたよ、ええ。

さて、と。

「そういえば、誰かもう一人いたんじゃないのか？」

そんなことを言つてると、こちらに誰かが走つてくる足音がした。足音がするほうを見てみると、ロムが走つてきていた。

そして、ラムに抱きついていた。

「……ラムちゃん、大丈夫？」

「うん、この人がアイツをやつつけてくれたから

「……ら

「ら？」

「ラムちゃんを……まもつてくれて……ありがとうございました」

そう言つて、ロムは深く頭を下げた。

顔を上げたとき、顔が真つ赤だつたが、囁んだのが恥ずかしかつたんだろうか。

こうして、俺はルウェイーの女神候補生と出会つた。

まあ、本人たちはまだ明かしていないが。

..... S A V E

「はい、というわけでルウェイーの双子女神候補との出会いの話でした」

ケイス「そういえば、何でアーンヴァルが出てきるんだよ」「ということは、アーンヴァルの説明を下に」

アーンヴァル

原作^{リバーサイ}では、バトルユニットといつ名称で出てきています。姿は、ダースベーダーのヘルメットのみ見たいな感じ。型番はど忘れしましたが、愛称は『ちぢこ丸』『かしこ丸』だった記憶が。

本当は原作のままの姿で出す予定だったのですが、諸般の事情で武装神姫のアーンヴァルの姿となりました。

能力としては、索敵能力および電磁フィールド（いわゆるバリアつすね）を張ることができる。

人語を理解し使用することができるため、ロボユニケーションをとることができる。

「まあ、今のところは物理攻撃用のバリアを張る係って感じかな」

ケイス「かわいそうに。それだけのために……」

「物語が進むと、実はちょっとしたキーパーソンになる」

ケイス「おお」

「……といいなあ」

ケイス「おい…」

「…………」

それでは、
次回、第8話 そしてルウェイーへ（仮）
でまたお会いしましょう。

第8話 そしてルウェイへ（前書き）

成り行きでロムとラムを助けたケイス。
さて、この後彼はどんな行動を取るのだろうか。

第8話 そしてルウェイーへ

「へえ、ロムちゃん」とラムちゃんって言つんだ」「俺は今、ロムちゃんとラムちゃんと一緒に歩いている。

彼女たちがルウェイーへ帰る、というので護衛を買って出た次第だ。

「うん、わたしがラムよ。よろしくね」

「…………わたしが…………ロム…………よろしく（ボソボソ）」

「俺は、ケイスって言つんだ。よろしくな」

「うん。よろしくそれであげる」

「…………うん」

あー、原作通りにラムちゃんはお転婆、ロムちゃんは無口つて言つ
か恥ずかしがり屋か。

「そういえば、ケイスはルウェイーに何をしに来たの？」

「何をしに、とこうか。ちょっとルウェイーに行つてみよつと思つて
な」

まあ、本当は力を手に入れるためだが、表向きはこんなもんだろ。

「それに、ルウェイーの女神様にも会つてみたかったしな」

そう言つと、ロムとラムは顔を見合わせて二コ二コ笑つた。

「ケイス、アンタ運がいいわよ。わたしたちが、このルウェイーの女
神なんだから」

「…………正確には、女神候補生」

うん、知つてる。

「へえ。つてことは、今の女神様の妹なのか。ロムちゃんとラムち
ゃんは」

そう言つと、一人そろつて「うん！」と答えてくれた。
元氣のあることば、良いことだ。

「でもね、おねーちゃんは重い病氣にかかつてゐて、ミナちゃん

が言つてた

いやいや、それは初耳だぞ。

「……うん、なおりづらい病氣だつて、言つてた

「もしかして、今もベッドで横になつてるのか?」

「ううん。ふだんは大丈夫なの。でも、たまに『まつせ』が起つて

つて言つてた

「……そのときには、近づこちやいけないつて、ミナちゃんに言わ
れた」

あ。もしかして……。

「ちなみに、なんて病氣つて言つてた?」

「「ちゅーんびょう」「

やつぱりか。（笑）

「うん、それは発作が起つてゐるときには近づかないほうがいいな
主に精神的な意味で。

「そういえば、さつと出でたミナちゃんつて誰?」

「ミナちゃんは、ルウェイーの教祖なの」

「教祖なの」

「でも、怒るとさつといつべつ怖いの」

「……こわいの（びくびく）」

「でも、すごい優しいの」

「……うん、やさしいの」

ああ、確かに怖いだろうなあ。あんな黒いオーラまで出るような怒
り方は。

side //ナ

ロムちゃん、ラムちゃんがなかなか帰つてこない。

『きのこをとりにいってくるねー』

と言つて出かけてからすでに数時間。

すでに帰つてきてもおかしくない時間なのに、なかなか帰つてこな

い。

「ブラン様、あの二人遅くないですか？」

私は、本を読んでいるブラン様にそう問いかける。

「……大丈夫、多分寄り道をしているだけ」

ブラン様はそう答えるけど、私は気が気じゃない。

「やっぱり、遅いです。もうそろそろ口も暮れるといつに、一向に帰つてこないじゃですか」

なんと言われようと、心配なものは心配なのだ。

「……だから、大丈夫。そのうち、元気に帰つてくれるわ」

「ブラン様は心配じやないんですか！？」

私がそう激昂すると、ブラン様は読んでいた本を閉じていつ言った。
「……心配に決まつてゐる。でも、あの子達のこと、少しさは信用してあげて」

ブラン様がそう言つた直後。

「ただいまー」

と元気な声が教会の中に響いた。

「ほら、ね」

side //ナ END

ラムちゃんが元気よく「ただいまー」と言つて教会の扉を開けて入つて行つた後を、小ちく「……ただいま」とビクビクしながらロムちゃんが入つていく。

怒られちゃうのかな、二人とも。

その後に続いて、俺が「失礼します」と言つて教会の扉をくぐつた。入つていつたら、すでにミナによるお小言が始まつていた。
もっと早く帰つてきなさい、とかあまり遠くに行かないように、とか言われているようだつた。

そして、ひとしきり怒つたミナが顔を上げたとき、俺と田が合つてしまつた。

「あ、もしかして見られていました？お見苦しいことを見せして申し訳ありません」

そう言って、俺に頭を下げてきた。

「この教会の教祖、西沢ミナと申します。失礼ですが、何の御用でしょりか」

「申し遅れました。私はケイスと申します。冒険者をやつております」

そう言つと、ミナさんは何か思案し始め、「あ」と声を上げる。

「もしかして、プラネテュースから来た方ですか？」

「え、ああ、はい。まあ、一応」

「そうでしたか。プラネテュースでの」「活躍、聞き及んでおります」
活躍つて何だよ。

「活躍つて言つと、わたしたちも助けてもらつたんだよ、ミナちゃん」

「……うん、かつこよかつた」

「助けてもらつた！？」

「そうよ。モンスターに襲われてこると」「お力を助けてもらつたの」

「……助けてもらつた」

「おい、ロムちゃん」「ラムちゃんよ。

何か、あつさりしすぎじゃね？」

「えええつと。本当に、本当にありがとうございました」
ミナさんはワタワタしながら俺に向回も頭を下げてくる。
うわあ、この人本当に真面目なんだなあ。

「ロム、ラム、二人はちゃんとお礼した？」

そんな声がしたほうを向くと、プランがロムちゃんとラムちゃんの頭を撫でながら、話をしていた。

「うん、もちろん！」

「……お礼、言った」

「……そう

そつぱつたあと、ブランは俺のほうを向いてこうつぱつた。

「私からもお礼を言わせてもらひ。妹たちを助けてくれて本当にありがとうございます」と

りがとう

そう言って、柔らかな表情で微笑んだ。

「私はルヴィーの女神。普段はブランと名乗つてゐる。よろしく

そう言って、右手を差し出してきた。

「冒険者のケイスとあります。お会いできて光榮です」

俺もそう言いながら右手を差し出し、握手をした。

……SAVE

第8話 そしてルウイーへ（後書き）

お前、礼儀正しいのな。

ケイス「いや、そりゃこの世界で生きていかないといけないんだから、当然っしょ」

まあ、そつかもな。

そういえば、今回アーンヴァルが全然出てこなかつたな。

ケイス「アンタが前回あれだけ脅かすから、出て来れなかつたんじゃないのか？」

あー、そんなこともあつたねえ。

アーンヴァル「『そんなこと』もあつたねえ』じゃないですかー（ドゴッ）」

ケイス「おー、あんばる。適度にしつけよ？」

止めろよ。

あんばる「つて、何で私の名前が『あんばる』に？」

いじちゃん。いじ、本編じゃないんだし。

あんばる「よくねーです」

それじゃ、次回予告こくよー。

あんばる「また今回も無視つすか」

「プラン」次回、『ああつ、女神さまひ』

すまん、プラン。マジでやれはやめさせてくれ。

「プラン」「えー」

えーじゃなー。

次回、「女神と明るい食卓と大事件（仮）」でまたお会いしまじゅう

ケース「やつこえーば、なんでいつも（仮）がついているんだ？」

ん？『気分』によつて変わるかもしれないから。

ケース「んな」とで変えるなー

第9話 女神と明るい食卓？（前書き）

ロムとラムを連れてルウェイーの教会へ来たケイス。ロムとラムの怒られイベントが終わつた後……。

第9話 女神と明るい食卓？

「あの、よければ今日はもう遅いので、教会で寝泊りされませんか

ミナさん？
教祖ミナさんがそう持ちかけてきた。

今は夕刻だから、そこまで遅い時間ではない。
けど、さすがに今から街で宿を取るには遅すぎる時間だつた。
それに、プラネテユースを発つてからずっと野宿だつたため、あり
がたい申し出だつた。

「お言葉に甘えさせていただきます」

俺はそう言つとミナさんに頭を下げた。

「それに、この一人を助けていただいたんですから。教祖として、
人として当然のことをしているだけです」

彼女はそう言つて、祭壇の手前の扉から出て行つた。

「腕によりをかけて夕食を作りますので、楽しみにしていてくださいね」

と言い残して。

ロムとラムは、ミナを追いかけるようになり、同じ扉から出て行つた。
夕食の準備を手伝つのか。

感心感心。

そんなこんなで気がつけば、教会の中には俺とプランが残されてい
た。

プランはあまり饒舌な方ではない——(とこりより、どちらかと云つ
と無口だらう)ため、物静かな空気が漂つていた。

「……座つたら?ここには、椅子がたくさんあるから
先に声を発したのは、プランだつた。

「あ、はい。失礼します」

そう言いながら、俺は椅子に腰を下ろすのだった。

俺がそんなことをしているときも、ブランはずっと本を読んでいた。

「どんな本を読んでいるのか、非常に興味がある。

「あの……。先ほどから、熱心に何の本を読まれているんですか？」

俺がそう言つと、ブランは本から目を離しきりを見てきた。

そして、本を持ち上げ俺のほうへ見せた。

「これ

本の表紙にはこう書かれていた。

『家族との団欒。夕食時の会話100選』と。

苦労してゐるんだなあ、ブランも。

俺は、ブランから少し離れた場所に座ることにした。

……邪魔しちゃ悪いからな。

そして、胸ポケットからアーンヴァルを出してやる。

「アーンヴァル、すまん。もう少し早く出してやればよかつたな」

「酷いです、マスター。5日間くらい外に出ていなかつたよつた気がします」

気のせいだ、アーンヴァル。

「それで、どうしたんですか？ マスター」

「いや、今の武装を確認しておこうと思つてな。お前は、転移の数

珠の向こう側が分かるだろ？」

「はい、それはもちろん。そういう設定になつていてますから「設定言つた。

「で、俺の戦い方に合つ武器を見繕つて欲しくてな」

いつまでも、M4ライトセイバーとアルヴォP.D.W.1-1だけでは心許ない。

そこで、アーンヴァルに選んでもらひ合つて法だ。

「やうですねえ」

そう言つて、アーンヴァルは押し黙つた。

おそれく現在武装の検索をしているのだね」。

「剣に関しては、ギュリーノスカーレーヴァティン、銃に関してはさほど変わりませんが、手数と言つ意味ではアルファピストルなどが良いかと。または、今のアルヴォ P D W 1-1を光学武装に改造するか、でしょうか」

「へえ、結構いいのが出てきたじゃないか。

「あれ? この武装は何でしょうか。私の中のDBに入っていないものがあります」

「お前が把握していない武装? そんなことがあり得るのか?」

「いえ、通常あります。それにしても、何でしょうか。この、

『種別・魔法の杖』といつものは」

「魔法の杖?」

「はい、武装の情報を調べたらその単語が出てきました

一体なんだろ? うか。

そのうち、呼び出してみよ?。

「おねーちゃん、ケイスちゃん、『はんできたつてー』

ラムちゃんが教会の中に入つてくると、大きな声でそう言つた。

「ラム、そんな大きな声で言わなくとも聞こえる

「そりがなー。だつて、この間聞こえてなかつたみたいだつたしまあ、本を読んでいると聞こえなーこともあるかもな。

「……ケイスさん、『はん、たべよ?』

俺の近くには、ロムちゃんが来ていた。

「そうだね、それじやいこ? うか

そう言つて立ち上がり、ロムちゃんの頭を撫でてから扉へ向かおつとした。

そういえば、どこでどう行けばいいんだろ? うか。

そう思つていると、ロムちゃんは俺の手を握つて、「うか」と言つて引っ張つてこつた。

side ラム

あ、口ムちゃんが頭を撫でられて笑顔になつて。あんな笑顔、私にもあまり見せてくれないのに！

あのケイスつて人、どこに行けばいいのか分からぬみたい。しうがない、案内してあげようか。

つて、口ムちゃんが手を握つて連れて行つた！？あんなに積極的な口ムちゃん、見たことないよ！？うう、なにがあつたんだろ……。

「おねーちゃん、私たちも早く行！」

「ラム、分かつたからそんなにせかさないで」

おねーちゃん、早く！

早くしないと、口ムちゃんが取られちゃう……。

side ラム END

そんなこんなで食堂にて夕食の時間。

今日は口ムちゃんとラムちゃんが取つてきたきのこを使つたきのこ鍋だつた。

俺の横には口ムちゃんが座つていて、小さな体を一生懸命使つて鍋の具を取つてくれている。

「んしょ。これ……と、これ。あと……これ、も」色々と取つてくれているのはうれしいんだけど……。ラムちゃんからの視線が痛い。

視線で人が殺せるなら即死つて感じで。

「……はい、ケイスさん。ビアード」

やつ言いながら色々と盛り込まれた器を渡された。うん、鍋のお代わりはしなくて済みそうだな。

みんなに鍋が行き渡り、よつやへ夕食開始。

「いただきます」

そう言つて、みんなでまんこを食べ始めた。

「うそ、おこしいです」

「そうですか。今日はロムちゃんとラムちゃん一人とも手伝つてくれましたからね」

「そうよ。私たちが手伝つたんだから、おこじこに決まつてんじゃない」

「こつしょうけんめい、お手伝い、した

「せうか、そりやおいじいはすだよね」

……おかしい。

「……」している中で一人だけ会話に参加してこない。

もちろん、プランさんだ。

さつき、読んでたあの本の知識を生かすのは今ですよ。そう思ふ、プランさんのまつを見てみた。

……一心不乱に食べていた。

ダメじゃん。

夕食を食べ終えた後、プランさんが話しかけてきた。

「ケイス。明日、ヒマ?」

「まあ、暇つちゃ暇ですが

「ちょっと、付き合つて欲しい

「分かりました」

会話が終わると、プランさんは立ち上がり、「自室にいるから。用

があつたら来て」と言つて食堂から出て行つた。

..... S A V E

第9話 女神と明るい食卓？（後書き）

ケイス「タイトルに偽りがあるが」

いや、しようとしないだろ。いつもなつちやつたもんは。

ケイス「やりようはあつたんじやないのか？」

まあね。

本当は、プランが嬉々として話をしているつて話にしようとしたら
だが……。

ケイス「したんだが？」

俺の中のプランはもう一筋繩じやいかなかつた。

ケイス「それに、前回の予告にあつた「大事件」も削除されてるし」
さすがに自分の中では、いつもの2倍くらいになつそつだつたんで分
けた。

ケイス「そういうえば、今回新しい武装が出てきたな、言葉だけだが
うむ。と書つことで、説明行きます。

ギュリーノス

種別：大剣

特徴：基本は金属の剣だが、刃の部分がライトセイバーのよつこ
エネルギーでコーティングされている。

レー・ヴァ・テイン

種別：小剣

特徴：炎の剣。ライトセイバーが斬る剣なら、これは溶かして断つ剣。

アルファピストル

種別：ハンドガン

特徴：装填数が多いが威力がアルヴォ P D W 11には劣る。が、耐久力が高いため別用途で使用することを検討中。

アルヴォ P D W 11（エネルギー弾モード）

種別：ハンドガン

特徴：威力はアップするが、エネルギーの消費量がぐっと増える。コレを使うのであれば、ライフル銃のほうがはるかに効率的かも知れない。

こんなところか。

ケイス「で、今回出てきた「魔法の杖」って、次回はちゃんと出てくるのか？」

うん、その予定。

ケイス「つてことは俺のパワーアップか

パワーがアップするか分からぬけどね。

ケイス「え、」

それでは次回、「大事件発生（仮）」でまたお会いしましょう

ケース「また（仮）つてつくのな」

第10話 大事件発生（前書き）

ケイスはルウェイーの教会で夕食を『馳走になつて』いた。
そして、その日の宿も提供してもらつていた。
そんな夜のこと。

第10話 大事件発生

side ???

ええと、どうだったかしら

私はそう思ひながらとあるダンジョンの中を歩いていた。

たしか、ここに迷ひだと思つたのに。

「どなたか、いらっしゃいますか？」

私は誰かに向かつてその声をかけた。

だが、通常は誰も答えるはずがない。

先ほどまで存在していたこのモンスターもすべて倒してしまった
し。

ま、私がここから出れば復活するんでしようけど。

「誰じや？」「そんな時間に」

ふと、そんな声がした。

……探し物、ゲット。

「ええ、道に迷ってしまったんですよ、『ゲームキャラ』さん

「まう、こんな時間に辛かるわ。わしが案内してやりたいのは山々
じゃが、如何してもこの地を離れるわけに行かなくてのう」

「えええ、良いんですよ。貴方はそこにいれば。

むしろ、そこから動かないから助かります。

「大丈夫ですよ、もうわかりましたから。だ・か・ら」

そう言って私は得物を振り上げる。

「そこで粉々にしてあげますッ」

そして、振り下ろす。

バキンッ、と音を立ててゲイムキャラは割れた。

「……お主、……何者、じゃ？」

「ああ、まだ生きてるみたい。しぶといですね。

「……まあ、いいでしょう。私は、『マジックンヌ』に『』するもの、
とだけ言っておきます」

言い終わった後、私はゲイムキャラだったものを粉碎した。

「さて、これでのキラーマシンの封印を解きました。どう出ます
か、ルゥイーの女神」

side ??? END

次の日の朝。

まあ、昨日は旅の疲れもあったのか、夕食の後に部屋に案内されそのまま寝てしまっていた。

何回か部屋をノックされたような気がしたが、疲れには勝てず…。

そして、教会のまつに行つたのだが、ミナさんが何やら慌しく動いていた。

「おめでとうございます、どうしたんですか？」

「ケイスさん、ちゅうじことひー」

そつぱつと、ミナさんが駆け寄つてきた。

「実は、『世界中の迷宮』と言つところで、大きなモンスターの発生が確認されて」

「世界中の迷宮？」

「あ、そうでしたね。世界中の迷宮と聞ひのせ、いろいろ北西に
つたところにあるダンジョンです」

「あれでモンスターが発生した、と」

「ええ。すでにブラン様にもお伝えして言つてもうらつていますが、念のためケイスさんにも行つていただけたら、と思いまして」

まあ、モンスターを倒せるのは頼りなくなるからなあ。

「俺でよければ、いくらでも協力をせんります」

別に断る理由もないし、それに今田はブランさんと一緒に行動する約束してたしな。

「あつがとうござります。それで申し訳ないのですが、ビのくらいで出発できますか？」

「やつですね、すぐにでも行けますよ」

「それでは、お願ひでできますか？」

「はい」

そう言ひて、俺は教会から出て行ひました、のだが。

「すいません、何か腹に入れるもの、ありますか？」

……あまりにもカッコ悪かった。

そのあと、ロムちゃんラムちゃんにご飯を用意してもらつたのだが、ロムちゃんと帰つてきたら遊ぶ約束を強引に取り付けられた。

だつてなあ。「約束しないと朝ごはん抜きです！」って言つて、じやあいこやと言つと田をウルウルさせて泣きそうになるんだから。

あれは、反則だよ。

そんなこんなで世界中の迷宮。

来たんだが、何か嫌な予感しかしねえ。

だってや、やつきから機械の駆動音が聞こえてくるんだぜ？

世界中の迷宮と機械の駆動音、つて言つたらキラーマシンしかないだろ。

入つてみたら、やっぱりだつた。

で、ブランさんは苦戦してるわけだ、物理で殴る系だし。

「ケイス、いい所に来たな。あつちのやつらを頼むぜ」

で、「ううおいやあああ」と言こながらキラーマシンの群れに突っ込んでいった。

ブランさんは、やっぱり堅いなあ。

ま、泣かれたとあつちや逃げる訳に行かないつしょ。

「アーンヴァル、レー、ヴァーテインを出してくわ

「了解です、マスター」

次の瞬間、俺に右手にレーザー・テインが現れた。

それじゃ、行くぞ。

side ???

見たことない人が「キラーマシン」と戦つてますね。

かわいそつに。人間には敵うはずが…。

あら。倒されてしましましたね。

それも、随分あつたり。

ちょっと、興味が湧きました。

「ねえ、貴方」

side ??? END

「ねえ、貴方」

上から、そう声が聞こえてきた。

俺が上を向くと、銀髪の少女が空中に佇んでいた。

「誰だ、君は

少なくとも原作にはこんなキャラは出てきていない。

銀髪で黒いゴスロリ衣装を着ている奴なんて。

「あら、怖い。でもそういう場合は男性から召喚するものではなくて？」

今つて、そういう場面でしたっけ。

とつあえず無視を決め込み、キラーマシンを倒すことに専念しようと愚ったのだが。

「…女性を放つておくなんて、感心しませんわね」

そつ言いながら、何か呪文のよつなものを唱えはじめた。

そして、その力を解き放つ。

「雷よ、
雷すち
降れ」

彼女がそつ言つと、雷が俺めがけて降り注ぐ。

「アーンヴァル、電磁フィールドを高速展開ー！」

「了解です！」

アーンヴァルによつて電磁フィールドが生成された、が。

「うがああああつーー！」

電磁フイールドを素通りし、そのまま俺に直撃した。

「アーンヴァル、大丈夫か？」

「ど、どうにか、ですが」

そつか、向こうは魔法だった。これじゃ、止められるはずがない。

「あー、あつさつ終了ですか？少しばは耐えていただかないと

そつ言いながら、第2波を用意しているようだ。

何か、手はないか？

そつこいえば昨晩、アーンヴァルが言つていたな。

転移の数珠の領域内に魔法の杖があつたつて。

「アーンヴァル、魔法の杖に武装変更を頼む」

「え、マスター。魔法が使えるんですか？」

「いや。でも、魔法の杖だつたらどうにかなるかと思つてな

そつ言つてレー・ヴァーテインが右手から消えた。

「マスター、今先ほどの攻撃であれば私もマスターもあと2、3回が限度です。正直、それ以上は命の保障ができません」

「上等…」

そして、マジックワンド魔法の杖が召還された。

ん？どこかで見たことあるぞ、これ。

「これは…閃光の杖か！」

そう言った次の瞬間、周りの時が止まった。

「当たり、か」

「どうやらそのようですね」

「ダイク・ザ・ウイザードか」

「私をご存知でしたか」

「この人はダイク。リバーサーという物語で、辺境の大魔道師とまで呼ばれた人だ。」

「まあ、ね。それで、貴方も俺に力を貸してくれるのか？」

「ええ、神との契約ですし、それに貴方が面白そうな方だったので」

「面白セーフ？」

「ええ。力に溺れず、力を過信せず、あくまで自然に流れていると
ころが」

「アンタ、やつぱりそういうのうが『先生』なんだよ」

「うしてこらへんうにとも、俺の中にダイクの知識が流れてくる。

この人の外見からは、想像し得ない禁呪もたくさんあるんだなあ。

「さて、これで終わつのよつです」

「ああ、ありがとう、先生」

「また会つ機会があれば、そのときには色々と話したいものですね」

「はい、そのときには是非」

その言葉に、先生はうなづいてくれた。

それ以降、先生の声は聞こえなくなつた。

そして、また世界に時が戻つていく。

さて、と。

「マスター、反撃の準備はよろしいですか？」

「ああ、もううん！」

次は止めることができる、はず。

「それでは、」^{いかり}から行かせていただきます。雷よ、穿て

空中にいる少女から、そのような声が聞こえた。

そして、雷が俺に向かってくる。

「…^{ロン・ウォール}魔力壁」

俺は左手を掲げて、^{かがいあるいひば}魔法を唱えた。

次の瞬間、その左手を起点として俺を守る魔力壁が形成される。
これがロン・ウォールだ。

そして、その魔法で雷は止められた。

「なつ…」

「さて、反撃開始だ」

……SAVE

第10話 大事件発生（後書き）

ケイス「大事件過ぎるんですけど」

「どうか、この事件がやりたいがために女神たちの出撃の1年前から物語にしたんだから、しちゃうがない。」

ケイス「お前か、お前が黒幕なのか」

「ううう、落ち着け。
俺が黒幕なわけがない。」

ケイス「にしても、あの『スロリ少女は何者だ?』

「ああ、彼女の名前くらいだつたら次回明らかになるかも。
正体は、まだまだ先。」

ケイス「ちなみに、あいつが放った雷は何で電磁フィールドで止められなかつたんだ?」

「それは、電磁フィールドでは、魔法は止められないから。」

ケイス「で、やつと俺がパワーアップしたな!」

「うん、やつと魔法を使えるよになつたねえ。
とはいって、あまり多用はしないと思つよ。」

ケイス「えー!」

基本、君は剣士 + 銃士なんだから。

ケイス「まあ、そうだな。今までがそつたから急に魔道師になれって言われても困るからな」

だから、差し詰め魔法剣士 + 魔法銃士つてところか。

とりあえず、今回出てきた人物 + 技の説明

人物

銀髪のゴスロリ少女

名前は決まつてますが、上で書いたとおり次回で。

とりあえず、魔法重視の魔道師です。

ダイク・ザ・ウイザード

本編で書いたとおり、リバーサーと言つ作品に出てくる主人公の仲間。

かなりの知識人で、今回は魔法以外の知識もケイスに受け継がれています。

ちなみに、持ちネタの禁呪がいくつありますが、全部命に関わるので封印。

武装

閃光の杖

高速詠唱の補助、詠唱の代替、魔力ブーストが主な機能。

魔力ブーストはケイスの場合、元々の魔力量はそんなに大きくないのですが、魔力量が数十倍に跳ね上がって認識される。そのため、本来の魔力では行使不可能な魔法でも使用することができる。

ただし、閃光の杖を装備している場合に限る。

魔法

ロン・ウォール (Ron Wall)

魔力で作成した障壁、と言つたほうがわかりやすいですかね？
基本的に、魔力が介在した攻撃を防ぐことができる。
その強さは魔力量に左右される。

それでは次回、「事件の收拾（仮）」でまたお会いしましょう

ケイス「……突つ込まないぞ」

とりあえず今回、実験的に行間を1行空けてみました。

第1-1話 事件の收拾（とつあげし）（前書き）

世界中の迷宮でキラーマシンが大量発生。その收拾を行つていたときに、銀髪の少女から雷撃の攻撃を受ける。1度目は受けてしまったケイスだつたが、ダイクの力を吸収したことにより2度目の攻撃は防御成功。さて、ここからどうなることやら。

第1-1話 事件の收拾（とつあべぢゃ）

反撃開始とは言つたもののビビリ反撃するか。

俺は悩んでいた。

とつあえず地面にいるのであれば、このまま攻撃してしまえばよい。

だが、今の相手は空中にいる。

だつたらどうするか。

……地面に下ろすか。

俺は、閃光の杖を自分の前に掲げた。

side ???

雷撃を防がれた後、下の彼に動きはありません。

一体、どうしたのでしょうか。

そう思ったとき、彼に動きが。

右手に持つている杖を前に掲げて、何か呪文を唱えているのでしょうか？

今が好機のようですね。

私はキラーマシンに指示を下した。

あの青年を攻撃しろ、と。

それで、どうやれます？

side ??? END

何か、さっきまで動きのなかつたキラーマシンが動き始めてるなあ。

「アーンヴァル、すまん。あいつらの攻撃を電磁フィールドで防いでおいてくれ」

「『さ、全部は無理ですよ』（泣）」

だつたら。

「—炎熱術式《PSYCHO-FIRE》、起動

「圧縮、外郭作成、—変換《MATERIALIZE》」

呪文を唱えると、俺たちとキラーマシンの間に浮遊する物体が出現した。

「マスター、あれは？」

「いわゆる《FLOATING-MINE》、爆弾だ」

「ば、爆弾～？」

「じゃ、後は頼むぞ？」

「いや、こんな状況で頼まれましても～」

アーンヴァルが何か泣き言を言っているが、気にしない。

いざとなれば、守れるしな。

さて、と。次はアイツか。

「— 重力制御《GRAVITY - CONTROL》、拘束設定、起動

「圧縮、変換」

呪文を唱えると、俺の目の前に黒い魔力球が出現する。

で、これを。

「発射」

あいつに向けて発射する。

side ???

彼は、聞いた事のない呪文を紡いでいた。

まったく聞き覚えのないタイプの呪文だった。

唱え終わると、彼の前に魔力球が出現し、彼が杖を振るとそれは私のほうへ飛んできた。

「くつ。風よ、我を守れ」

呪文を唱えると、風の結界が私の周りに布かれる。

無駄ですよ。その程度の攻撃では。

s.i.d.e ???: END

ああ、やつぱり止められたか。

そりや、防護呪文の一つや二つ持つてるよなあ。

とりあえず、それは想定範囲内、だから。

「一重力制御《GRAVITY - CONTROL》、一圧縮解除《DISCOMPRESS》」

圧縮モードを解除し、その結界ごと拘束する。

黒い魔力が彼女の周り（といふかおそらく結界）を包み込む。

包み込んだのを確認し、最後の呪文を唱える。

「拘束、下降」
BINDING DESCEND

呪文を唱えると、黒い魔力は中を締め付けながら地面に降りてくる。

さて、「」対面とこきますか。

「くつ、何故私がこんなことに」

先ほどまで空中にいた少女がそう言っていた。

ちなみに、まだ拘束は解いてないよ。

「で、君は誰?」

「それは、私のセリフです。」この国に、貴方のようないいなかつたはず」

勝気な人だねえ。

「えつと、俺が質問してんんだが?」

そう言いながら拘束に魔力を込めていく。

「ぐつ。分かり、ました。言いますから、これを解いていただけません?」

「駄目。逃げそつだから」

「くつ」

そつとつと、彼女は俺のほうを睨み付けてくる。

だが、観念したのか話し始めた。

「私は、グリ。マジュコンヌに『するものよ

「マジュコンヌ?」

「ええ、私に何かあればマジュコンヌが黙つていな『わよ

マジュコンヌが黙つてないって。一体、どうのだろう。

「えーとさ、確認。マジュコンヌって、犯罪神? それとも犯罪組織

?」

「え? 犯罪神? 犯罪組織? 何ですか、それ?」

「は?」

「だから、マジュコンヌって人が黙つてないっていってるんだよ!」

ちょっと待て。

「あのせ、マジュコンヌさんってどういう人?」

「え? 電話とかメールとかでしか話したことないんですけど」

ちよ、おま。ゲイムギョウ界でもゆとり化が進行してゐるのか?

何でそんな会つたこともない人を信用してるんだよ。

「今回のこととは、その人に命令されてやつたのか？」

「ええ、そうです」

「何でー？」

「一人で生きていくには、そうでもしないと生きていけないんです」

彼女から、色々なことを聞いた。

まず、身寄りだが今は誰もいらないらしい。

数年前まではおじいさんとおばあさんと一緒に住んでいたが、今はもう一人とも亡くなってしまったこと。

それから一人でどうにか暮らしていたが、生活費が底をつき始めたため、職を求めてギルドに行つたが、女という理由のみで帰されたこと。

そんな時、ネット上でマジエコンヌと言う人が、能力のあるものを募集していることを知り、それに応募。

それで今に至る、というわけだ。

「少しだけ同情できるけど、あまり褒められたものじゃないな」

「はい、すみません」

先ほどまでの彼女はどこへや。

完全に別人だつた。

「まあ、今はそれは置いといて、事態の収拾を優先で考えましょ」

俺はそういと、ブランさんを探した。

まあ、簡単に見つかりましたけどね。

「ブランセーん、ちょっと来てもいいですか？」

「あ、？今戦闘中だ！見てわかんねえのか」

「いや、分かってるから言つてるんです。それだけの数全部相手にするつもりですか？」

まあ、本編でロムちゃんラムちゃんは2人で相手にしてたけどね。

「…何か策があるのか？」

「ええ、とつあえず」

「わかった。すぐ行くから待つて」

そう言つと、ブランさんは得物を振り回し出口を作り、じつに来た。

「で、どうあるんだ？」

「逃げます」

「「え?」

ブランさんとグリさんは嘴を合わせてそう言った。

まあ、そりゃそういうわな。

「とりあえず、彼らを足止めします。お一人は先に出口に向ってください」

そう言つと、俺は先ほどの一浮遊機雷《FLOATING-MINE》を手元に戻した。

そしてそれを、2グループのキラーマシンへ向かって投げつけた。

それらが地面に落ちたとき、ドーンと音が鳴り響き、その後熱風が吹き荒れた。

「……マスター、あんな物を作ったんですか」

アーンヴァルの笑いがすぐ乾いていた。

そして、俺はブランさん、グリさんと会話をすべく出口へ向かった。

俺が出口に到着すると、一人は待つてくれた。

「あの、おーじい爆発が起つてましたか、あれは？」

「足止め用爆弾ですよ、ただの」

「マスター、足止め用爆弾はあんな火力ではないと思います」

グリさんは冷や汗をかきながら、爆発の起つていた場所を見ていた。

「さて、それじゃーこれから出ましょーか」

やつまつこ、世界中の迷宮から出ました。

で、出た後。

「おー一人とも、ちょっとだけ待つてください」

やつまつこ、俺は今出つた出口のまつを向く。

「何をやるの?」

やつまつランが聞いてきた。

「この迷宮の時間を止めるんですよ。じゃないと、やつまのキラー
マシンが出てやつまつでしょー。」

「やんな」と、やめるですか?」

「やめるかよ?」

俺がそう言つと、「私、ケンカを売つちゃいけない人に売つちやつたのかなあ」と涙目になつていて。

「とつあえず、聞かなかつたことにする。

「一時空間制御《CRONUS-SYSTEM》、ACCESSES構築、COMPILERUNNING接続」

「一時空間凍結《FREEZE-MODE》、ACCESSES構築、COMPILERUNNING実行」

「ふう、とつあえずこれでどうにかなるかな?

「さて、終わりました。とつあえず、これから後のこと話をしにル
ウェーに行きましょうか」

「とつあえず、俺はルウェーへ歩き始めた

「そ、そうね」「は、はい」

「ランさんとグリさんはそつ答えると、俺の後について歩き始める
のだった。

……SAVE

第1-1話 事件の收拾（とつあがく）（後書き）

ケイス「ちょ。どういう状況だよ、これ
どなが？」

ケイス「全部だよ全部。敵キャラみたいに出てきたグリさんは実は
いい人みたいだし、俺は思いつき魔使つてるし」

そうだねえ。

まあ、いいんじゃね？

ケイス「ついでに、魔法が何か普通の魔法と違つじ
うん、けど何やってるか大体分かるつしょ？」

ケイス「わかるけどそあ」

魔法は大体こんな使い方になるよ。

こうした方が、使い勝手が良いんで。

わい、それじゃ新しく出てきた人の紹介です。

グリ（GRILS）

銀髪のロングヘアで、服装が黒のゴスロリファッショーン。

魔法（主に4元素を使役した魔法）が得意な魔道師。

本編では述べられていなかつたが、5年以上前の記憶がなく、覚えているのは名前くらいだつた。

数年前まで一緒に住んでいたおじいさんとおばあさんも、自分の親戚縁者などではない。

おじいさんとおばあさんは、亡くなつた自分たちの孫娘に似ているグリを引き取つて暮らしていた。

魔法については、気がついたら使えるようになつていて。（おじいさんやおばあさんが教えたわけではない）

そんな状況のため友達も知り合にも困らず、マジヒコンヌ（？）でいいように扱われていた。

グリ「こんな私ですが、よろしくお願ひします（ペニツ）」

ケイス「何回聞いても、腹が立つな、これば」

グリ「ひいっ！？謝りますから許してください。本当にみんなさい（土下座）」

ケイス「いや、君じやない。この、マジヒコンヌ（？）だ。だから、土下座はやめー」

ケイス、……お前何した？

このおびえ方は尋常じやねーぞ。

ケイス「何もやつてないーー！」

（あとでグリのフラグ立てとくか）

ケイス「（ゾクッ）何だ、今の寒気は」

それでは次回、「キラーマシン、再度封印」でまたお会いしましょつ

第1-2話 キラーマシン、再度封印（前書き）

迷宮^{マイン}と時間を凍結させ、キラーマシンを一時封印したケース。彼には、キラーマシンを再度封印する手立てがあるのか？ わけ、これからどうなることやら。

第1-2話 キラーマシン、再度封印

ルウイーに帰つてゐる途中な。

わい、ぢりじよひかな。

キラーマシンを封印しないといけないのは当たり前として、ぢりじよするか。

まさか、いのまま放つておくれて手は……なによな。

「ねえ、ブランさん

「何?」

「ルウイー元、ゲームキャラクターデザインのへりこ残つてゐる?」

「うむ。まったく、何を考えてんだか」

そつとこながらグリさんのもつを覗む。

その睨まれたグリさんといえど…。

「うー、じめんなさこひー。」

俺たちからひよつとはなれて後ろを歩いていた。

あ、今はもう拘束をかけてないよ?

B-122

でも、とつあえず「逃げたいひつなるか、分かってるよね?」と言つておいた。

その後から田を合わせてくれなくなつたんだが、何でだろ。

「マスター、それは~~近~~たつ前と~~言~~ひまのです」

「ちよ、アーン、ヴァル。心を読むな。

それは~~近~~たつき、ホントじつようかなあ。

ゲームだと、どうだつたんだっけ。

確かに、ホワイトディスクが
『ネプテューヌに頼まれた』
つて言つてたな。

だったら、話は簡単。プラネテューヌと交渉をすれば良い訳だ。

でも、そうするとあとは交渉の材料か。何があるかなあ。

「何を考えてこるの?」

ブランさんがそつ聞いてきた。

「いや、ゲームキャラをじつひで入れようかと|画策中

「何かいい案があるの?」

「いや、無いんだつたら、他の国から貸してもいいべき良いこと思つて
る」

「宛は？」

「プラネットニュース？」

「ぱつ、お前、それは駄目だ。アタシはネプテューヌに頭を下げる
のは絶対に嫌だからな！」

ブランさんは明らかに拒絶反応を示した。

まあこの一人、水と油だしなあ。

「ですよねー」

「だつたらラステイションとかリーンボックスとかから借りれば「
「交渉の材料はどうします？リーンボックスはまだ良いとして、ラ
ステイションは何か吹っかけてくるような気がしますが？」

「うう……だつたら、リーンボックスから」

「だから、交渉材料をどうするか、って言つてるんです。妹さん、
一人貸し出しますか？あそこは女神様に妹がないみたいでし

「それもダメだ！何でロムがラムのどちらかを差し出さなきやいけ
ないんだ！？それだつたら、今そのままにすればいいじゃねーか！」

「いや、それは」勘弁くださいな

「何でだよ！」

「今、こいつしてる間も、俺の魔力がガンガン使われてるんですよ。
このままじゃ干からびます」

もちろん嘘ですが。

閃光の杖を持つてる限り、ここのへりこどりにかかる。

「馬鹿野郎！ 何でそれを早く言わないんだよ」

「や、だつてそういう風に心配しちゃうじゃないですか。だから嫌
だつたんですよ」

125

side グリ

うう、何かあの一人の会話がかなりヒートアップしてる。

それに、私が『ゲームキャラ』を壊したことで、何か大変なことに
なってるみたい。

こいつは、私が！

「あ、あのぉ、ちょっとだけいいですか？」

side グリ END

「あ、あのぉ、ちょっとこいですか？」

グリさんが、そつ話しかけてきた。

「じつしたんだる」。

「じつしたんです、グリさん」

「ゲームキャラをそつて、蘇らせられないんですか？」

「あ、普通はそつ困りだらうなあ。

「俺には無理ですね。グリさんは持つてるんですけど、蘇生魔法」

「いえ、持つてない……です」

グリさんがそつて落ち込んでしまつ。

「大丈夫ですよ、何とかなりますつて。……多分

「あ、でも正直俺たちだけじゃ決められない。

とりあえず、ミナさんを巻き込もう。

そう思い、俺たちはルウィーへ向かった。

さて、ルウイーの教会にて。

「ええっ、モンスターってあの伝説に語られてこむキラーマシンだ
つたんですか！？」

そうだけね、まあ

それが正しい反応だね

「それで、この弱そーな人かその封印を解したやつたの？」

「それですね、ミナさん。ゲームキャラつてもうルゥィーにはい
ないんですね？」

「そうですね。世界中の迷宮にいたの方々が最後のゲイムキャラと
聞いています」

うん、ブランちゃんの話と合づな。

「となると、ゲームキャラを他の国から借りる、または譲り受ける
しかないと想うんですよ」

「そうですね。私も同じ意見です」

「ちなみに、三十九せんだつたら、どこの国にせじゆに交渉します？」

「そうですね……。私だったら、まずプラネテユースでしょうか」

「やつぱみじつですね」

まあ、なんだかんだ言つて一番交渉しやすいだらうしな。

他の2国に比べて、だけどな。

「お、お前り……。アタシは絶対にネプロテコーズに頭なんか下げないからな」

うんうん、分かってますって。

「でも、どう交渉しましようか。正直言つて、今のルウェーに交渉できる材料なんてないですよ?」

「なら、俺がビルにかして見せますよ。だから、プロネテコーズと通信してもらひえません?」

最悪、俺が交渉材料になれば良い。

そりすれば、丸く收まるだろ。

そつ思つてみると、ミナさんとブランさんが一生懸命何かをセッティングしていく。

「それが通信用の機器ですか?」

液晶テレビ「マイク、それにビデオカメラ。

小さこ「テレビ局だな、これは。

「さうよ、今まであまり使ったことがないけど。ほら、ロムにラム、あなたたちも手伝って。それとそこでいじけてる貴方もよ」

そういってこと、俺を除く4人でセッティングを完了して、
いた。

「さて。それでは、まず私が話をするので、それに続いて話していただいくよ」

「ああ、わかった」

さて、一世一世の晴れ舞台、びつなることか。

side イストワール

はあ、平和ですね、最近は。

ネプテューヌさんもネプギアさんも静かになつたので、こうして静かに仕事ができます。

そう思つていると、他の国から通信が来たようです。珍しい。

さて、それでは早速この通信を受信しましょつか。

ふふつ。何か良いことがあると良いんですが。

side イストワール END

『はー、 じかんフランテコーズのイストワールです』

おお、 いーすんさんだ。

相変わらぬのね。

「お久しぶりです、 イストワール様。 何年振りでしょうか」

『あー、 ミナさんではないですか。 お久しぶりです。 今日はどうしました?』

「実は、 少々お願いがありまして。 ちょっと変わりますね」

いーすんさんは『はー』と返事をして、 じかんを見ていた。

ミナさんはとこりと、 僕のほうを向いて、 「それじゃ、 後はお願いします」と小声でいい、 席を空ける。

その空いた席に俺が座り、 いーすんさんと対面する形となつた。

「お久しぶりです、 イストワールさん」

『ケイスさんじゃないですか。 お久しぶりですね。 元気そつで何よりです』

「はい、 イストワールさんもお元気そつで」

『それで、 お願ひとこりのはケイスさんからなんですか?』

「ええ。実は…」

と言いかけたそのときだった。

『いーすーん、たつだいまー。あれ?何かお話中?…あーつ…!ケイスさんだー』

間がいいのか悪いのか。

ネプテューヌの登場だった。

「お久しごぶり、ネプテューヌさん。お元気そうで何よりですよ」

『うんっ!私は元気だけが取り柄だからねー。で、今日はどうしたの?』

「いや、実は…」

そのあと、かくかくしかじかで事の顛末を伝える。

『うーん、私としては別にかまわないんだけどね。けど、いーすんが何か見返りが欲しいって言つてるんだよね』

そつ言つてる後ろから小さく『私はそんなこと言つてません!』と聞こえてくる。

『だからね、ネプギアに会つてあげてもうえないかなあ』

「ええ、そのくらいの見返りだつたらいいからでも」

『わかつたー！ちょっとだけ待つててねー』

そう言つて、ネプテューヌは画面から出て行った。

変わりに、一一さんさんが画面に近寄つて来て、立派になつた。

『ネプギアさん、ケイスさんと別れてから、ずっと剣の練習をしているんですよ、あのときの剣で。だから、壊めてあげてくださいね』うん、やつぱりネプギアはいい環境で育つてゐんだなあ、としみじみ思つた。

そうしてると、『お姉ちゃん、私髪乱れてない？』とか『服、汚れてないよね』とか聞き覚えのある声が近づいてくる。

そして、その声がいつたん途切れ。

そして、バンッと扉が開け放たれ、そこには懐かしい顔があつた。

「よつ、ネプギア。久しぶりだな」

『はー、ケイスさん。こちうん、お久しぶりです』

「聞いたぞ、一生懸命剣の修行がんばつてゐつて」

『ちひかさん。ケイスさん、一田でも早く近づいためですからー。』

「がんばれよ？また余ひ口を楽しみにしてるからな」

『はいっ。それじゃ、私今からギルドに行つておまかから、これで』

「ああ。またな、ネプギア。氣をつけてな」

『ありがとうございます。ケイスさんも、体に氣をつけてくださいね。』

そう言つと、ネプギアは画面から出て行つてしまつた。

side ロム

今の女の子、誰なんだろう。

「あの、あの娘誰なんですか？」

さつき、ケイスさんが連れてきた女の人がミナちゃんにそう聞いていた。

「あれは、プラネテュースの女神候補生のネプギアさんですよ。それと、その前の人が女神のネプテュースさんですよ」

ネプギアちゃんつて言つんだ。

……注意しないと。

私の中に、ネプギアちゃんは要注意人物として登録された。

side ロム END

side グリ

あー、女神候補生だつたんだ、あの子。

それに強そうだし、何しろ『恋するオーメ』の顔をしていた。

それに伴つて、何かわざから口ムチャさんが怖いんですけど……。

(;) ; ()

side グリ END

『つてこり』と、見返りももうつちやつたから、今からゲームキャラを1人連れて行くよ。数時間だけ待つて』

数時間後、女神化したネプテューヌが最高速度で飛んできた。

ゲームキャラを伴つて。

「サンキュー、ネプテューヌさん」

「いいわよ、わざわざ言つたじゃない。見返りはもうつたつて

さて、それじゃ再度封印と行きますか。

「ネプテューヌさんも一緒に来ます?封印に

「ええ、もちろん。そんな強そつなモンスターと戦うことなんてめつたにないことだし」

……やつぱりそつちか。

女神じゃなくて戦闘狂じゃないのか、本当は。

「足を引っ張らないでね、ネプテューヌ。アタシの邪魔するなら、マッハでぶちのめすわよ」

アンタもですか！

とつあえず、キラーマシンはこの2人の狂戦士バーサーカーに任せて、俺たちはそのキラーマシンの封印を行つたのだった。

「戦い足りないー」

「…右に回じ」

「やかましいわー！」

「ゲームキャラさん、本当に申し訳ありません。このようなことを今回お願いしてしまって」

「いいのですよ、ルウェイーの教祖。わたしたちの力は、このような時のためにあるのですから」

あのバーサーカー達がいなければ、もつといい場面だったのに。

そう思いながら、俺達はルウェイーの教会へ帰つていった。

... S A V E

第1-2話 キラーマシン、再度封印（後書き）

祝！「ファルコムさん、ケイブさん配信記念！」

ケイス「いや、意味が分からぬから」

本当は「ファルコムさん配信までにこの本編にファルコムさんを出したかったんだけどなあ。

ケイス「まあ、でも出しちゃいけないってわけでもなし」

モチロンですよー。

さて、今回ですが。

ケイス「無理やりだつたなあ、本当。いつも以上に

うぬせー。

ケイス「でも、久々にネプギアに会えたから、ほつこつできたよ」

そうだねえ、何話ぶりだろ？ ちなみに、プラネットユースから旅立つて1ヶ月くらいって設定でよろしく。

ケイス「ただ、ロムちゃんがずっと不機嫌だったんだけど。何があつたのか？」

…知らないほうが身のためだと思つよ。

ケイス「ま、どうかキラーマシンを封印できたからいいか」

お前もお気楽だのう。

ケイス「それで、次はどうなるんだ？」

まあ、やる」とやりましたから、次回でルウェー編は最後。あ、もちろん本編開始前って意味でね。

ケイス「ってことは、また旅立ちか。結局、ラムちゃんとは仲良くなれなかつたなあ」

なりたかったのか？

ケイス「ま、嫌われてるよりかはいいだろ？」

……（三角関係がお望み、と。あ、四角関係か？ネプ、ギアも入れる
と）

とこうことじ

それでは次回、「旅発つ者と残る者」でまたお会いしましょう

第1-3話 旅発つ者と残る者（前書き）

ネプテューヌの協力により、キラーマシンを再度封印する「」ことがで
きた。

そして、ケイスは平和になつたルウェイーを見て回る「」とした。
さて、これからどうなる「」とやう。

第1-3話 旅発つ者と残る者

「それじゃ、私はこれで帰るわね」

ネプテューヌはやうやく、ルウェイーの教会を後にしようとしました。

「ネプテューヌ、サンキューな」

「別に、いいのよ。私はルウェイーに貸しが作れただけでも満足しているんだから」

やうやく、クスリと笑う。

「やつぱつやつぱつ」と、か。だから、私は反対したの」

ブランさんは呆れたよつた、諦めたよつた微妙なかおでそんなことを言つていた。

「冗談よ、ブラン。このへんこでわせて欲しいわね」

まつたぐ、この一人ときたら、仲がいいんだか悪いんだか。

「わあ、早く帰つたら?妹さんが心配してゐるわよ?」

やうやくながら、ブランさんは一やつと笑う。まるで、さつきのお返しだと言わんばかりに。

「やうね、ブランにも早く帰れって言われてしまつたし」

ネプテューヌは心なしかショーンとした感じでそう言った。

「いや、あの、誰も本氣で帰れなんて、そんな…」

ブランさんはあたふたしながら何か言おうとしているが。

傍から見ると…。

「冗談よ」

遊ばれてるようだにしか見えないのは何でだろう。

「てめつ、ネプテューヌ！早く帰りやがれ、このバカが！」

「ね、あれで、せいでトランがへなつた。それじゃ本當に、じやあ

ネプテューヌはそう言つと、協会から出て行つた。

そして、教会の中は沈黙に包まれた。

「あははっ、お姉ちゃんとプラネテユースの女神の掛け合い、面白かったね、口ムちゃん」

「… そうだね、ラムちゃん」

かのように見えた。

さて、俺もそろそろ次の国に行く時期かな。

キラーマシンの封印もできだし、あとは時間がビビリかしてくれるので、ださう。

「あい、それじゃあもう俺も行くつかね

「…ケイスさん、どこに行への…近くのお店だったたら、私も一緒に行きたい…」

「口ムチャさんが行くならわたしも、何か買ってくれるんでしょ? ケイス」

口ムチャさんとラムちゃんは、俺がビコかに買いう物に行へものだと思つてゐみたいだ。

「違つて、口ムチャさん、ラムちゃん。俺もそろそろ、また旅に戻るうかな、つて思つてや」

「…うん、ラムちゃんは「なーんだ、つまらない」と言つて、ミナさんのほうに行つてしまつた。

一方口ムチャさんは、「えつ?」と聞いて俺の顔をずっと見つけていた。

「ケイスさん、…あのネプギアちゃんつて女の子の所に行への?」

何故そこでネプギアが出て来る。

「違つよ、口ムチャさん。俺は、ラステイションに行つて廻つてゐるんだ

「ラステイション？…何をして行くの？」

「別に、何をして行くってわけじゃないんだ。俺は冒険者だからね。いろんなものを見たいだけなのかもしれないけど」

「…だったら、ケイസさんのお別れ会…したい。いい？…ミナちゃん」

そう言つてミナさんのほうを見た。

ミナさんは困つた顔で「いいですよ、ロムちゃん」と答えた。

「…うん、それじゃ準備…する。お姉ちゃん、ラムちゃん、ミナちゃん…手伝つて

「…ようがないなあ。私もロムの頼み聞いてあげたいからね

「うと、しようがない。私もロムの頼み聞いてあげたいから

「だったら、書は急げ、ですね」

そして、4人は俺のお別れ会の準備をするために、教会から出て行つた。

いや、正確には、

「ケイസさん、グリさん。お二人はどうかで時間をつぶしていくいただけますか？夕方くらいに教会に戻つていただきだければ良いですから

「ナ、なんせそう言つてから出て行つた。

俺、OKしてないの。へすん。

「あい、どうしましょうか」

おれはグリさんこそう話しかけた。

するとグリさんは、「ちゅうじこいです」と言つて、俺の手を引いて喫茶店に入つていつた。
何でも、相談があるらしい。

「で、何の相談ですか？」

俺は注文してから10分ほど待たされて出てきた珈琲を啜りながらそう聞いた。

お、これ美味え。

「あの、私も連れて行つてもらえませんか？」

「え? どうしてまた」

「私は、前にお話したとおり、身寄りがもうないんです。だから、連れて行つてもられないかなあ、って」

あ、そういうえばそうでしたねえ。
すっかり忘れてました。

「ダメです

俺は即答した。

「何ですか！」

「グリセラ、貴女にはやりなくてはいけないことがあります

「やりなくてはならないこと、ですか？」

俺は「ええ」と答えながらまた珈琲を啜る。

「今回、ルウェイーをこんな状況に陥れたのはどなたですか？」

グリセラは「うう」とつめき声をあげた。
結構、気にしていたようだ。

「貴女には、この状況を見守る義務があると思います

「確かに、そうですね」

「それと、もうひとつやつて欲しいことがあります

「何でじゅう

「女神候補生…ロムナちゃん、ラムナちゃんに魔法を教えてあげてもう
いたいんです」

「魔法を、ですか？」

グリさんは「女神様には、不要だと思いますが」と続けた。
まあ、普通はそう思うよな。

「こぎりと言つと私の保険ですよ。現在の女神様たちは魔法がほとん
ど使えないと見て間違いないよつですか。それに「

「それに?」

「あの2人は、本から得た知識で魔法を行使しています。そんなも
のより、生の情報のほうが断然いいと思いませんか?」

「確かにその通りだと思います。でも、私に教えられるでしょうか
?」

「大丈夫ですよ、グリさんは優しいですから」

「はい、ケイスさんがそう言つなら、私やつてみます!」

そう答えたグリさんの顔は笑顔だつた。

まじめな話が終わつた後、俺とグリさんは他愛のない話をしていた。

俺からは、プラネテユースで経験した話やプラネテユースからルウ
ィーへ旅したときの話、あとはロムちゃんラムちゃんに初めて会つ
た時の話。

グリさんからは、おじいさんやおばあさんが生きていた頃の話やそ
の後俺達に会つまでの話を聞かせてもらつた。

俺が一番驚いたのは、グリさんがメドローアを使えることだった。

「アレ、使える人いたんだ。

話しているうちに夕方になってしまったので、教会に戻ることにした。

教会に戻ると、すでにパーティーが始まられる状態となつており、俺達はすぐにパーティーを開始した。

プランさんの開会の挨拶から始まって、今は雑談中…のはずなんだが。誰だ。酒を入れたのは。

「いつも」「」「あなたの隣に這いつぶる混沌、ニヤルラトホテプでつす！」

「プラン様。何言つちやつてるんですか！」

「なあ、ラステイションのユーを連れてきた方がいいか？」

「……それは、いろいろな意味でダメです」

「世の中の、二ートではない人間のほとんどは、人間の資質がスカラではなくベクトルであるということを理解できないのだね」

「ロムちゃんが…、ロムちゃんが饒舌にしゃべつてる…しかも難しいことを」

「何か、いい具合に混沌だな」
カオス

卷之三

「今度は壊れたつ！？」

色々としつちやかめつちやかだつたが、パーティーが終わつた。

まあ、プランさんもロムちゃんも何も覚えていないと言つのが幸い
か。

「あ、みんな、ちょっとだけいいかな？」

俺はそう言い、みんなの顔を見渡した。

「俺が、今まで「んな」させつても「りつた」となかつたんだ。本当にありがとな」

やうに叫んで、頭を下げる。

この世界に来る前から、いろんな出会いや別れをしてきたけど、こんなに別れが惜しくなるのは初めてだった。

「そ、う、よ、感謝しなさいよ。女神様じきじきにやつてあげたんだから

15

ラムちゃんがやつぱつと、ミナさんが後ろからコシンと頭を叩いた。

ラムちゃんは「いたーい」と言いながらその場で頭を押された。

そんなラムちゃん田線を立たせた俺は立てひざで座り、頭を撫でながら「ありがとね、ラムちゃん」と言った。

そんな俺達を「……むー」と叫こながらロムちゃんが見ていろ」と俺は気づかなかった。

ラムちゃんは、はじめは氣持ちよがかったのだが、シミナさんやプランさんが二口二口しながら見てくるのを気にして「せつ」となり俺の手を払いのけた。

「なれなれしくしないでよつ」

やつまつと、教会から出て行ってしまった。

……空氣だったのになあ。

パーティーが終わったあと、プランさんとロムちゃん、ラムちゃんは自分の部屋に帰つてこそ、教会には俺とグリさんとナさんが残された。

「やつだ、ミナさん。ちよつとおじめなお話が

「どうしたんです?」

「グリさんの話です。実は……」

と言つて、毎間にグリさんと2人で話していたことを話してみた。

「そうですね。正直言わせてもらひつと、教会にはそれほど欲しいとは思いません」

「そうですか……」

「ですが、必要だとは思っています。ですか……ルウェイーでギルドメンバーになる気はありませんか?」

「私、一度断られてくるんですよ?」

「それに関しては大丈夫です。ギルドには私のほうから、推薦状を出します。そして、ギルドのお仕事の合間にでもロムちゃんとラムちゃんに、魔法を教えに来ていただければ、それではダメですか?」

「いえ、私には充分すぎるほどです。その依頼、お受けします」

「お礼を言つのはいいが、ほつりやあよ」

「そう言つて、ミナさんは右手をグリさんの方に差し出した。

「これからよろしくお願ひしますね、グリさん」

「ハハハハ、よろしくお願ひします。ミナさん」

「さて、それではもう遅いですから、お一人とももう寝たほうが多いと思いますよ。お一人とも、昨日のお部屋を使えるようにしてるので、そこを使ってください。」

そういうわれたため、俺達は昨日使わせてもらった部屋へ向かった。

そして、俺の部屋の前に来たとき、2人の人影が見えた。

「あらあら、ケイスさんモテモテですね」

部屋の前にいたのはロムちゃんとラムちゃんだった。

「それじゃ、私も自分の部屋に行きますね。おやすみなさい」

そう言って、早足で自分の部屋に向かっていった。

さて、俺にどうしようと。

「……ケイスさん、一緒に寝ていい？」

「わたしはロムちゃんがあんたと一緒に寝たいって言つてたから一緒に着ただけなんだからね！ カン違いしないですよ」

ロムちゃんの上目遣い + ウルウルに勝てるわけもなく、陥落しましたよ、ええ。

結果的に、「小」の字になつて寝ました。

そして二人ともが俺に抱きついてきて、「あつたかい……」と言つ始めた。

二人とも子供と言つともあり、すぐに寝てくれた。

ただ、二人ともが寝言で「行っちゃやだ」と言つて俺の服を握つてきたのは印象的だった。

思わず、二人の頭を撫でてしまつほどだ。

その後「えへへ」と笑つてくれた時は、思わず「ズキン」と心が痛んだ。

朝。

俺は口づけながら、下へ向かつ。セイドは、ミナセが朝食の用意をしていた。

「ミナセ、おはようござれ」

「おはようござれます、ケイースさん。それに口づけながらも、やがて

んも」

「おはよう、ミナセさん」

「ミナセさん、……おはよ」

「わあ、冷めちゃこますから早く皿に上がれ」

ルウェイー最後の食事、ともなると感慨深こものになるなあ。

「あれど、ケイースさん。グリセラから伝言です。今度ルウェイーに来たとき、また戦闘しましょ、だそうですね」

「アリですか。じゃあ、しつ返しあこでぐだれこ。望むところです、と」

ミナセは「お一人とも不器用ですね」と軽ひて笑う。どうこうの意味だ?

そして、朝食をお食べ終わり、俺は自分の荷物をまとめた。そしてこの数日間世話をした部屋に挨拶をして教会に向かつ。教会では、ミナセとブランセ、ローブセ、ラムセが待つ

ていた。

「ありがとう、ケイസ。また会いましょう」

「ケイസさん、本当にお世話になり、ありがとうございました。近くに着たら、また寄つてくださいね」

「ケイസ、アンタが強いつてのは認めてあげる。けど、わたしはもつと強くなつて見せるんだから。そうしたら、アンタのこともわたしが守つてあげるわよ」

「ケイസさん、……ばこばこ（ウルウル）」

「うん。みんな、ありがとう。この濃厚だつた数日、絶対に忘れないから。それじゃ、またなー。」

そして、俺は教会から出て一歩、また一歩と足を進め始めた。さて、次の目的地は、ラステイションだ！

.....SAVE

第1-3話 旅発つ者と残る者（後書き）

やつひまつたぜ。

ケイス「中の入ネタのことか？」

うん、そう。

ケイス「でも、これって分からない人が見たら意味不明だよな」

まあ、そうだな。

その場合は、その部分だけ消す？

消しても問題ないようにはしてあるし。

ケイス「まあ、誹謗中傷があつたらね。今のところなぞうだから安心してるけど」

とにかくことで、ルウイー編終了です。

ケイス「つてことは、次回からラステイションか？」

まあ、ラステイションって言えばラステイションだな。
けど、まだノワールやユニーは出ない。

ケイス「どういう意味だそりゃ」

ということだ。

それでは次回、「空から何かが落ちてきた」でまたお会いしましょう

ケース「おー、何が落ちて来るんだよー。」

幕間 設定のまとめ～ルウェイー編～（前書き）

ルウェイー編が終了したので、いままでの設定のまとめをしておきま
す。

幕間 設定のまとめ～ルウェイ編～

オリジナルキャラ

ケイス

現実世界から転生したこの小説の主人公。

基本的に感性のままに行動する。

現在、剣士、銃士、魔道師の力を駆使して戦闘を行う。

剣士としての力

片手剣、両手剣どちらも自在に扱える。

また、棒術についてもそれなりに使えるらしい

銃士としての力

軽火器から重火器まで扱うことができる。

ただし、重火器の場合移動に支障が出るためあまり多用していない。
これまでの傾向より、まず軽火器で牽制してから突っ込むという戦法を多用する。

魔道師としての力

アイテム創造から空間掌握、時間停止など、多岐にわたる。

ただし無詠唱で使用できるものは限られており、その筆頭が魔力壁である。
壁である。

使用する呪文は、コンピュータのプログラムに近い。

また、魔術師の力を行使する際に便利な閃光の杖だが、彼自身が剣士として戦うことも多いため、左手首にブレスレットとして身に付けるという方法をとっている。

アーンヴァル

ケイスの中にある剣士の力によって生み出された存在。

彼女自身、自分が何者なのかは理解している。

彼女の中に武装神姫としての知識もあり、装備の解析については問題ない。

また、ケイスの持つ転移の数珠の力を使用することにより、異空間からの武装の取り出しを行うことができる。

だが、基本的に彼女は自分ではその武装を使用することができないため、自分から行動を起こすことは少ない。

グリ

ケイスたちがルウイーで出会った少女。

まあ、少女とはいえ外見年齢は16～20歳程度なのだが。

某魔法少女も118歳時の物語も「少女」で通していたため…（以下、脱線のため削除）

現在はルウイーにて贖罪行動中。

主に、ゲームキャラの保護、ルウイーの女神候補生姉妹に魔法を教えると言つたことを行つてゐる。

後者については、対象である姉妹が気侫なため、あまり進まないようだ。

彼女の魔法は基本的に4大元素を扱う魔法が多い。

火、雷、風、水、氷、土

（雷は風に、氷は水に含まれる）

特殊記述として、彼女には6年以上前の記憶が存在しない。

本人もすでに気にはしていないため、「別に思い出さなくてもいいか～」程度の認識。

ケイスの使用する武器

近接戦専用

M4ライトセイバー

M8ライトセイバー

剣の部分がエネルギーで構成されている小剣。

M4、M8はエネルギーの消費量の差を示している。

M4ダブルライトセイバー

M4ライトセイバーを2つ上下に取り付けたダブルブレード。
多数の敵がいる場所に切り込むのに重宝するが、今のところ使用された実績なし。

ギュリーノス

刃の部分がエネルギーで構成されている大剣。
使用実績なし。

レーヴアティン

剣の部分が炎を模した何かで構成されている小剣。
鉄などの金属であれば、溶かし斬ることが可能。
持つっていても、別段熱くない。

近・中距離

アルヴォPDW11

普通のハンドガン。通常モードでは通常弾（火薬弾丸）で攻撃するが、エネルギーモードの場合はエネルギー弾を使用する。エネルギーモードの使用実績はないが、それなりに使いやすいハンドガン

アルファピストル

ピストルと名がついている通り、あまり大きくない。ケイスはこれを魔力弾を使用するための銃に魔改造済。そのうち本編に出てくるかも

遠距離

LC5レーザーライフル

今のところ、野良ドラゴン掃討のために1回だけ使用された武装。基本的にケイスが近距離専門なため、あまり出番がない。かつ、エネルギーチャージに時間がかかるため、といつのも理由のようだ

幕間 設定のまとめ～ルウェイー編～（後書き）

とうあえず、ルウェイー編が終わりのため、まとめてみましたが…あまり変わつていませんねえ。

ケイス「変わつたのはグリセラーリーか」

そうだね。でも、彼女も一応重要な役をしてもらひ予定。

あと、ちなみに地味に閃光の杖をフォームチュンジさせてある。この杖が書きやすいかな、と思つて。

ケイス「やうだな。いちいち出して呪文を唱えて～つてのはアレだしな」

ええ、アレです。

と書つことで、今回は短いですがここまで。

第1-4話 空から少女が落ちてきた（前書き）

予告と題名を変えました
ルウェイーから旅立つたケイス。
彼らはルウェイーとラステイショーンの国境に差し掛かっていた。
さて、これがどうなるかとやが。

第14話 空から少女が落ちてきた

俺ことケイスは、今ルゥィーからラステイションに至る街道を歩いている。

すでに、ルゥィーを出発してから4日が経過した。

田にする景色も、一画面の雪から緑に変わつた。

そろそろ、ラステイションの土地が近いようだ。

「アーンヴァル、そろそろラステイションに入るみたいだ」

「あ、やつですか。ラステイションに入つたら、私の武装を作つてくれるんですよね？」

「ま、作れるやつがいたらな」

そう言つておれは歩を進めた。

「そんな時だつた。

「マスター、上から何か来ます！」

上から何が来るんだ？

上から？

「マスター、どうやら人間が落ちてきているようです」

人間！？

「アーンヴァル、その人間の落下予測位置を教えてくれ」

「はい、南に10メートルほど先がそのポイントとなります」

「予測到達時間は？」

「はい、あと30秒ほどです」

ちいっ、そんなに時間がないか。

そう思い、俺は魔法の準備をする。

「GRAVITY TRAP MODE LOADED
重力制御、補助設定、起動」

「FLOATASSIST TRAPIBEALIZE
浮遊補助、高速変換」

そこまで唱えて、その落ちてくる人を目視確認する。

…見えたっ！

「RUNNING
実行！」

そつ言つて俺は力を解き放つ。

次の瞬間、落ちてきた人の落下速度は遅くなつたため、俺は両腕で

受け止める」ことができた。

「ふう、危機一髪だつたな」

まつたく、俺がここにいなかつたりじつなつてたんだよ。

そう思いながらその落ちてきた人の顔を見たのだが……俺は固まつてしまつた。

「ま、まさか、ファルコムさん?」

ファルコム。

ゲームギョウ界をドラゴンスレイヤー一振りで冒険している冒険者……のはず。

それが何で、空から落ちてきたんだ?

そんなことを考えていたら、ファルコムさんが「うう……ん」とつて目を覚ました

「あ、気がつきました?」

「ああ、うん。って私は気を失っていたの?」

「まあ、そうですね。さすがに空から人が落ちてくるとは思つていませんでしたが」

「空から？……あ

ファルコムさんは、何か思い当たる節があつたようだつた。

「危なかつたですよ、もつ少しで地面に激突でしたから」

「あははは、私はいろんなものに守られてるみたいだからね。そんな簡単には死なないのさ」

突つ込んでいいのかなあ。「そういう人は、空から落ちてきません」つて。

「ありがとう、私はファルコム。見ての通り、しがない冒険家さ」

「俺はケイスと言います。貴女と同じよつて冒険者をやつています」

「へえ、冒険者か。私と同じよつな人がいてくれて、うれしいよ」

「俺も同じですよ、ファルコムさん」

まあ、冒険者（正確には片方は冒険家だが）同士だから、打ち解けるのも早かつた。

「そういえば、何で空から落ちてきたんですか？」

「実は、このはるか上空に、イクスという島が浮かんでいるんだ」

俺は、咄嗟のことこえ？」としか答えられなかつた。

そんなことを言つてこゐのがファルコムさんじやなかつたら、信じ

ていないうつ。

少しだけ沈黙が流れた後、俺は会話を再開した。

「それで、そのイクスって島はどんなところだつたんですか？」

「信じてくれるのかい？」

「ええ、もちろん。俺だつて行つてみたいですね、そのイクスと
いう島に」

「君は面白い人だね。こんな『太話を信じるなんて』

「『太話なんですか？』」「まさか！」

「アルコムさんによると、地上ではその島はイクスと呼ばれている
とのこと。行つたことがある人がいないため、『X^{イクス}』と名付けられ
たらしい。」

そして、アルコムさんはある塔に登り、最上階にたどり着いたとき
に光に包まれ、気がついたらその「イクス」にいた、と言うこと
だった。

そしてその「イクス」に住む人たちに、その島の本当の名前は「ア
ージュン」だと言つことを教えてもらつた、と。

そして、その島を冒険中にモンスターに襲われ、島から落とされ、
地上に落ちてしまつたと言つことだつた。

「まあ、信じるも信じないも君次第だけど

俺の頭に、ひとつ的事柄が浮かんだ。

それは……ネタ元はイース、といつこと。

「そうですね。信じますよ、俺は

「本当に?」

「ええ。だって、そつちのまつが面白こじやなこですか!」

そう言つて、サムズアップした。

「うん、違ひない

「それじゃ、今度は俺が今回の冒険で経験したこと話をしてもいいですか?」

「ああ、他の人の話つてあまり聞かないからなあ

そつ言つて、耳を傾けてくれた。

そして俺は、^{いにしへ} プラネットユースで女神のネプテュースと共に闘したこと、ルウェイーで古の戦闘機械、キラーマシンと戦つたことを話した。

「そんなんに強かったのかい? そのキラーマシンつての? わ

「強い、なんてモンじゃないですよ。そんなんのが数十体ですよ」

「あははっ。それは災難だつたねえ」

俺は「笑い事じやないですよー」と言ひ、話を続けた。

「まあ、どうにか封印できたからよかったですよ」

「ふうん。君も、面白い経験をしてるんだねえ」

「まあ、ファルコムさんほどじやないですけどね」

「ちなみにさ、今の話つて本にしても大丈夫かな？あ、私実は本を書いててさ」

「やつなんですか？」

俺はそう答える。

もちろん知つてるさ。

クリスティン漂流記はプランさんに読ませてもらつたからな。

「うん、それで、今聞いた話を書かせてもらえないかなあつて

「いいですよ、別に」

ファルコムさんは「ホント？」とうれしそうに言つていた。でも、俺の冒険が小説でかかるなんて、何かむず痒いな。

そんなこんなで色々な話をしたあと。

「さて、それじゃ、名残惜しいけど」お別れかな

「ファルコムさん、どこかに行く予定が？」

「ちがうか、バッグに入っていたものを元に戻しただけだけどな。

「うーん、もう一度あの島に行きたいけど、塔に登りたくないからなあ」

「……ダームの塔？」

「俺は、ラステイションに向かってこる途中なんですよ。よかつたら、一緒に行きませんか？」

そんな俺の誘いにファルコムさんは「いや、私はいよ」と答えた。

結構期待してたんだけどな。

「私は、一度実家に帰るよ。いいタイミングだし」

「実家って、どこなんですか？」

「プラネテコースだよ」

「へえ、そりなんですか。俺も今の旅が終わったら、またプラネテコースに行く予定なんで、もしかしたら会えるかもしませんね」

「そうだね。そのときのために、また新しい冒険をしないと」

俺は、「それじゃ、会えないじゃないですかー」と言つてツツツくんだ。

その後、一人して「あはは！」と笑つた。

一人で笑いあつた後、ファルコムさんが「そつこえは…」と言つて鞄をまさぐりだした。

そして、何かを見つけると、それを俺のほうに差し出してきた。

「これか、イクスの洞窟の中で見つけたんだ。何に使うものかは分からんんだけど、あげるよ」

そつこえは、俺にそれを渡してきました。

それを受け取つたとき、アーンヴァルが胸ポケットから出して「マスター。これ、ラファールですよ」と言つた。

…お前、今まで出てきていの、何やつてんだよ。ん？ラファール？

「…ラファールだつて！？」

「気に入つてくれたみたいだね」

「え、ええ」

ファルコムさんはアーンヴァルを指差し、「ちなみに、そちらは？」と聞いてきた。

「コマイツは、アーンヴァルつていいます。サポートをしてもらつて
いる俺の仲間です」

ファルコムさんは「へえ…」と言つて、アーンヴァルを見ていた。
一方のアーンヴァルは、腹心地が悪そうにその視線に耐えていた。

「うふ、君の仲間のことだからとやかくは言わないよ」

「さて、それじゃお別れだ」

「はい、ファルコムさん、お元氣で」

「やつちもね。機会があつたら、また会おう」

そう言つて、俺達は別れた。

side ファルコム

ふむ、面白い人もいたもんだ。

色々な経験をしていくこともやつだけど、ああいつたものを仲間と
して連れているとはね。

それに、また会いそうな予感がするから、そのときまでに私もまた
面白い話ができるよつて、冒険をしておひつ。

そう思い、家路を急いだ。

... S A V E
s i d e ファルコム E N D

第1-4話 空から少女が落ちてきた（後書き）

とつあえず、はじめに今回用意したアイテムの説明をしておきます。

ラフアール

武装神姫のアーンヴァルの武装をすべて体をせた飛行形態のマシン、と言えば分かりますかね？ ちなみに大きさは、アーンヴァルの大きさと同じため150cm位です。

（あくまで、アーンヴァル用の武装ですの）

さて、トマトファルムさん登場です。

ケイス「まだ、仲間にはならないんだ」

うん、でも再会のフラグは立てておいたよ？

ケイス「だけど、俺がアーンヴァルを持っているのを見て、どう思つたんだろうなあ」

反応を見る限り、『この変態…』とかではなくただけど。

ケイス「もしそれだつたら、死んでも死に切れん」

トマトファルム、次回はやつとラストライシングです。

ケイス「ノワールとユーリーとソルジャー。ユーリーまで残かつた…」

そういえば君、ユの黒の姉妹大好きだつたね。

ケイス「黒の姉妹言うな」

とこうことで。

それでは次回、「黒の女神」でまたお会いしましょう

ケイス「ちなみに、ラステイションでは中の人ネタ禁止だからな
えー。

第1-5話 黒の女神（前書き）

空から落ちてきた少女、ファルコムと別れラステイションを田舎す
ケイスとアーンヴァル。
彼らはラステイションを田舎し旅を続けていた。
さて、これがどうなることやら。

第15話 黒の女神

うーむ、わからん。

この間ファルコムさんからもらったラファールなんだが、何故か動作しない。

アーンヴァルに言わせると、「ちやんと反応は返つてくれるんですけどね」とのこと。

反応は返つてくれるのに、動いてくれない。

ファルコムさんにこのラファールをもらつた当初は、アーンヴァルが「これで私も戦闘に参加できます!」といつてはしゃいでいたのに。

何で動かないんだろうなあ。

「なあ、アーンヴァル」

「…なんですか、マスター」

「そう落ち込むな。そのうち、ちゃんと動くようになれる」

「…私は落ち込んでもなんていません。では、いつ動いてくれるんでしうが、ラファールは」

ああ。もう取り付く島もない。

何でこうなつちまつたんだね!。

side アーンヴァル

マスター、本当に申し訳ありません。

私はこんなことが言いたいわけではないのに。

何故か、口を開けばマスターを貶すかのような言葉が出てきてしまう。

私は一体、どうじてしまったのでしょつか。

あれ？ 段々と…から…だ、が、つい…

side アーンヴァル END

さつきから、アーンヴァルの様子がおかしい。

今まで、あんなことを言ったことなんてないのに。

まさか、精神的ストレス？

…まあ、普通に考えてそんなことあるわけがない…とも言い切れないなあ。

「おーい、アーンヴァル。機嫌直して出て来いよ」

俺がそう言つても彼女は無反応。

ま、その「ひょいひょい」の顔を出すだろ。

side アーヴィング・ガル

『気がつくと、私は真っ暗な空間にいた。

『よつこじやこらつしゃいました、機械人形』マシンヒューマン

「誰ー？」

聞いたことのない声。

だけど、すいせい懐かしい気がする。

『懐かしい、ですか？私達は初めて会つのですけど

「えー？何で私が考えていることが分かるのー？」

『私はこの空間そのもの。ですから、手に取るよう分かれますよ、あなたが感じている恐怖感も、何もかも』

空間そのもの？意味不明。

私は、思考を巡らすのもバカバカしくなり、少しだけ冷静になつてみる。

「…で、あなたは誰なの？」

『あら、瞬時に冷静になつてしまわれた。やはり面白みがないです

ね、あなた方機械人形は『マシンドール

「誰なのか、…と聞いてるのですけど?」

私は少しだけ怒氣を含めて言つてみる。

『あら、怖い。私は…』

声の主はそこまで言つと、急に声を発さなくなつた。
その代わり、私の目の前にある意味見慣れたモノが姿を現した。
それは、あのラファールだつた。

『お分かりですか?』

「何で、貴女が意思を持つてゐるの?」

『そのようなことを、私に聞かれましても、判るわけがないじゃな
いですか』

彼女(といつていいかは定かではないが)は、そう飄々と答えた。
まあ、もちろん聞けるとは思つていない。

「それで、私にどうしろと言いたいの?貴女が私に成り代わるの?」

『それはそれで魅力的な提案ですが、違います』

『だつたら、何?』

『貴女に、わたしの力を受け取つていただきまます』

わへ、そろそろラスティイションか。

「つむぎさんとかコニーちゃんを生で見られるんだ。

うん、この世界に来てよかったです。

…とその前に。

「アーンヴァル、ラスティイションに着いたぞー」

俺は、アーンヴァルにそう呼びかけてみる。

…無反応。

なぜ？

不思議に思い、胸のポケットに手を突っ込んで、アーンヴァルを出そうとしてみる。

あら？ また無反応？

いつもだつたら、『いきなり手を突っ込むなんて、何でデリカシーのない…』とか言つて怒るはずなのに。

そして、出してみたのだが…。

「スリープモード？」

目が単色の状態となつており、焦点が合つていない状態だった。今まで、こんなことになつていいことはなかつたのだが…。

「あなたの、力？」

『はい、私の力です』

「拒否権は？」

『すいません。もう形振り構つていられないんです』

そう言って、ラファールが私の方へ向かつてきました。
私にぶつかる寸前、彼女は

「一度とあんな悲劇が繰り返さないよう、力を貸してください」と
だけ言つた。

そして彼女が私の中に入り始めた瞬間、理解した。
彼女の力、そして、私のこれから戦い方。

『本当に、無理矢理で申し訳ありません』と彼女は詫びた。
そして、『私はすぐに消えますから』とも言つていた。

「何で、私なんですか？」

『貴女が、一番波長が私に近かつたから』

「私が悪用するとかは、考えなかつたんですか？」

『機械人形^{マシンゾーラ}にそんな器用な真似はできないと考えました』

「どうこいつですか？」

『貴女のマスターは、そんなことができる方ではないでしょ?』

「ま、そうですね。」

私のマスターに限って、この力を悪用するとかは考え付かないでしょ?」

「信用、してくれていいんですね」

『違います』

「え、それじゃ何で?」

『信用ではなく、信頼です』

その言葉を最後に、彼女は言葉を発さなくなつた。
おそらく、先ほど言ったとおり、消えてしまったのだ。つい。

そして、辺りが眩い光に覆われ始めた。
目覚めの時間、ですね。色々な意味で。

私は、その光に身を委ねた。

side アーンヴァル END

「おい、アーンヴァル。どうしたんだよ

「……」

「返事じりよ。おこ、じつじあまつたんだよー。」

アーンヴァルに声をかけても反応がない。

それに、一緒に入れておいたラファールもなくなっていた。
もしかして、あのラファールって呪いのアイテムだったんじゃない
だろうなあ。

もしもうだつたら恨むば、ファルコムさん。

俺は自分から進んで貰つたのに人のせいにじょとじしていた。

「ふああ。。。あ、マスター、おはよつゝれこます。じつせられたん
ですか？」

「アーンヴァルが田を覚まさねえんだよ。じつすればじいと思つ?
アーンヴァル…つて、あれ?」

「え? 私がじうかしました?」

「田を覚まさねえから、じうじょつかと思つたじやねえか

「心配…してくれたんですね?」

「…まあな。俺の唯一のパートナーだからな」

アーンヴァルは「えへへ」と笑いながら、俺のまつに飛びつこう
きた。

さて、ラステイションの協会についたんだが…。

「やつぱり、入らないとダメかな？」

「うううまでも来たら、覚悟を決めましょ！」よ、マスター」

アーンヴァルの言葉に背中を押され、おれは教会のドアを開けた。

「おや。誰かと思えば、空から落ちてきた少女を助けたり、人形を田の前にあたふたして『いたケイス君ではないかな？』

もうやだ、コイツ。

やつぱり間者を潜ませてやがったか。
だつたら、いっちも。

「おや。誰かと思えば、女だとバレないようサテンを巻いている
神富寺ケイさんではないですか」

「なつ、何で初対面の貴方がそれを知っているんだっ！」

俺は涼しい顔をしつつ、

「おや、やつぱりそうだったか。見事にプラフに引っかかってくれ
ちゃつて」

と言つておいた。

『世の中、情報がすべてを制す』でしたよね、ケイさん。
いっつには、原作の知識があるんですよ。

ケイさんは「くつー」と言しながら、じたりを睨んできていた。
あ、やりすぎちゃった？

「ケイ、貴女そんな顔もできるのね」

そう言いながら現れた人影。

黒髪に赤い瞳の人だつた。

「はじめまして。私はノワールよ」

「私は…」

俺が自己紹介を始めようとすると、ノワールさんがそれを止めた。

「ケイから聞いて知つてるわ。ケイス、よね？」

正直、うれしいけどさあ。
自己紹介くらいさせてよ。
まあ、気を取り直して、と。

「ええ。名前を覚えていただいているとは。恐悦至…」

と言おうとしていたのだが、また途中で止められた。
くきこ～つ。

「ねえ、ケイス。そういう物言い、どうにかならない？正直、ケイ
だけでおなかにいっぱいなのよ」

「ノワール！？」

「…！」んな感じでいいですか？ノワールさん

「ん～、さんも要らないわね。ノワールって呼び捨てでいいわ

「わかったよ、ノワール。これで？」

「OK...」

「…！」の、こんなにはつちやけてたっけ？

「それでさ、ケイス

「なんじょ

「一回だけいいから、戦つて！」

Why!?

「何で！？」

「ケイから聞いてね、強そうだなって思ったのよ。でも、実際に貴方を見たらそんなに強くなさそうに見えるじゃない？」

悪かつたっすね。

「だから、一回戦つてみたいのよ」

「ケイス、…さっきの暴言は水に流そう。だから、ノワールと一回でいいから戦つてくれないか？」

ケイはそう言った後、小さな声で「本当に頼む。じゃないと、暴れて手が付けられなくなるんだ」と言った。
お前も苦労してるのな。

「わかった。ただし、条件がある

「条件?」

「ああ、女神化は絶対しないこと」

「貴方、私が女神だつて知つてたの?」

「まあな。ネプテューヌやブランから聞いてたからな

「わづか…でも嫌」

「何ですと…?」

「ちよ。それ、勝負にならないじゃん」

「いいじゃない。ねえ、やーるーおーるー」

「良くねえよ。ま、しかし何だ。女神と戦つてみるのも面白っこかもしれないな。

「分かつた。じゃあ、条件変更だ。俺が勝つたら、ノットチャーンって呼んでいいか?」

「いいわよ、どうせ私が勝つんだし」

「うしつ。だつたら、気合入れるか。

そう思つていいと、アーンヴァルが話しかけてきた。

「マスター、新しい武装があるんですけど、今回試していいですか?」

おお、いいねい。

「よろしく頼んだ」

「はいー。」

「それじゃ、人気がない廃工場でもやりますか」

「つかやんぱんいつぱい」と、俺達を案内すべく歩き出した。
わい、瓶と出るか凶と出るか。

..... SAVE

第15話 黒の女神（後書き）

ケイス「せんせー。タイトル詐欺になつてまーす。タイトルが『黒の女神』なのに、ノワールさんが最後くらいしか出てませーん」

大丈夫だ、問題ない。

ケイス「さて、ど。何か、アーンヴァルがすごいことになつているんだが」

本当はそこだけで1本書くつもりだつたんだけどね。
早くノワちゃんを出したいがゆえにこうなつた。

ケイス「で、新しい武装つてのは何？」

秘密。

でも、大体予想通りじゃないのかな？
だつてさ、アーンヴァルの中にラファールが入つたんだよ？

ケイス「判るか、そんなモン。ちょっとひねくれて考えると、アーンヴァル自身が武器になる？」

そつかもしれないねえ。

とこうことで。

それでは次回、「ノワールとの一騎討ち」でもたお会いしまじょ

第16話 ノワールとの一騎討ち（前書き）

ラステイションについてのケイスとアーンヴァル。
彼らは、ラステイションの女神であるノワールにケンカを売られて
しまった。
さて、これがどうなることやら。

第1-6話 ノワールとの一騎討ち

さて、ノワちゃんと戦うために廃工場とやらにやつて来たわけだが。

「なあ、アーンヴァル。廃工場つて戦いにくくないか？」

「大丈夫ですよ、多分。それに戦うの私じゃないです」

Ｚ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇！

「貴方達、余裕あるのね」

そう言いながらジト目で見てくるノワちゃん。
そんな目で見ないでくれ。

「さて、それじゃそろそろ戦^やらない？」

そう言って、剣を構えるノワちゃん。
絵になるなー…つていかんいかん。そんなこと考えてる場合じやん
かつた。

「女神化はしなくていいんですか？」

「戦つてる最中で切り替えられるしね。そんなこと気にしなくとも
大丈夫よ」

「つい言いながら、剣をぶんぶん振り回していた。
…よつほど戦いたかったのね、この人。

「それじゃ、行きますか。アーンヴァル、剣を」^{ギュリーノス}

次の瞬間、俺の右手にギュリーノスが姿を現した。それを手に取りながら、「了解です」と答えた。

では、行きますか！

side 二

お姉ちゃん達のいる廃工場から少しあなれた高台。私はそこにいる。

ケイからお姉ちゃんと旅の冒険者が模擬戦をする、と聞いたからだ。近くにいたら、迷惑をかけちゃうから、遠くから見ることにした。
…もちろん、双眼鏡を持ってきたわ。悪い？

廃工場に双眼鏡を向けると、ちょうど始まるところだつたらしく、2人が向き合つて剣を構えていた。

まあ、お姉ちゃんに勝てるわけないし、一方的な戦闘になるんだろうな。

あの旅の冒険者ってのも災難よね。

ま、せいぜいがんばつて。一応応援しておくわ。

side 二 END

はじめ、と言う人がいるわけもなく、俺とノワちゃんの戦闘が始ま

つた。

といふか、剣をお互いに向けて、少ししたらこの人斬りかかってきたよ。

まあ、大振りだったから、後ろに跳んで簡単に避けられたが。

「ま、このくらいい避けられるわよね。それじゃ、次行くからね！」

そう言つて、こつちに突つ込んでくる。

そして上から剣を振り下ろした。

ギインと音がし、どうにか剣を受け止めることができた。だが、今の衝撃でまだ手がしびれてる。

油断したな、マジで。

一撃目は通常様子見だろ？

まさかこんなに力を入れてくるとは。

「あれ、もう限界？」

「ンなわけあるか！ちょっと油断しただけだよ」

そういうながら俺は少し間合いを取り、呼吸を整える。

「もう、だつたらいいわ！」

そういうながらまた斬りかかってきた。

今度は横から。

キイイン。

今回は、危なげなく止められた、ハズだった。

「甘あい」

そつぱにつつ、ノワちゃんは鐔の方に剣を滑らせた。
俺は咄嗟に剣を弾き、その攻撃を終わらせた。

「うーん、咄嗟の判断力は合格ラインギリギリ、かな？」

そつぱに、今度は剣を構えて動こうとしない。

…誘つてる？

まあ、罷でもいいかと思い、今度は俺の方から攻めることにした。
上から、横から、袈裟懸け、逆袈裟で剣を振つてみるも全部上めり
れた。

「へえ、結構攻撃力あるんじゃなー」「

そう言つて、剣をぱりぱりさせていた。

side ノワール

あ、危なかつたあ。

剣をちゃんと持つていたし、ケイス君の剣も見えていたからどうに
か捌けたけど、油断してたらホントにマズかった。

まったく、私とそんなに変わらない背丈で何て力を持つてるのよ。

ひつも優位に立てたのに、これじゃ笑いものじゃない。
ひつなつたら…。

side ノワール END

「さて。それじゃ遊びはおしまいね。そろそろ本気でやらせてもら

「うわ

ですよね。

つてゆーか、今の力量差で女神化されるとマズイんじゃない?

「アーンヴァル、そういうば新しい武装があるとか何とか言つてたな、前回」

「前回じゃなくて、わたくしです…」

「うそ、こいつの際どっちでもいい。それつて、女神化したノワちゃんに対抗できる?」

「多分、ですが」

「よし、それをやつてみるか。…ちょっと不安が残るが」

「ノワールちゃん、女神化するんですね?」

「わたくしのつまつよ。怖気づいた?」

「まあ、怖いのも確かなんですが」

言つた瞬間に、ノワちゃんのコメカミがピクつとした。
やべえ。怒らせたかも。

「…冗談です。こっちもちょっと準備したいんですよ。ちょっとだけ待つてもらつていいですっ?」

「ダメ…といいたいところだけど、いいわ。それも見せて欲しいし

ね

ところことで。

「アーンヴァル、それじゃその武装をよろしく頼むー。」

アーンヴァルはそれに対して「はーーー」と冗談よく返事をした。

side アーンヴァル

さて、それじゃ行きます。
わたしたちの新しい力!

「召還陣開放」

私がそう言つと、空に召還陣が作成された。
そして続いて、

「召還、ラファール」

その召還陣からラファールを召還した。
大きさは、私用のものではなく、もっと大きなもの。
つまり、マスター用のラファール。

「アーンヴァル。どうこうことだ、これ」

マスターがそう聞いてきたので、私はこう答えた。
「あのラファールが力をくれたんです」と。

そして、私はそのラファールの方へ跳躍する。

：私は空を飛べませんから。

そして、仕上げの言葉。

「一融合合体！」

こうして私はラファールと融合した。

side アーンヴァル END

まじかよ。

そう思いながら、空のラファールを見上げる。
確かに、すごい武装だわ、これ。

side ノワール

：ナニコレ。

なんで、人間がこんな力を持つてるのよ！

女神化しても、こんなので攻撃されたら無事には済まないわ。

私は頭を抱えた。

side ノワール END

『マスター、驚くのはまだ早いですよ』

頭の中に、アーンヴァルの声が響く。

『今度は、マスターの番ですかうね』

その言葉の後に、頭の中に言葉^{キーワード}、^{ユーセージ}使用方法が送られてきた。

「おーおー、マジかよ」

『マジです』

「男は度胸、一丁やつてやるか！」

「疾風よわれに力を」^{えん！疾風合体}_{（リフラー・キンビネーション）}

俺がそう言つと、リフラーは俺の方に近付きながら二つの塊に分離し、装着された

2つは腕にガントレットとして。

2つは足にサブスラスター兼ガーダーとして。

1つは背中のスラスターおよび前面のガーダーとして。

1つは右腕のマウントウェポンとして。

1つは左腕のマウントウェポンとして。

「お待たせしました。これで、じかうの準備は完了です」

side ノワール

き、聞いてないわよ、こんなこと。

まさか、こんな奥の手を隠していただなんて。

あとで、ケイを問い合わせないといけないわね。

side ノワール END

side ニ

何あれ。

何で人間にあんなことができるの！？
意味が分からぬわよ！

side ニ END

「え、ええ。それじゃ続きをやりましょっか」

そう言ったノワちゃんの体は震えていた。

まさか、武者震い？

これだからバトルマニアは。 -) <)

... SAVE

第1-6話 ノワールとの一騎討ち（後書き）

やつひめこました。

と書つことで、まずは初出の紹介から。

ラフアール（つて前々回も出てたな）

元々はアーンヴァル用の武装を変形・合体させた支援機。この小説の中では、ケイスの支援機となります。

アーンヴァルが異空間から呼び寄せ融合するにより、ケイスの支援を行うことができる。

融合中ももちろん意識はあり、ココロシートの操作やいつも通りの武器還をメインに行います。

基本的なスペックは原作と同じ。

違つ点は、右腕にマウント式の武器（粒子ブロスター）がついているところ。

左腕のマウント式武器は原作通りランチャーワークスで。

この武装の名称についてはまだ検討中。

ちなみに、合体方法は2種類あり、今回の合体はペガサスモードと書つひじこ。

ローレット：ファンネルみたいなもの、とお考へください。

粒子ブロスター：建物等障害物に遮られずに目標に当たられるランチャー、とお考へください。

ケイス「なんだこれ」

うん、まあやうなるよね。

ケイス「つか、合体のといひが適当か、やめや」

しうがないだうが。

詳しく述きたいけど、^{フィギュア}資料が家にはないんだよ。

ケイス「小説の資料として買つたら?」

考えたけど、さすがに約2万をポンと出す勇氣はない。

ケイス「にしても、相当なパワーアップじゃないか、これ」

そうだね。

たぶんこれで女神化状態の方々にケンカ売つても引き分けに持ち込める。

ケイス「引き分け?」

そ。引き分け。

話の都合上、そうなつた。

ケイス「深くは聞かないが、どうせそのうち分かることだからな」

といふことで。

それでは次回、「ノワールとの一騎討ちその2」でもたお会いしま

しう

ケイス「ま、今回決着つかなかつたからな」

それでは。

第17話 ノワールとの一騎討ちの2（女神化ver）（前書き）

ラステイションの女神であるノワールにケンカを売られたケイス。新しい力のお披露目も終わり、後はノワールの女神化を待つのみ。さて、これからどうなることやら。

第17話 ノワールとの一騎討ちの2（女神化ver）

「それじゃ、いつも女神化させてもらひやが」

そう言つて力を集中し始めた。

「見せてあげる。女神の力つてモノを！」

そう言つと、ノワちゃんを中心に光の柱が進る。光が収まつたとき、そこにはノワちゃんの姿はない。変わりに、黒をトレードマークとした女神が立つていた。

「ブッロセッサゴニット、装着完了！・ブラックハート、推参ー！」

いやいやいや、推参じゃないから。

多分言いたかつたんだろうなあ、推参つて。

「さて、それじゃはじめましょつか

そう言つて、左腕のランチャーの照準をブラックハートに合わせる。それと同時にアーンヴアルにコココレットの制御を頼んだ。

『了解です、マスター』

その声と同時に脚部ユニットの先端についていたコココレットが宙に放された。

そして、俺の周りを回るよう回転して回っていた。

「こつでもこいわよ。女神の力を思い知りなさい！」

そつと、ブランクハートは斬りかかってきた。

（「アーンヴァル、ココレットで彼女に攻撃。その隙に俺は彼女の後ろに回つこむー。」）

『はい、了解です！』

斬りかかってきたブランクハートにココレットを向かわせ迎撃させ、そのうちに俺は建物の影を利用してつつ彼女の後ろへ回り込む。

「これで、どうだ！」

俺は彼女の後ろからランチャーを打ち込んだ。

今はココレットの対処に追われてこっちには気づいていないはず。

だが。

「ふふん。銃なんかにせられる私じゃないわ

左腕だけで防御されてしまった。

side 二

たしか、ケイスって言つたつて、あの冒険者。

お姉ちゃんが剣しか使わないと思つて銃のみで応戦しているの？

だとしたら、相当な間抜けね。

あの障害物だらけの場所で銃で挑もうなんて。

動きも制限されてしまうし、障害物を盾として使うことができる以上、彼に勝ち目はない。

だけど、銃使いの私としては、勝つてもらいたいってのも正直あるのよね。

あー、もー、どっちを応援すればいいのよ、私は！

side 二 END

移動に時間がかかってしまった以上、防衛されることも予想できたが、まさかこれほどとは。

そんな時、アーンヴァルが『何でスラスターを使わないんですか?』と話しかけてきた。

…忘れてた。

…

（「アーンヴァル、スラスターの制御をこいつに」「元気にな」）

『こんなこともあるうかと、マスターの意思で自由に操作できるようにしてあります』

…先に言え、先に。
まあいい。

これで、彼女に高速で近づけるわけだ。

そこで、脚部スラスターを少しだけ吹かし宙に浮いた状態にした。

「さて。じゃあこっちも本気で行かせてもらひや」

そつと、スラスターの出力を全開にする。
…正直、見誤っていた。あそこまでスピードが出るとは。
気づいたときには、銃口をブラックハートに当てている状態だった。

「！」

「チェックメイト！」

そつ言ひて、俺は再びワントゥーチャーを打ち込んだ。
今度はゼロ距離射撃。
当たらないはずがない。

「…やるじゃない」

そつ言いながら、俺を睨みつけてくる。
よく見ると、そつと撃つた場所を押さえつけて、痛みに耐えている
ようだった。

side ノワール

いつたあ…。

今何が起つたのよ。

気がついたらケイスが田の前にいて、銃を発射された。

コレじゃ、いくら距離を離してもダメね。

だったら、建物の影に隠れて様子を見るしかないかしい。

side ノワール END

俺は、アーンヴァルにココレットを回収させた。

「さて、立場が逆転ですよ。降参します?」

「誰がよつー」

彼女はそう答えると先ほどの傷を押さえながらかなりの速さで移動していった。
「ですよねー」。

多分俺でもそういうわ。

どこかの建物の陰に隠れて、回復を待つ戦術。

でも、それは問屋が卸しません。

(「アーンヴァル、ココレットでブラックハートの潜在場所の座標特定を頼む。あ、できれば見つからぬようにな」)

そう言つと、ココレットは上空に浮かび上がり、ブラックハートの搜索を開始したようだつた。

さて、それじゃあ見つかるまでチャージをしておきますか。
そう思い、粒子ブラスターのチャージを開始した。

『マスター見つかりました。今、座標を送ります』

そうアーンヴァルの声が聞こえた後、頭の中に座標情報が流れ込んできた。

さて、と。

俺はその座標に銃口を向ける。

「粒子ブラスター、発射！」

side ノワール

「粒子ブラスター、発射！」

そう、ケイスの声が聞こえた。

まったく、何を考えているのかしら。

こんな障害物の多い場所で銃を撃つても、当たるわけないじゃない。

そう思っていたときだつた。

地面が揺れている？

何だか波が押し寄せているかのような振動だつた。

波？

そう思い至つたとき、私の足元で青白い光が走つた。

そして、私を包囲するかのように青白い光の壁が出来上がつた。それは段々と私の方へ近づいてくる。

「きやあああああつ！」

side ノワール END

「きやあああああつ！」

よし、当たつたみたいだな。

さて、これからどうするか、と思い悩んでいたとき、アーンヴァルが話しかけてきた。

『マスター、追撃の必要はなさそうです。今の一撃で決しました』

えええええつ。

だつて、まだ序盤じやん。
ゴーパーンモードとかグランーポーレとか、やりたい」とまだたく
さんあつたの!。

『今は我慢していくだれい、マスター』

アーンヴァルが冷たい。くすん。

side 二

お姉ちゃんが、負けた!?

それも、銃使いに!?

もしかして、あの人に銃の使い方を教えてもらひれば、お姉ちゃんよ
り強くなれるのかなあ。

うん、ラステイションに戻る所で声をかけてみよつ。
もしかすると、もしかするかもしれないし。

でも、お姉ちゃんが反対するかなあ。

side 二 END

武装したままノワちゃんがいると思われる座標に行つてみると、確
かにノワちゃんが倒れていた。
女神化が解除されて。

「ノワちゃん、大丈夫？」

そう言いながら頬をぺちぺちする。

何か、顔中がぴくぴくしているが、起きる気配まったくなし。さらにぺちぺちしてみる。

ノワちゃんは「うん」といいながら、目を開けそうになっていた。もう少しかな？

「ノワちゃん、大丈夫？」

頬のぺちぺちを繰り返していたら、バツと飛び起きた。

「あ、あれ？ 私、倒れてた？」

「うん、倒れてた」

「あ…負けちゃったんだ、私」

そう言つと、ノワちゃんは落ち込んでしまつた。

まあ、無理もないな。

普通の人間に負けちゃったんだから。

それも女神化して。

「負けたから何だつて言つのさ」

「え、だって負けちゃったのよ、私。私を信仰している人たちに申し訳なくつて」

あ、ノワちゃんってプライドの塊だつたなあ、そういうえば。まったく、扱いにくいことこの上ない。

「ね、ノワちゃん。負けなこととその信頼をたたずと約束してるので？」

「約束はしないわよ

「だったらこじちゃん。もつと、気楽に行ひつけ

「でも…」

「だったら、俺の負けでいいや

「え？」

「俺の負けでいいって言つてたんだよーはい、「コレで決定」

とりあえず、廃工場からラステイションに向かっているんだが。
沈黙が…。

俺、何か悪い」とした？

side ノワール

ケイスのことが分からない。

あのとき、何でんなことを言つたのか。

『俺の負けでいい』

何で、そんなことを言えるんだろう。
勝利を望んでないの？

うん、せっぱり聞いてみよう。

side ノワール END

「ねえ、ケイス。ちょっと聞きたことがあるんだけど」「ん? 何?」

「せっかく、『俺の負けでいい』って句で言つたの?」

「ああ、そんなことか。だつてさ、ノワールは負けられないんだろ? だつたら、俺が負けるしかないじゃん」

「でも……」

「それさて、女の子は落ち込んだ暗い顔よりも笑ってる顔の方がいいと思ったからさ」

「そういうとまた俯いちました。

こつちは恥ずかしいのを覚悟して言つたのに。」

そんな時、「あの、ちよつといいですか?」といつ声が聞こえてきた。

声のするほうを見てみると、そこにはユニーがいた。

「あの……つてあれ。お姉ちゃんも一緒に顔が真っ赤だし

「ななななな、何言つてるの、ユニー。」といい、意味がまったく

分からなーいわ」

あ、俯いてたのは恥ずかしかつただけか。
あー、よかつた。

……つて、なんでユニーがここにいるんだ?

「君は?」

「あ、すいません。私、ユニーって言こます。そこのお姉ちゃんの妹
です」

なんか、本編と性格が違つた。

「それで、そのユニーちゃんがどうしたのかな?」

「单刀直入に言こます。師匠と呼ばせてもらひつてかまいませんか?」

「し、師匠?」

.....SAVE

第17話 ノワールとの一騎討ちの2（女神化▼e）（後書き）

ところが、ノワールをブッ倒してフラグを立ててみました。

ケース「何でフラグを立てる必要がある」

実は、うれしいんじゃないのか？

ケース「…ノーノメントで」

ところが、最後にゴーを出してみましたが。

ケース「本当に本編と性格が違つた」

まあ、多分今はにゃんこ被つてるだけですよ。

ケース「そこですか」

ところが、

それでは次回、「師匠？」 でまたお会いしましよう

ケース「俺はゴーの何の師匠になるんだ？」

銃のだる、参考。

第18話 師匠？（前書き）

ラステイションの女神であるノワールにケンカを売られ、ケイスはそれに勝利した。

そして、ラステイションへの道程でユニから師匠になつて欲しいと頼まれた。

さて、ケイスの選択はいかに。

第18話 師匠？

「監匠と呼ばせてもらつてかまいませんか？」

ユニーが俺に向かつてそう言つてくる。

ふむ、おれりくどにかで俺達の戦いを見ていたか？

「師匠つて呼ぶのはかまわないけど、何で？」

「強い人に師事したいつて言つのは当然ですー。」

うん、間違いない。

多分、どこかで見ていたんだな。

「だつたら、お姉さんが適任じゃないのかな」

「お姉ちゃんは、貴方に負けちゃいましたし。それに、私の武器はコレですから」

そう言いつつ、ユニーは空間から銃ライフルを取り出した。

へえ、ユニーはもつやういふことができるのか。

「へえ、ライフルか」

「はい。お姉ちゃんは剣が主体ですから、教えてもらえません

「ちなみに、どんなのが使えるんです？」

「わ、私だって飛び道具くらい使えるわよ」

「ちなみに、どなんのが使えるんです？」

「えっと、剣に鬪氣を集中させたそれを打ち出したり、鬪氣を集め
て宙に浮かせてそれを銃で撃つて破裂させて攻撃するとか」
「うひうひ、うひだーとばかりに胸を張るノツヅケ。
デスペラードとスケイツターオリオンか。
つて、それ前作の技ですか。」

「ね？お姉ちゃんじゃダメでしょ？」

「ああ、うそ、うひだね。これは認めざるを得ない

「え？え？私、何か変なこと言つた？」

「ノツヅケんま、分かっていないよ。それは、銃の技じゃない。

「とこいつ」と。よろしくね、師匠」

「何が『とこいつ』なのか小一時間聞いて詰めたいわけだが。

「いや、まあ師匠と呼ぶのはいいが、何も教えられんべ？」

「え？」とヨーは不思議そうな顔をする。
まあ、何か教えてもらえたと思つたんだひひ。

「だつて、お姉ちゃんと戦つて勝つたのよね？」

「まあ、一応な」

俺がそつまつと、ノフちゃんが苦笑いになる。

「一応?」

「ああ、一応だ。あの勝負は、ノワールの勝ちひとつになつてゐ

この言葉に、ユニーが激しく反応した。

ユニーは「あの状況で、お姉ちゃんの勝ちつじどうこと」と言つて、ノフちゃんに突っかかった。

「え、えーとね、私が負けられなつて言つたら、勝ちを譲つてくれたの。でね、私は…つたほうが…つて言つてくれて(こ)によじこ

そつまつながら、ノフちゃんはまた顔が赤くなつていつた。
つてこいつか、なんていう羞恥プレイだよ、これ。

「へえ、じゃあ戦いは師匠の勝ちで、勝負はお姉ちゃんの勝ち?」

「わいわい」と

「わけわかないけど、まあいいわ。」

ユニーはつまつながら、何か的の準備をしてくる。

「何をやつてるんだ?」

「的の準備ですよ。私のウデを見ておこしまりおつと黙つて

そつまつてつつの的の準備が終わったのか、少しほなれたといふでライ

フルにチャージ始めた。

ああ、チャージって女神化しなくともできるんだ。

「姫匠、それじゃ見ていてください」

そう言って、ライフルを構えた。

だが、なかなか発射しない。

「どうして発射「すいません、ちょっと黙つてもいいですか
? 気が散ります」…」

少しした後、ライフルのトリガーが引かれ弾が発射されたのだが、
中心からかなりずれたところに着弾している。

「ちょっと、気が散っちゃったみたいですね」

「ひとつ、教えてくれ。君に射撃を教えたのは誰だ?」

「ケイよ。彼女に言われたのよ、よく狙えって

ちょっと氣になるな。

そう思い、横にいるノワちゃんに声をかける。

「ねえ、ノワール?」

「ひやいつ」

…なにを驚いてるんだよ、そんな!。

「どうしたの? ノワール」

「ど、どうもしないわ。それで、何？」

「ユーリーさん、運動神経よかつたつする？」

「ユーリーさんは少し考えてから」「へーん、悪くはなこと細かわよ。あれでも、女神候補生だし」と言った。
まあ、そうだよな。

「なあ、ユーリー

「何でじゅつ、歸正

「やうひととや、早撃ちをやつてみよつか、あの的に向かって
やつ撃つて、やつやの的を指差した。

「え？ 何でまた」

「ひとつだけ、教えておいつと細かわ

「でも、早撃ちだとよく狙えないから外れるんじゃなこの？」

まあ、普通はやつられるよな。

でも、本当は逆。

初心者とかの場合には、的によつとして筋肉が緊張して当たらなくな
るつてことが多いわけだ。

だから、早撃ちとかで緊張していないう状況を作つてやれば、当たる
確立が上がる、はず。

「だから、狙わなくていい。当たればいいんだよ。戻らせてみ
な

「分かりました、師匠！」

そう言って、ライフルを下に向ける。そして、そこから肩の位置まで上げて、トリガーを引く。当たるよじに調整を加えてから。

今回の弾は、ど真ん中を射抜いていた。

「中心に当たりましたよ、師匠！」

ユニーはやつ言つて喜んでいた。
うとうん、よかつた。

当たるよじになつたのがうれしいらしく、ユニーはそこに残つてまだ撃つしていくと言つていた。

だから、俺とノワちゃんは先にラステイションに帰ることにした。

「ありがとね、ケイス」

急にノワちゃんが俺にお礼を言つてきた。
俺、何もしてないんだけどな。

「ノワール、何のことだ？」

「あの子のうれしそうな顔、久々に見たのよ。いつも、苦虫を噛み潰したような顔をしていたから」

「なんだ、そんなことか。アレはさ、俺が昔人から言われたことを

「言つただけだよ

まあ、嘘は言つてない。

弓道をやつてゐるとき、一度を過ぎた緊張は災いにしかならないつて教えてもらつたからな。

「それでもよ。なんだかんだ言つて、あの子の師匠になつちやうのかな、ケイスは」

「それはないよ、ノワール。俺はまだ、旅の途中だしさ。それに、そろそろワーンボックスに行こうかと思つてゐるから」

ノワちゃんは、驚いたような悲しきようなそんな顔で「えつー？」とつぶやいた。

「それじゃ、教会に行つて荷物を持つて、そろそろまた旅に出るよ」
そう言つて、教会へ向かおうとした。
が、何者かに服を引っ張られ、進むことができなかつた。
まあ、犯人は分かつてゐるけどな。

「ノワール？」

side ノワール

ケイスが、どこかに行つてしまつ。

そう考へていたら、気がついたら私はケイスの服を引っ張つてゐた。

「…ノワちゃんつて呼びなさいよ」

一番初めの約束。

戦いに負けたら、『ノワちゃん』と呼ばれる約束。
そして、私は戦いで敗れた。

「え？ だつて、俺は勝負に負けたから…」

あなたは負けてない。

優しいあなたはプライドを捨てられない私に表面上の勝ちを譲つてくれただけ。

「そんなの関係ない。これは私の意志。それに、私は戦いで負けているのよ。あなたは、そう呼ぶ権利があるわ」

私は…多分ケイスのことが好きになりはじめて…いる。

「ケイスは、私のこと嫌い？」

side ノワール END

「ケイスは、私のこと嫌い？」

なんで、そういう話に行く？

まあ、もちろん嫌いなわけがない。

どつつかと言えば、好きな方に入るだろう。

「嫌いじゃないよ、ノワちゃん」

そう答えた俺は急に恥ずかしくなり、ラストイシジョンへの歩を早めた。

ラステイションの教会。

やつとついたが、ここではたと氣づく。
まさかとは思うが、わざ今までのやり取りはケイの耳に入つてないよな？

入つていないと願いながら、教会の扉を開けた。

「…これはこれは、女神を落としたケイスさんではないですか」

耳に入つてた」。

「いや、すぐに発とつと思つて、荷物をとつに来た次第で。あれ？
俺の荷物は？」

「これのことですか？」

そう言いながら、ケイが鞄を持ち上げる。
紛れもない、俺の鞄だった。

「やつやつ、それ。それをこつちに

「嫌です。とりあえずどうこうとか説明してもらつてから処遇を
決めます」

そんなちゅうどいにタイミングのときに

「ただいま、ケイ。ケイス帰つて来てる？…つて、いたー！」
ノワちゃんが帰つてきやがりました。

「おかえり、ノワール。今、ケイスを問い合わせているところだから
ちよつと待つてくれ」

ケイのやの葉に、ノツカちゃんが顔色を変えた。

「じいじい」と、ケイ。」とと次第によつては無事では済まないわよ~。」

「こや、ノワール。ケイスが君を落としたとの連絡があつて、その真偽を……」

「何のために?ねえ、ケイ。そんなにハツ裂きになりたい?」

ノツカちゃんが、低い声色でやつて言つた。

怖え。

「こや、やんなことは。でも……」

「でも、じゃない。今度ケイスにやつて言つてみたがり……」

「やつて、笑つて

「わ・か・つ・て・る・わ・よ・ね?」

「あ、ああ。悪かつたね、ケイス。引せ止めてしまつて

やつて、鞄を俺に渡してきた。

そのとき小声で「さすがにボクも命が惜しいからね」とだけ言つていた。

さて、これで出発かな?

「まつたく。ケイも気が小さいんだから」

やつてながら、ノツカちゃんはいよいよ笑つた。

なんでも、やつれの奮動は一撃打ったと三つてこらんだが。
とても論じられた。

「また、会えるわよね？」

「やつだね。いつかまた、遊びに来るよ、ノホール
ノツチヤンがす」へ不機嫌そうな顔をする。

あ。

「いあん、ノツチヤン

「ん、よひじー

「ニーナンニマ、お別れ言えなくじーあん、つて叫つておこへ

「ええ、分かつたわ

そして俺は鞄を背負こなおした。

「じや、またね、ノツチヤン

「ええ、今度会うときは楽しみにしてこねわ

そして、俺は空港へ歩き始めた。

空港へついてチケットを買おうとしてこらんとき

「歸匠へつ

とゴニの声がした。

「し、歸匠、エリートですか？」

「リーンボックスに行くんだよ」

「もっと、教えて欲しいことがいっぱいあるんですけど」

「俺が教えることは何もないよ。それに、後は君のお姉さんが教えてくれるよ」

「お姉ちゃんが？」

「もう少しうるさい世界に、剣士はすこない。そして、君のお姉さんは凄腕の剣士だ」

「そんな剣士を相手に、練習ができるなんてラッキーだよ」

「でも、お姉ちゃんはまだたくさんの剣がないし」

「早く当たるもんじゃない。だからこそ、技術を磨くんだ。そうすれば、いつかは当たるようになる」

「あと、俺は師匠でもなんでもなこと。だから、師匠って呼ばなくともいいよ」

「いえ、私にとつては、師匠は師匠だけです。今度いつか、模擬戦をしてくれるといつれじこです」

「帰えておくよ」

やつぱり、俺はチケットを受け取り乗船手続きをした。

「ハニ、元気でな」

そう言って、俺は船に乗り込んだ。
さて、次は最後の国、リーンボックスだ。

... S A V E

ノワーチャンがヤンキー化？

ケイス「いや、俺に聞くな。と言つか、またタイトル詐欺が発生してゐる」

どつちかというか、ノワールの恋物語、か？
とはいへこれでラステイション編終了です。

ケイス「今回、早かつたなあ」

元々、ノワーチャンのイベントを起にすだけのはずだったからね。
4~5話くらいで終わらせるつもりだったし。

ところが、次はリーンボックス編だな。
…正直、何を書こうか迷つてゐる。

ケイス「えええええ。概要的なものもないの？」

ないんだな、これが。

ケイス「…俺、じつなるんだ？」

わあ。

下手すると、ベールをとゲームやつて終了かも。

ところとで。

それでは次回、「（タイトル不明）」でまたお会いしましょ

ケイス「うわ、本当にタイトル不明にしゃがつた」

幕間 設定のまとめ～ラスティショーン編～（前書き）

ラスティショーン編が終了したので、JIGMOでの設定を以下略

幕間 設定のまとめ～ラステイション編～

人物

ケイス

われらが主人公。
とりあえず、ルウェイー編から成長なし。

アーンヴァル

武装神姫の形をした何か
異空間から呼び出したラファールと融合することにより、ケイスの
武装になることができるようになりました。
標準武装としては、

- ・ランチャー
- ・粒子ブラスター
- ・脚部スラスター × 2
- ・リアスラスター

これに加えて、武器を召喚して武装強化することが可能。

ラファールの合体モード

現在、3種類存在します。

1・ペガサスモード

ノワールと戦ったときのモードですね。

基本的に、ラファールと合体するのはこのモードになります。
ここから換装し、別モードになります。

2・ユーローンモード

ノワール戦でケイスがちょっと愚痴つてましたが、
接近戦ではこっちのほうが強いはずです。

追加武装としてP DW1-1、M8ライトセイバーを呼び出し、こ
れらを合体させて剣にします。

加えて、腰部の左右についているガーダーを2つあわせ、盾とし
ます。

(所謂、ディロ・シールドですね)
ただ、エネルギーの消費がすごいので、長時間戦闘には向きませ
ん。

3・ライディングモード

ケイスとの合体前に戻る感じですね。

基本は、敵に突っ込む感じになりますが、それ以外の使い方もで
きるようです。

そのときにまた説明を書きますね。

と言つことで、久々の雑談ですよ、ケイスさん。

ケイス「というか、今回またパワーアップしたな」

まあ、今回はやりたいことの一つだつたからな。

ケイス「アーンヴァル、好きだもんね」

まあ、BMの方でアーンヴァルだけを育てたからな。

ケイス「で、今回の雑談は何？」

「のあとリーンボックスに行って、3話くらいで序章が終わりになるわけだ。

ケイス「で？」

そうすると、1章に入していくわけなんだが、ここでアンケートをとりたいなーと思って。

ケイス「なんのだよ」

1章の一番初めは、ゲームで言うところの序章から始まるわけだ。ここは、女神 s vs マジック・ザ・ハードなわけなんだが、ここにケイスが加わったほうがいいのか? といつこと。

ケイス「俺? 無理無理」

あ、ちなみにケイスが入っても負けますよー。

ケイス「マジか。ちなみに、この戦いに参加しない場合はどうなる?」

ほぼゲーム通りだな。

というか、下手をするとキンクリする可能性が高い。で、ケイスはと言つと、ある場所に冒険に行つてもうつ。

ケイス「…難易度は?」

まあ、そんなに高くないと思つてこよ。

けど、その場合ある理由からマーベルとの合体ができないなる。

ケイス「え？」

うん、ちゃんと理由は考へてあるので。

と並つて、どうがここか一瞬のうちに黙こじりがれてしまいます。

ケイス「で、こつまで募集にする？」

そうだな、11／5あたりまでかな？

一応、締め切つたとわ、その投稿するよ、元になります。

幕間 設定のまとい～ラステイション編～（後書き）

ところがどうもしければメッセージ下を、よろしくお願ひします。
す。

第1-9話 未来の歌姫（前書き）

ラステイションでの冒険を終え、リーンボックスに向かつたケイス。今だ見たことのない景色に思いを馳せていた。さて、これからどうなることやら。

第19話 未来の歌姫

『利用ありがとうございました。またの利用をお待ちしております』

機械的なメッセージを聞きながら、俺はリーンボックスに足を踏み入れた。

というか、まだ空港内だがな。

「まあ、思ったより快適でよかったですよ」

「そうですね、これで2人分払つていなければ万々歳だったんですね」

「けどね」

…お聞きの通り、アーンヴァルの分も切符代を取られたんだ。
しかも、大人料金だぞ。

「私は、大人ですよ！」

地の文にツッコむんじゃねえ。

空港から出て、景色を見てみたんだが…。

「へえ、かなり未来的な都市なんだな、リーンボックスって」

「そうですね。この間まで黒々とした街にいたからかもですけど、白くてきれいな街ですね。」

確かに、白くてきれいな街だな。

「これは夜景がきれいに見えそうだ。

「さて、それじゃ教会でも探しますか」

「そうですね……ってあれ?」

アーンヴァルが何かを見つけたようだった。

「マスター、なんだか歌声が聞こえてきませんか?」

俺は耳をすませてみたが何も聞こえなかつた。

聞こえるのは、所謂人ごみが発する音くらいだった。

「いや、何も聞こえないが

「すゞい透き通つたいい声なんですよ。マスター、私も行ってみたいですね」

まあ、別に急ぐ旅ではないし。

俺はアーンヴァルの提案に乗り、その声の主を探すこととした。

どのくらい歩いたんだろうか。

俺達は空港から少し離れた公園に来ていた。

「なあ、アーンヴァル。まだその声の主ってのは見つかないか?」

「うーん、このあたりだと思つんですけど……」

アーンヴァルが言つには、この辺りから聞こえてきていたのは間違

いないいらしー。

が、今はその肝心な声が聞こえないいらしーんだ。

「歌うのをやめちまつたか？それともアーヴィング・ヴァルが壊れ始めたか？」

「私は壊れません！」

そんな時、「ねえ、お姉ちゃん。もう、お歌歌わないの？」と歌う声が聞こえてきた。

明らかに少年の声だつたが、『歌』と歌う声に引かかっただけだ。

side ????

「ねえ、お姉ちゃん。もう、お歌歌わないの？」

喉が渴いちゃつたから水を飲んでた時に、急に男の子に話しかけられちゃつた。

ええと、何て答えたらいいんだろ。

「え、えと、あの、その…」

「ほら、このお姉ちゃんも困つてゐるじゃへんなんぞこね、急に声をかけちゃつて」

「い、いえ」

多分、声をかけた男の子のお姉さん、だと想ひ。

丁寧に頭を下げるから、男の子の手を引いて歩いていった。

あの男の子に悪いことしちゃつたな。
はあ。ボク、何でこんな性格なんだろ。

「お姉ちゃん、バイバーイ」

さつきの男の子が、ボクに手を振りながら声を言った。
だから、ボクも手を振り返したんだ。

……あ、小突かれてる。

s i d e ? ? ? E N D

青い髪、ヘッドホン……。どう着えても5つ……だよな、あれ。
そして、どうしたもんか。

そんなことを考えていると、アーンヴァルが「ちょっと声を掛けて
きますね」と言つて、5つ……（仮）に近づいていった。
オイ。

「あのー」

「……ー」

「あの、すいません。怪しい者じゃないです

こりいら、アーンヴァル。それじゃ怪しい人だよ。
そう思いながら、俺も5つ……（仮）に近づいていった。

s i d e 5 p b . (仮)

「ボク、夢でも見てるのかな。

人形がボクに話しかけてくるなんて。

「私、アーンヴァルと申します。先ほど、歌声が聞こえてきたので来てみました」

「この人形さんはアーンヴァルさんとこいつらしげ。会った事、ないよね？」

「あ、ありがとうございます。ボクは、5月・つて言います」

「夢の中だから、ちゃんと受け答えができるみたい。本当にちゃんと受け答えができるからいのにな」

「5月・さんですか。マスターから伺っていたイメージと違いますね。ちゃんと受け答えなさいてますし」

「へ？」

「もしかして、これって夢じゃない？」

「あ、でも、すごい歌が上手って聞いてます。たつき歌つていた歌とか、もう一度お願ひできますか？」

「え、いや、あの、だけど……」

「夢じやないって分かつた途端、喋れなくなっちゃった。あはは、やつぱりボクだなあ。

「あ、マスター。5月・さんですよ、5月・さん」

アーンヴァルさんが誰かに向かってそう言っていた。

アーンヴァルさんが向いている方向を見ると、男の人が立っていた。

side 5pb・(仮) END

俺はアーンヴァルに「わかつてゐるよ」と言つて、5pb・に向き直つた。

「はじめまして、ケイスといいます。アーンヴァルのマスターをやつてます」

そう、挨拶したんだが…。

5pb・の動きが止まつた。

「あの、大丈夫ですか、5pb・さん」

そう言つて、肩に手をかけようとしたんだが。

「ボ、ボクは5pb・って言います」

と言つて返してくれた。

うん、挨拶は必要だよね。

「それで、実は、君の歌を聞くために探してたんだ」

「え?」

5pb・は不思議そうな顔をする。

ま、当然か。

「ボ、ボク有名じゃないし、上手くもないですよ」

「そんなことないよ。なあ、アーンヴァル？」

「はい、そうですー空港から出たところで聞こえました。すこしきれいな、澄んだ歌声でした」

アーンヴァルがそう言つて、500・はすじく恥ずかしそうに照れていた。

「だけど、実際空港といつて結構離れてるよな。どうして聞こえたんだろ?」

「神姫イヤーは地獄耳なんですよー！」

アーンヴァル。それ、某アルトレーネのセリフ。

「ま、まあ、それはそれとして、歌を聞かせてもらえないかな、君の歌を」

俺がそつと歌つと、でしたら、とアカペラで歌い始めてくれた。

曲名?

野暮なことは聞かない。

「無理言つて、申し訳なかつたね」

「だ、大丈夫です。」ちらりと、聞いてくれてありがとうございま

した

そう言って、さゆりは笑顔で返してくれた。
うんうん、やっぱり笑顔はいいや。

「それで、俺はファン第一号ってことでいいのかな？」

「え? えええええつ! ?」

そんなに驚くことが、一回。

「あ、もうファンがいたんだ。 そうだよね、あんなに歌が上手いん
だし」

「いえ、そういう事ではなくて。本当に、ボクのファンになってくれるんですか？」

そういう心配か。

「もちろん。これからお願ひしたいくらいだよ」

「でしたら……はい！」

さて、それじゃ俺達は教会に向かうとしますか。

「それじゃ、俺達教会に行くからさ。」

「せ、お髪をつけて」

「うん、ありがと」

そう言って、俺達は別れた。

side 5pb .

ケイスさん、かあ。

すつごい、いい人そうだつたなあ。

だけど、ケイスさんに挨拶されたときに挨拶返さないといけないって思ったのは何でだる。

けど、これでボクにもファンができたんだ。

しかも、一度に2人も。

うん、自信が出てきたよ！

side 5pb . END

... SAVE

第1-9話 未来の歌姫（後書き）

はい、とにかくと、リーンボックス編始まりましたー。

ケイス「おう。ってことで、最初は5pbとか。といつか、えらくあつむりだな」

まあね。

一応、5pbが人見知りを発動しなかつたのには理由があつたりする。

ケイス「どうせ、『都合主義とかそんなもんだろ?』

チミは俺のことをどうこう田で見てるんだよ。
このページ見れ。

ケイス「へえ、こんなことがあつたんだ」

たしか、1年位前に何かあつたよなーと思つてググつたらこれが出てきたんでそのまま採用した。

ケイス「なんて安直な」

とにかくと。

それでは次回、「ゲームーな女神様」でまたお会いしまじょ

ケイス「誰のことか丸分かりだな」

第20話 ゲーマーの女神様（前書き）

5pb・と別れた後、ケイスたちは教会へ向かっていた。
そんな彼らに、悪夢が襲いかかろうとしていた。
さて、これからどうなることやら。

俺達はリーンボックスの教会に向かって歩いている…ハズなんだが。

「なあ、アーンヴァル。教会ってこんなに遠いのか?」

「ええ、街の外れのほうにあるみたいなんですよ」

そう言いながら、俺をナビゲートしていた。

な音が聞こえてきた。

「ね、マスター、誰かが走ってきてるみたいなので、注意してください

「おひ、分かつて…うばあつー」

その足音の主は見事俺にクリーンヒットした。
しかも、何ともありうか俺を下敷きにしやがった。

「んー、んー、んーーー(ビカー、ビカー、せやくビカー)ー。」

「どなたですか？ 私に鉄山靠てつざんじょうをかました方は」

なんかこの口調、聞いたことがあるよいな……。
つて、そんなこと考へてる場合じやねえ。

俺は、「んー、んー」と言いながら地面をバンバンと叩いた。
く、苦しい。息が続かねえ。

「あらあら。下に誰か倒れているみたいですね」

「うおー、気づいたなら早くどいてくれー。」

俺はわざと地面をバンバンと叩いた。

「私がどいて差し上げればよいのでしょうか」

「そう言って、ビリビリとしたらじいのだが。

「あ、あら?」

バランスを崩して、再び俺の上に覆いかぶさるような形になった。

むにゅつ。

なんか柔らかいものが2つ押し付けられてるんですけど。
う、うれしくなんかないですじょ? ?

そのあと、やつとどいてくれました。
もうちよつと感じていたかつたとか、思つてないからね?

「大丈夫ですか?」

「貴女には、これが大丈夫に見えるんですか?」

「…見えませんわね」

まあ、見る限り服はぼろぼろで擦り傷だらけ。
どう見たって大丈夫には見えんわな、これは。

「ちょっと、私の家までお越しくださいな。治療いたしますので」

まあ、ここの好意に甘えておひいつか。

「すいません、ご迷惑おかけします」

「やついえば、血口紹介もまだでしたわね。私はベールと申します

「私はケイスと申します。冒険者をやつておつまみ

と、お互に血口紹介をしあつた。
まあ、もうひん分かつてたけどね。

「あら、それではネプテューヌ達が言つていたケイスさんと言つ方
は…」

「多分、私のことではないかと。ネプテューヌさん、ブランさん、
ノワールさんと面識ありますから」

「へえー、不思議な縁ですねえ」

「そんなことを話しながら、俺とベールさんは教会のほうへ向かって
いた。

「やついえば、何をそんなに急いでいたんですか？」

「えーとですね、今日は実はゲームの発売日でして…」

ベールさんの声が段々と小さくな。

「それで、…その…を置つ…、自分の…でやるのを…」

声がどんどん小さくなつて、聞き取りづらい。
多分、女神がそんなことをやつてこる、と知られたくないのかな。
だとすると、俺の取るべき行動は…と。

「あ、ゲームですか？俺も結構やりますよ？キンタとかの格闘ゲー
がメインですけど」

「キンタですか？あれ、結構難しいんじゃないんですか？」

「いや、ゲーセンで鍛えましたから」

もちろん、前の世界でね。

「それで、今日買つてきたゲームつて何ですか？」

「これは、武装紳士^{アーモンド}って言つゲームで、紳士の育成ゲームな
んです。一年前に武装紳士つて言つのが出たんですけど…」

やべえ、語りだしちまった。

こつちがゲームをやる人間だと知つた途端に「これかい。
ちなみに、教会につくまでこの武装紳士と言つゲームがいかに魅力
的なゲームなのか、と言つことをずっと聞かされた。
勘弁してくれ。

教会について、ベールの私室らしき部屋に通された。

ベールは、「ちょっとだけ待つていてくださいね」とだけ言い残し、部屋を出て行った。

おそらく、薬などを取りに行つたのだろう。

それから少しして、部屋のドアが開いた。

俺は、ベールが帰つてきたものだと思いそちらを見ると、それはチカだつた。

「お姉さま、帰つていらしてたんですね。今日もまたお一人で出かけるなんて。私に声を掛けていただければ、同行いたしましたのに。…つてあら?」

これだけ喋つて、やつと気づいたか、この人。

「あなたどちら様ですか?なんでお姉さまの部屋にいるんですか?即刻出て行つてくださいまし!」これは、あなたがいていい場所ではありませんよ!」

はあ、機関銃みたいな人だな、この人。
相手は疲れそなうんで、相手にしないことでFA。

「きいーつ。何で私の言つことを聞こいつとしないんですか。大体、あなたはお姉さまの何なんですか!」

「…私のお客様相手に、何やつてるの?チカ」

ここでベールさん登場か。

正直、もうちょっと早く来て欲しかつた。

「え？ お姉さまのお客様、ですか？」

「さ、早く謝つておきなさい。今だつたら許してくれるかもよ?」

そう言いながら、俺のほうにワインクするベールさん。
仕草が一々色っぽいんだよなあ。

「え、でも…」

「いい事教えてあげましょうか？彼、あのケイスつて方よ？」

ベールさん、何かその言い方すごい気になるんですか。何か俺、ひどい事言われているような気がするんだが……。

「え……。冗談ですよね、お姉さま。あの「ブラックハート」を一撃で
粉碎したっていう、あの？」

15

おいおい、何か話が大きくなつて伝わつてゐるぞ。

「ええ、 そうよ。 もし彼の機嫌を損なうのであれば、 貴女を容赦なく外へ放り出しますからね？」

そう言いながらにいつと笑っていた。

冗談つて分かつてても怖ええ。

「ひいいいつ。」めんなさい、めんなさい、めんなさい。命だけは勘弁してください」

土下座をして涙を流しながらそういうチカラさん。

うん、じゅじゅチカさんは新鮮だなあ。（現実逃避）

「…だそ、ケイスさん？」

何か、俺すごい悪者にされてない？

「チカラさん？」

「はいっ！？」

そんなに去えなくていいと思つんだナゾなあ。（・・・シヨボーン）

「俺、そんな人に見えます?」

「はい」

：見えるんかい。

「そうですか、だったら… 肅清ですね」

「ひつ！？」

ちよつと、一~~度~~居打ちますか。

「だったら、いっちゃんに来いや」

そう言って、チカさんの胸倉をつかんで外に行こうとする。

チカさんは体が硬直してしまつてゐるようすで、簡単に持ち上がつた。

「ベールさん、ちょっとだけ待つてください。すぐに戻つてきま
すんで」

そう、いい笑顔で言つておいた。

と、そうだ。こつちもやつておかないと。

俺は、チカさんの耳に顔を近づけ、チカさんにだけ聞こえる声量で
こつ言つておいた。

「別に、あなたに何をするわけではないですよ。もう少しだけ付き
合つてくださいね。いいものが見れるかもしませんよ？」

と。

side ベール

え？ 何がどうなつたの？

チカにこつと反省してもらひおつと思つただけなのに。

だけど、現実にこつなつてしまつた。

チカだけは助けないと。

：私はどうなつてもかまわないから。

私はそう思い、ケイスさんの後を追つた

さて、そろそろかな？

side ベール END

「お待ちかねだわーー！」

うん、来た

「何ですか？」

俺は、できるだけ低い声で呟いた。

「チカを返してくださいー！」

「どうして、と聞いても？」

「彼女は何もしていないじゃないですか！」

「侮辱しましたからね、私のことを」

「それについては、私が謝りますから、ですかーー！」

「それでは足りませんね。貴女が彼女の代わりになりますか？」

さてベールさん、ここが正念場ですよ。

答え如何では…。

「彼女を助けてもらおうなら、それでもいいです」

即答ですか。

さすがですね、ベールさん。

「だそうですよ、チカさん。いいもの見れたでしょー？」

「はーー！」

「それじゃ、2人で私を騙したの？」

「というか、ねえ。ベールさんが悪いんですよ？あんな悪い顔をするから」

「うう」

流石にやつすぎたと思つたんだろうな。

「ですが、あなたもひどいですわよ？何もあやしまで…」

「だつて、意趣返しをしたかったものですから」

まあ、確かにやつすぎた感はあるけど、ちやんと田舎ははつたからなあ。

「まあまあ、お一人とも。もういいじゃないですか、過ぎたことですし」

「「お前が言うつなー」」

俺とベールさんの声がハモつていた。

第20話 ゲーマーの女神様（後書き）

… IJの、ラツキースケベが。

ケイス「え？俺、何もしてないじゃん」

みんなの意見を代表して言つただけだ。他意はない。

ケイス「ちなみにだが。なんでノワちゃんがウォーライクなんだ？」
ウォーライク：W A R L I K E つまり、戦闘狂とか好戦戦士とか言う意味

いや、真実じゃね？

といつも、今回悪い顔だなー、お前。

ケイス「やらせたのが自分だ、つていつ自覚はあるのか？」

いや、だつてや。

ベールさんと道でぶつかる

ベールさんの部屋に連れ込まれる

チカと鉢合わせ

チカと口論

てな感じにしかならんだろう。

ケイス「いや、だかりびつしてあんなつたんだよ。」

ノリ?

とこつことで。

それでは次回、「特命課メンバー」でもたお会いしましょう

ケイス「あ、逃げやがった」

第21話 特命課メンバー（前書き）

ケイスはリーンボックスでの悪夢を乗り越え、その翌日教会でティー
ータイムを満喫していた。

その最中にリーンボックス特命課の話に上がった。
さて、これからどうなることやら。

第21話 特命課メンバー

「まあ、何だ。

この間まで色々とあつたわけだが。

今は、何事もなかつたかのように3人で優雅にティータイムを楽しんでいた。

「流石は女神様、紅茶とゲームには金をかけるみたいですね」

「…私は、どう反応すればよろしいのかしり」

「事実じゃないですか、ベール様」

「本当だつたんだ…。
まあいいや。

「それはそれとして、だ。紅茶も美味しいし、このクッキーも結構いける。で、何を企んでる?」

俺がそう言つと、一人はビクンと反応した。
やつぱりか。

「いえ、別に何も…」

チカさんはそう否定していたんだが。
いずれ分かる」とじょり、とベールさんは話を切り出した。

なんでも、今現在リーンボックスでは治安が徐々に悪化しているらしい。

目に見えて悪化しているわけではないらしいのだが、ストッパーが効いていないらしいんだ。

まあ流石にそうなつてくると教会も何もしないわけにはいかず、自衛組織を結成するに至つた。

その結成した組織は、リーンボックス特命課といふらしい。

「結成したまではいいんですが、この組織のボスが役に立たなくてですね」

「ま、よくあることだね。

「街中に女装をして現れ、歌を歌つて去つていくと言つ暴挙を繰り返してまして」

「ちょ。それどこのアイマスCM?」

「それなので、この間クビにしたんですが、いい人材が見つからず…」

「それで、俺にそこに入ってくれつてこと?」

「いえ、それはそれで魅力的ですが、そうではないです」

「まあ、請われても入る気はないけどね。
としたら、何だろう。」

「そのクビにした元ボスなんですが、火山に陣取つてゐるらしいのです」

「はい?」

「その者は、ボスを任せられた時に腕が立ちまして、今のメンバーでは、誰も歯が立たない状態なんですよ」

「ですから、その元ボスを倒してきて欲しいのですが、ダメでしょうか？」

なんという。

ま、でもそのくらいの依頼だつたら、受けられるかな。

「いいですよ。そのくらいだつたら」

俺がそう答えると、2人はお礼を言つてきました。
まだ早いんじゃないかなえ、礼つてのは。

「やつしましたら、案内役を付けさせていただきますね」

そつ言つて、ベールさんは手を2回パンパンと鳴らし、いつ言つた。
「ケイブ、いるのでしょうか？」

その直後、ベールさんの影が持ち上がり、人の形を取つた。
… ケイブさんだつた。

「… ケイブ」

「あら、ケイブ。今日はそこから登場ですね」

後から聞いた話だが、ケイブさんはマジで神出鬼没らしく、部屋の隅から現れたり、どこぞの隙間妖怪ように空中に裂け目を作りそこから出てきたり、とするらしく。

見てみたいような見たくなこよつた。

「…何？」

「この方に、あの変態を倒してもいいかと思いまして。道案内をお願いできる?」

「了解。ついてきて」

ケイブさんはそう言つと、どんどん歩き始めてしまった。
つていうか、今から倒して来いつてことかよ。
ま、いいかと思い、ケイブの後を追いかけた。

ケイブはどんどん進んでいつてしまい、なかなか追いつかせてもらえなかつた。

それなりに混んでいる場所などを何箇所か通つてているんだが、何もないかのようになんでいる。

まあ、それがケイブなんだろうなあ。

それからもう少し進み、アンダーラインヴァースの入り口に着いた。

「…」

そう言つて、入り口を指差すケイブ。

そして、すぐに踵を返して来た道を戻ろうとしていた。

「おい、ちょっと。待つてくれないのか?」

「…ベールに言われたのは案内だけ。案内したから、帰る」

いやいや、ドライすぎるだろ、それは。

「んー、10分でいい。少しだけ待っててくれ

多分、10分もあれば倒せると思い、俺はケイブにそう言った。
ダメかな？

「ん…分かった。10分だけ待とう」

そう言って、その場に立ち止った。

それを確認してから俺はアンダーラインヴァースに入り、元ボスを懲らしめるのだった。

所要時間3分。

あっけなかつたなあ。

「ユニローンモードまで持ち出しておいて言つセリフではないです
よ、マスター」

元ボスを倒し、ケイブのところに戻ると、彼女は先ほど立ち止まっていた場所で本当に待っていた。

彼女は空を見上げていた。

「…早かった」

「まあ、急いだからな。それより、何か見えるのか？」

「…青い空」

「そこですか

おれはそう言つて、歩き出でたのとしたんだが、ケイブが歩き出でたとしなかつた。

ビービーしたのか、と尋ねると。

「まだ、10分経つてない。それに、まだ空を見ていたい気分」

と言つた。

俺は「しょうがねえな」と言い、一緒になつて空を見上げた。

空は、高いねえ。

俺が中に入つてから10分くらいは経つただろつか。
まだ、ケイブは歩き出でたとはしなかつた。

不思議に思い、俺はケイブのまつを見てみた。

ケイブは、ちよつと視線を俺の方へ移したところだった。

「行くか？」

「…ん

そんな会話ともいえないやり取りをし、俺達はリーンボックスへ歩き始めた。

少し歩いたところで、ケイブが俺に話しかけてきた。

「…空は…好き？」

「空？」

「もう、あの空」

そつと、上を指差す。

「空、ねえ」

そつと、空を見上げる。
好きでも嫌いでもないなあ。

「…好き?」

「わからん。でもまあ、嫌いではないな」

「…やう」

そう言つと、ほんの少しだけ暗い顔をした。
すぐに元の表情に戻つてしまつたが。

そんな時だつた。

／＼＼

あの歌声が聞こえてきたのは。

side ケイブ

歌声が聞こえる。

何よりも、透明な。

儂く、それでいて強い歌声が。

私の魂を揺さぶるような、優しい歌声が。

side ケイブ END

歌声が聞こえてきた公園。

俺とケイブはそこへ入つていつた。

そこは、前に5pb・と会つたあの公園だつた。

「～～～～」

やつぱり、5pb・か。

そう思い、横を見てみるとケイブが5pb・を見ていた。
この歌が終わつたら、話しかけよう。

「よ、5pb・。久しぶり」

「え？ あ、ケイスさん！」

「やつほー。相変わらず、良い声してゐるねえ」

「あはは。お世辞でも嬉しいです。…あれ？ そちらの方はどうなたです？」

5pb・はそう言って、ケイブのほうを見た。
見られているケイブは、何か萎縮しているかのようにも見える。
ゲームとは逆だなあ。

「…きれいな声、だつた」

「ありがとうござりますっ！」

ここで 5 p.b. とケイブがお互いに自己紹介。

そして、色々な話をしていくようだった。

まあ、女の子同士の話だったから、俺は席を外させてもらひったが。

そして、この2人は友達になつたらしい。

5 p.b. と別れ、ケイブとリーンボックスへ向かってすこし経ったとき。

唐突にケイブが「：ありがと」と言つてきた。

「何が？」

「…10分待つてて、得をした」

「そうか、それは良かつた」

「…だから、これはお礼」

そう言つと、ケイブは俺の頬にキスをしてきた。

「他意はないから」

そう言つたケイブの頬は、少しだけ赤みがかっていた。

第21話 特命課メンバー（後書き）

…お前は。

ケイス「俺、今日は本当に何もしないじゃん」

…俺は何も言つてないが？

とこうじと、ケイブ登場でしたー。

ケイス「というか、本文でベールさんとチカラさんがしゃべつている
と、どっちがどっちだか分からなくなつてくるな」

言つた。書いてて、俺も混乱したんだから。
あれ？これどっちが言つてるんだつけ？てな。

まあ、これでリーンボックスも回つたし、あとは…。

???1「ちよーっと待つですのー！」

???2「わたしたちが出てないよつー」

うん、「めぐ。

君達を出す構想は元々なかつた。

???1「なんですかー？」

???2「だつて、ファルコムやケイブは出でるじやん。意味が分
からないよー！」

まあ、そういうことで、たぶん次回はリーンボックス最終回です。

ケイス「うーん、長かったんだか短かったんだか。やつと、本編ち
ょい前まで来た？」

いや、マジでどうか考
え中。

一応、設定上2～3ヶ月くらいは残ってそ
うなんで、どうかでやつ
くつさせる気でこます。

ケイス「俺としては、ラステイションでやつくりしたいかなー、な
んて」

とこう」と。

それでは次回、「振り出しに戻る?」でまたお会いしましょ

ケイス「おー、無視すんな。あ、それじゃまた次回でー。」

第22話 振り出しへ戻る？（前書き）

ケイスはリーンボックスで主要な人物に出会い、しばしの休息を満喫していた。

だが、やっぱり気になるのはあの子だった。

そして、ケイスはリーンボックスを離れる決意をする。

ケイスの選択は、吉と出るか凶と出るか。

第22話 振り出して戻る?

「… そういうえば、」それで4国とも回ったんだよなあ

俺はベッドの上で横になりながらそう呟いていた。
そして、今までのことをいろいろと懐に出す。

俺が初めてこの世界に現れたのはプラネットユースのバーチャフォレストだつたつけ。

そこで、スライヌに襲われてた（よう）に見える）俺をネプギアに助けてもらつて。

そのあとギルドに行きたいつていうネプギアの護衛をするためにアイエフと戦つたんだよな。

あの時は焦つたよな。まるつきり戦闘経験ナシの俺が戦闘をせられたんだから。

まあ、どうにか切り抜けらてたし結果オーライだろ。
それでギルドに行つてネプテューヌに会つて、ハネダマウンテンで野良ドラゴンを退治。

あの時のドラゴンは実は結構強かつたんじゃないかなー、とか思うんだよね。

今の俺だったら、まあ楽勝なんだろうけど。

次にルウェイーに行つて、DSTTに襲われてるロムちゃん^{だつたつけ}とラムちゃんを助けて。

で、教会に連れて行つてもらつて、ブランちゃんとナナちゃんに会つたんだよな。

そのあと俺が来たのを狙つたかのようキラーマシンを復活させたグリさんと戦うことになつて。

グリさんも改心（ていうか、多分だまされてたんだろうなあ）して

くれたし、まあ良かつたな。

ただ、もつるウェーにはゲイムキャラがいなってことだったからどうしようかってなって。

結局ネプテューヌに頼んでゲイムキャラを貸してもらつてキラーマシンを封印してもらつたんだつけ。

このまま行くと、キラーマシンともう一回戦いつになるんだもつたな。

あの時はラファールがなかつたから、今だつたら剣だけでも倒せらんじやないかな。

そういうえば、ルウェーからラステイションに向かつてゐる時にフルコムさんに会つたんだつけ。

会つたつて言つか、空から落ちてきたんだつたな、そういうえば。

思わずラピタを思い出したよ。

で、フルコムさんは空に浮かぶ島から落ちてきたつて言つてたなあ。

でも、原作だとそんのはなかつたはずだし、その島つて何だらうねえ。

ラステイションでは、ノワちゃんに勝負を挑まれて大変だつたなあ。でも、ラファールを手にした俺には、楽な戦いだつたかも。まあ、ノワちゃんの油断と粒子ブラスターがあつたから勝てたんだらうな。

そのあと、『こに『師匠つて呼んでいいですか?』つて言われて。流石にアレは面食らつたよなあ。

でも俺は基本は剣士だし、基本しか教えられなかつたんだよね。誰か、いい師匠役はいないかなあ。…つて、ケイブはどうだら。

そして、『こにリーンボックスでは公園で歌つてる5つ。と会つて。俺とアーンヴァルでファン1号2号にしてもらつたんだよなあ。

原作ではアイドルをやっていたし、そのうち有名になるんだりつな。
その後、あのゲームに会って、つていうか交通事故になつて。
……やわらかかったなあ。

つて、そうじやない。

そのあと教会でチカラさんと口論をして、仲直りをして。
で、ついこの間ケイブとアンダーラインヴァースに行って、あの変態
を倒したんだよなあ。

みんな、どうしてるかなあ。

またみんなに会いたいねえ。

「マスター、そろそろ次のところへ行きませんか？」

ベッドでまどろみの中にいた俺に、アーンヴァルがそつまつへくる。

「次のところねえ。次つてどこなんだろつなあ

「やうですね。ギョウカイ墓場つて所はどうなんですか？」

「あいおい、アーンヴァルさん。冗談きついですよ。

「でも、全部回つてしまつたしなあ。どうしようかねえ

うーん、やっぱり墓々巡りになるな。

そう思つてみると、アーンヴァルが口を開いた。

「それなら、始まりの場所に行ってみてはどうですか？」

プラネットユース、つてことか。

そういえば、プラネテユースでゆづくした記憶がないからねえ。

「やうだな、それじゃ膳は急げ、だ」

そう言つて俺は部屋の中に散らばつてゐる荷物をバッグに押し込み、アーンヴァルに渡す。

「ほい、アーンヴァル、頼む」

「神姫使いが荒いですよね、最近」

そう言ひながら、異空間にバッグを投げ入れる。

「それじゃ、行ぐぞ。こぞ、プラネテユース！」

そう言ひながら俺は部屋のドアを開けた。

開けたとたん、周りからの痛いものを見る視線に打ちひしがれる。しまつた。ホテルの中つてのすっかり忘れてたわ。

そして、リーンボックスの教会。

「それでは、俺はこれで失礼しますね」

そう言つて、出国の挨拶をする。

あ、前回の報告はちゃんとやつてるからね。

「あら、もう行つてしまわれるんですか？ 一回も私の部屋を訪れない今まで」

正直、あまり行きたくなかったんで。

だって、どうせBのポスターとかはつてあるんだからつ。

俺はその言葉を飲み込んだ。

「せういえば、次はどこ行くんですか？」

「プラネテコースに行こうと思つてます。ここつが、まだプラネテコースを見たことがないんで」

そう言いながらアーンヴァルを指差す。
ま、本当のことだしね。

「あら、やぢりま？」

あ、そういうえばベールさんとチカラさんには紹介してなかつたつけ。

「ここつはアーンヴァル。俺の相棒です」

「お初にお目にかかります。私、アーンヴァルと申します。以後お見知りおきを」

そつ言いながら、右手を胸の辺りまで持つて行き、お辞儀をした。

「…アーンヴァルさんと仰いましたかしり」

「はい、…何かご無礼がありましたでしょうか」

アーンヴァルがそつと、ベールさんは手をあわせ、いつ
言った。

「貴女、私の妹になりませんか?」

「お姉さまっ!…?」

「姿形も、立ち居振る舞いも可愛かつたものですから、つこ」

「は、はあ」

俺とアーンヴァルは若干引いていた。

「それにしても、アーンヴァルさんとビリーが一緒に戦つたような記憶があるんですけど、気のせいでしょうか」

ベールさん、それは別のゲ・ムです。

さて、と。それじゃ行くか。

「アーンヴァル、ラファールを呼んでくれ

「何でですか?マスター。ここに敵は居そつにありませんが」

アーンヴァルは怪訝そうな顔をして言った。

「いや、某所だと女神化したりバイクで国境を飛んだりしてるんだ。ちょっと対抗したくてな」

「そんなところで対抗意識燃やさないでください。まあ、わかりました」

「それじゃ、行きましょうか」

「それじゃ、行きましょうか」

「待て。お前が融合しなくてもラフアールは飛べるのか？」

「もちろん飛べますよ。戦闘速度となれば話は別ですが

… そうだったんだ。
知らなかつた。

そして、俺とアーンヴァルはラフアールの上に乗り、プラネテューヌを手指した。
… ちょっとだけ、グランニユーレの気分が味わえた。

side ネプギア

「えいっ、やーっ、…たあーーーー！」

私は今、アイエフさんに稽古をつけてもらひてこる。
ケイスさんに借りた剣をもつと上手に使えるようになるため。

「ほら、ネプギア。足の辺りががら空きよ？」

アイエフさんはそう言つて私の足のまづに攻撃を放つてくる。

辛うじて直撃は免れたけど、やっぱりカスつてしまつた。

「ぐうっ」

「ネプギア、そろそろ集中力が限界なんじゃない？一息入れようか？」

「あと、ちょっとだけお願ひしますーはあああー！」

そう言ひて。私は氣合を入れなおす。

アイエフさんもそれに合わせて身構えてくれた。多分、私が必殺技を出そうとしてるのが分かったんだろ？

「行きますっ！フォーリーアーリッジッ！」

高速の斬撃がアイエフさんを襲う。けど、アイエフさんは涼しい顔でそれを受け流してしまっている。まだ、敵わないなあ。

side ネプギア END

ようやく、プラネットユース上空に到着。

懐かしいなあ、と思いながら下を見てみた。そこでは、ネプギアとアイエフが剣を切り結んでいた。

「アーンヴァル、下に降りてくれ。知った顔に挨拶に行くぞ

「了解です、マスター」

その後、ラファールは段々と高度を落としていくのだった。

side ネプギア

流石に疲れました。

必殺技って、こんなに体力を使うものなんですね。

「どう、ネプギア。一回休憩入れようか

「そう、ですね。…あれ?」

何か、上から降りてくる。

白い機体が私たちのほうに向かって降りて来ようとしていた。

「何?あれ

アイエフさんがそう聞いてくるけど、私にもアレが何だか分からない。

「何、でしようか

そして、その機体に乗っている人が機体からジャンプし、私たちがいる場所に着地した。

「よ、ネプギアにアイエフ、久しぶり!」

そこには、懐かしくすごく会いたい人の顔があつた。

side ネプギア END

「ケイスさん!」

ネプギアがそう言って俺のほうに飛びついてきた。

「ネプギア、久しぶりだな。元気してたか？」

そう言って、左手をネプギアの背中に回し、右手で頭を撫ではじめた。

「…私は席をはずしたほうがいいかしら」

「いやいや、いいでござりださ」よ、アイちゃん

「アンタにアイちゃんって呼ばれる筋合いはないわー」

「カルシウム、ちゃんと取つてるか？アイちゃん

「だつれのせいだと思つてゐるのみ、まったく」

うん、2人とも変わつてないなあ。

で、名残惜しいがネプギアを放して、と。

「おい、アーンヴァル。ラファールをしまつてお前もこっちに来いよ」

俺がそう言つと、「了解です、マスター」と答え、ラファールを異空間にしまつた。

で、アーンヴァルが落ちてくる、と。

「ちやんと受け止めてくださいよ、マスター」

「はいよ」

セーブして、アーンヴァルをキャッチした。

...SAVE

第22話 振り出して戻る? (後書き)

お前、前回で懲りずにまたやつこつこつこするのか。

ケイス「いや、今回はしようがないだろ。頭を撫でようとしたら勝手に左手も動いただけだ」

その所為で、ネプギアはあんなてるが…。

ネプギア「（時折何かを思い出したかのように）ヤーヤーしてくる（

まあ多分、正ヒロインの座ゲット、とか思つてるんだりひつなあ。

ネプギア「（ビクッ）」

とこうことで、回想回+ローンボックス終了+フラグ建設をお送りしました。

ケイス「今回まとめたねえ。とこうか、これはフリゲejやなこだろ、参考」

ネプギア「（何か悲しそうに）」

ああ、もう一々つむれこなあ。

次回、君をヒロインで書いてあげるから、あつた行つてなれ。

ネプギア「（やつたあ）」

ふう、やっとネプギアがあっちに行つたか。

ケイス「いいのか、あんないと言ひやつて」

いいのいいの。元々書く予定だつたし。

とこ'うことで。

それでは次回、「ネプギアの成長」でまたお会いしましょう

あ、それとお知らせ。

ルートについてですが、多数決の結果、女神に同行することとなりました。

オリジナルに投票してくれた方々、申し訳ないです。

せつかくなんで、オリジナルの方のシナリオをちょっとだけ紹介。行き先はファルコムが落ちてきたあの空に浮かぶ島、イクスを舞台にするつもりでした。

ここで、アーンヴァルが使用不能となつてしまつたため、ケイスの新武装が手に入る予定だつたりしました。実は、この島に行こうが行くまいが関わらせる予定だつたので、これ以上のネタバレは控えておきます。

それではー。

第23話 ネプギアの成長（前書き）

ケイスは再びプラネットユースを訪れていた。

ネプギア「最愛の妹、ネプギアに会つために」

ケイス「最愛の妹つて何！？」

ネプギア「ええー、違うんですか？」

…いいからお前ら黙つてろ。

と、とにかく。

プラネットユースでのまつたつとした休息の話です。

第23話 ネプギアの成長

「ともかく。久しぶりね、ケイス。他国での活躍は聞いてるわよ」
アイエフがそう言つてくる。

まあ、諜報部勤務だから、色々な話が聞こえてくるんだろ？

「あはは、そんなことないですよ。アイエフさんもお元気そうで」
まあ、キラーマシンを倒したりしてたし、その辺は知ってるんだろうな。

「まあ、ね。それなりにやらせてもらつてるわ」

同じ諜報部員にも、あのケイスと戦った人、と書かれて一目置かれるようになつたとか。
たはは。

「イストワール様が『あのとき、強引にでも引き止めて国に引き入れるべきでした』って言つてつるわかったのよ」

…まあ、いーすんせんだつたらナリハリともあるんだろ？なあ。

「光榮ですね、そう言つてもらえたと」
いやあ、あまり褒められなれてないから、恥ずかしいねえ。

「むう〜〜〜〜」

アイエフさんとばかり話していたら、その横でネプギアが頬を膨ら

ませていた。

心なしか、睨まれている様な氣もするが、…氣のせいだろ。

「ネプギアも、元氣だつたか？」

俺がネプギアのほうを向いてそう話しかけると、ネプギアはぱあつと笑顔になり、「はいっ！」と答えてくれた。

「それはそうと、報告があるのよ。ね、ネプギア」

「は、はいっ」

報告？何があつたんだろ。

「じ、実は…女神化、できるよつになつたんです…」

へえ、女神化できるよつになつたんだ。

「まだお姉ちゃんみたいに汎用のプロセッサコニッシュトは使えませんけどね…」

そう言つて、えへへつと恥ずかしそうに微笑んでいた。

「すうじないじやないか、ネプギア。他の国の候補生は、まだ女神化な
んできなかつたぞ？」

そつぱつと、ネプギアはちよつとだけむつとしたよつこ

「他の国の候補生じやなくて、今は私の話ですっ！」
と強い口調で返した。

side ネプギア

「う、やつやつた。

こんなこと言つたりなかつたのに。

なんか、他の子のことを見られるとい、胸がモヤモヤして。
私つて、ダメな子だな。

「いめんな、他の国の子じゃなくて、今はネプギアの話だつたよな

ケイスさんがそう言つて謝つてきた。

ううん、悪いのはケイスさんじゃなくて私。

「いえ、私もちょっと強く言つて過ぎやつたみたいですね。いめんな
やつ」

そう言つて、私は頭を下げた。

side ネプギア END

「それで、ですね。ケイスさんに、私の女神化した姿を見てもう一
たいんです。いいですか？」

それは願つてもない。

俺はもうひるん、2つ返事でOKした。

「それじゃ、こまめす。はあああああつー。」

ネプギアが気合を入れ、右手を上に掲げる。

そうすると、ネプギアから薄紫色の光が発され、それが光の柱を作る。

そして、その光の柱が粒子となる中、女神化したネプギアがその姿を現す。

「プロセッサゴーリット、装着完了！女神ネプギア、ここに参上です！」

「うおおおおっ。

生で女神化が見られるなんて。
生きててよかつたあ。

「どうですか、ケイスさん」

ネプギアが少し恥ずかしそうに、そう聞いてくる。
まあ、出てくる言葉は一つしかないよね。

「…綺麗だ」

今まで他の女神の女神化を見てきたけど（ゲーマー除く）、みんな綺麗だつたしね。

それにも、無反応？

そう思つてネプギアのほうを見てみたんだが。

「（ぼそぼそ）」

何かボソボソと言ひながら、左右の人差し指同士をツンツンしていた。
なんぞこれ。

「なあ、ネプギア、武器はどうなつてるんだ？」

「え？ あ、は、はい。何ですか？」

聞いてなかつたのかよ。

お兄さん懸しよ。

「いや、武器はどうなつてるのか、って聞いたんだよ」

「えーと武器は…」

と言つて、持つてゐる剣を俺のほうに見せる。
あれ、さつきは木刀を持つてゐたみたいだつたけど、やつぱり変身
後は一緒に変わるものだな。

「今は、この剣ですね。元が木刀だから使いやすいんですよ」

剣だけ？

確か原作だとその剣が銃にもなつてたはずだが。

「その剣、銃とかに変形しないのか？」

「剣が銃に変形する訳ないじゃないですか」

そう言いながら、こわこわと笑う。
だったら、それを覆してやるわ。

「やついえば、俺が預けたバルムンクはどう？」

「えっと、変身すると剣の形が変わっちゃうじゃないですか。だから元に戻らなかつたら嫌だなと思って、教会に置いてあるんですよ」

そうか。

まあ、アレで稽古をしているかと思つたけど、そういう理由で持つていなかつたのか。

それじゃ、ここに呼び寄せるか。

「それじゃ、ちよつと待つてろよ、ネブギア」

俺は一言やう声を掛けると、呪文を紡ぎだす。

「時間軸固定、空間歪曲、顯現」

俺がそう唱えると、俺の前にバルムンクが現れた。それを、一度掴み、さらに唱える。

「物体変質、重火器追加、変性」

そして、バルムンクが光り始め、その光がパンッと弾ける。あとは、と。

「時間軸解放」

「こんなもんだろ。」

「あ、アンタ魔法使えたの？」

「あれ、言つてなかつたつけ。まあ、普通の魔法とは使い方も性質

も違つけどな

そう言いながら、バルムンクを軽く振つてみたりする。うん、重さは変わってない。

で、多分これをネプギアに渡すと…変性するはずだ。

「ネプギア、これ持つてみな

そう言つて、バルムンクをネプギアに渡す。

その瞬間、バルムンクが機械的な白い幅広の剣に姿を変える。

「機械剣だ。マシンブレードけど、これだけじゃないんだぜ、これは

そう言つて、ある言葉をネプギアに教えた。

「言つてみな、キーワード」

「はいっ。ランチャーモード起動します

『了解、ランチャーモード起動します』

そう機械音声が答え剣が変形を始め、ランチャーに変形を完了する。

「え、ええええつー!?

うん、予想通りの反応をありがと!。

「それは俺からの贈り物だよ。よくがんばったね、ネプギア

「ありがと!」ゼロこます、ケイスわん

その後、ネプギアが女神化を解除するとともにバルムンクは元に戻つて。

残念そうにバルムンクを見ているネプギアがそこにいた。

「ケイスさん、いつもあの変形とかつてできなんですか？」

「まあ、そう造つてないからねえ」

何かかわいそだなあと思い、この言葉を言ったのが間違いだつた。

「設計図なら書くけど、…要る？」

「要ります！」

メカフューチの女神、ネプギアが誕生した瞬間だつた。

..... S A V E

第23話 ネプギアの成長（後書き）

はい、と書つて無事（？）ネプギアが女神化した話でした。

ケース「何か、原作と微妙にあつてるよつた違つてるよつた」

こまけえことは（…）

とはいえ、オリジナルの武器を渡したのは間違いかな。

ケース「まあ、普通の剣で銃撃できる原作のほうがアレかとも思つ
けど…」

と書つては、全へのほほんとしていなに束の間の平和回でした。

ケース「つてことは、次回から…」

んむ。

次回から、キャプションが移ります。

題して、「第一章 第一次マジックンヌ大戦」

ケース「やつと原作に追いつくのか」

追いつくつて書つか、原作では序章扱いだからね、（…）。

ケース「とはいえ、（…）からマジックンヌとの戦闘が始まるんだな」

とこうことで。

それでは次回、「終わる平和な日々」でまたお会いしましょ。

第24話 終わる平和な日々（前書き）

ケイスが再びプラネットユースを訪れてから数日後、異変は起こった。世界に、何が起こったというのだろうか。

第24話 終わる平和な日々

side マジコンヌ

「……やつと、実体化できたか

ギョウカイ墓場の一角で私はそうひとりしゃべる。

私は、ただただマジコンヌ様復活を命ぜられたマジコンヌ様によつて作られた存在。

マジコンヌ様は識別子として『マジック』といつた頃を下さつた。

私の名は『マジック・ザ・ハード』。

世界を闇に落とす稀代の魔術師、といったところか。

「さて、祝砲としてこの世界にモンスターを送り込んでやろうか

。そう言い私は、すべての国にモンスターを送り込み、活性化させた。この世界の人間が奏でる悲鳴を、マジコンヌ様の栄養^{チカラ}とするために。

side マジコンヌ END

プラネテュースでほのぼのと過ごしていたある日の昼時。

俺、ネプテュース、ネプギア、いーすんは教会で昼食を摂っていた。あ、とりあえず今日の昼食は俺特製のナポリタンね。つて、この世界にナポリタンとかあつたつくなあ。

その最中、一人の兵士が教会の戸を開け、こう言い放った。

「イストワール様、大変です！街の周りがモンスターで埋め尽くされています」

普段であれば、『食事時です、後で聞きます』といつもすんもさすがにそんな態度は取れなかつたようで。

「分かりました。30分ほど待つてください、今は食事時です

と言つて、あれ？いつも通り？

ここ、突つ込んでいいところ力ナ一。

うん、突つ込もう。

「いーすん、そこは3分じゃないの？」

つて、ネプテューヌ。

お前、人の突つ込みどころを取るな。
しかも、突つ込むところが違うし。

「お姉ちゃん、そうじゃないよ

おお、ネプギア。君は唯一マトモだつたか

「そういうのは、食事をしながら聞けばいいんですよ。ね、ケイス
さん」

…期待した俺がバカだつたよ。

うん、そうだつたよね、君達は。

「あの、それじゃ説明させてもうつてもいいですか？」

君も、律儀に待ってるんじゃない。

早く説明して自分の持ち場に戻らないと大変なことになるでしょ？

「プラネテュース、ハネダシティの近隣でモンスターが大量に発生しています。現在、各街の防衛団が対処していますが、街中に被害が及ぶのは時間の問題かと」

「なんでそれを早く言わないんですか！」

「一すんさん…。アンタがそれを言つか。

まあいい。ここは素早く行動を起こさないといけないだろ。

「ネプテュース、ネプギア。ひとつと行くぞ」

俺はそう言つて席を立ち、扉のほうへ向かつた。
そして後ろを振り返つてみると。

「ちよつとまって、これ、食べてからね

「ネプテュース、食べるか喋るかどっちかにしろ！」

「……」

「食べるんかい！」

と、ネプギアは…。

「難しい問題ですね。ケイスさんが作った料理とケイスさんと一緒に行動。どちらも捨てがたいです」

…って、何を悩んでいるんだ。〇〇〇

「二人とも、そんなもんいつでも作ってやるから、早く行くぞ！」

「うん！約束だからね？」「はいっ！」

…」の回答に一抹の不安を感じるんだが、気のせいかな？
まあいい。

そう思い、モンスター討伐に向かう俺達だった。

side ミナ

何か、外が騒がしいですね。

そう思い、私は教会の外に出てみたのですが。
そこには、街の方々が集まって固まっていました。

「どうしたんですか？」

何が起こったのか分からず、私は皆さんに問い合わせました。
そして、返ってきた言葉に畠然としました。

何せ、街の外にモンスターが大量発生していると聞いたのですから。

今は、グリさんが街の外についてモンスターを追つ払っているとか。
だから、畠さんは町の中でじっとしていたんですね。

私は急いで教会の中に引き返し、プラン様の部屋を訪れました。
コンコン。

「プラン様、一大事です。ちょっと入りますよ

そつぱつて部屋の中に入つていつたのですが、部屋の中は丸められた紙でいっぱいになつていました。

「ひつじもせいいのよ。新刊を落としそうなんだから」

「そんな場合じゅないです！街がモンスターに襲われているんんです！」

「なん……だと」

ブラン様はそつぱつとその場で女神化されました。

「アタシの国でそんなことするなんて。命が惜しくないみてえだな
ブラン様は窓ガラスを突き破り、そのまま街の外へ向かつたようでした。

外からは、『おお、ホワイトハート様が出られたぞ』といつ明るい
声が聞こえきました。

ブラン様、せめて窓を開けて出て行つてください。
修理代もバカにならないんですよ（泣）。

side //ナ END

side ノワール

ある日、私はケイに黙つて街を出て、リビートリゾートに來ていた。
何だかモヤモヤして、何もせずにいられなかつたのよ。

「ふう、何でいつもアイツのことを思い出しかやうかなあ」

まあ、アイツってのは、前に女神以外で私に勝つた事のある奴のことなんだけど。

あれからアイツ、顔を見せないのよねえ。

元氣でやつてるかしら。

そんなことを思いつつ、ふと周りを見回した。

なんとなく、周りに視線を感じたからだ。
さつきここに来たときに、全部のモンスターは狩つといたんだけどね。

が、見なれば良かつたと後悔した。

なぜなら、私が今いるフロアにモンスターが溢れていたから。

「もう…なんだってのよ…」

そう言つて、私は女神化し、そのフロアのモンスターを殲滅した。
けど、何か嫌な予感が止まらない。

「ユニー、ケイ、無事でいて！」

私はそのまま空を飛んでラステイションへ向かうこととした。

side ノワール END

side ケイブ
何だらう、この感じ。

何か、空気がチリチリするといつも、なんと言つが。
私はそんな違和感を感じつつ、見回りをしていた。

今私は、リーンボックス特命課の職員。
日夜この国を守るために働いている。

「ケイブセーん」

そんなに離れていない場所からそんな声が聞こえてくる。
この声、これは、十中八九5pb.ね。

「あら、5pb.どうしたの」

「いえ、ケイブさんの姿を見つけたから声を掛けたんです。…ダメ
でしたか？」

彼女はシコンとした感じの声でそう言った。

…何か、私悪い事したかしら。

そう思つたときだった。

『グオオオオアアアアツ』

「きやつ！？」「…何？」

あれは、ドラゴン？

しかも、いつもよりも凶暴な奴みたいね。

それに、それだけじゃない。

モンスターに囮まれてる？

「…5pb.走れる？」

「……はい、もちろん」

上出来、ね。

彼女もおそらくモンスターに囮まれていてることに気がついた。

「教会まで走るわよ、ついて来れる?」

「//ゴージシャンの体力、伊達じゃないことを見せてあげます」

私たちはそう言って笑い合い、教会を田指して走り出した。この事をチカ、ひいては女神様に伝えるために。

side ケイブ END

side マジュコンヌ

ほつ、どの国も優秀な人材がそろっているようだな。初動が早く、対処も早くに終わっている。

ということは、力押しでは無理がある、か。

それに、人間を殺してしまっては意味がないから、な。

神が復活しようと、信仰する者がいなくては話にならないからな。

「だが」

そう言い、私はある国の映像に目を向ける。

「この男、何者だ? それに、コイツが装着しているモノ、どこかで見た記憶がある」

記憶を探つてみるが、何も思いつかない。

『まあ、いいや。いうなれば、あとは女神どもをおびき寄せ、殲滅

するだけだ』

『う言い、私はマイシと騒つた。

Side マジコンヌ END

はあ、疲れたぜ。

夕方になつてやつとかたがついた。

全く5～6時間も連続で戦うなんてはじめてだぜ。

そんなどきだつた。

夕焼けの色だつた空は次第に曇り始め、薄暗くなつてしまつた。

そして、何かぐもつた感じの声が聞こえてきた。

『我等はマジコンヌ。犯罪神マジコンヌを崇拜する教団なり』
『人間よ、女神などといつ矮小なる者ではなく、犯罪神マジコンヌを崇拜せよ』

『我等の神、マジコンヌ様を崇拜するのであれば、それなりの見返りを』『えよつべ』

その言葉の後、空から何かが落ちてきた。

『これは…マジコン、か？

』とつあえず、今は挨拶代わりにこくつか贈り物をしておいてやつ

た

『それから、我等に反旗を翻す者よ、我等はギョウカイ墓場にて待つ』

『我等は逃げも隠れもする必要がないからな』

言葉が終わつたあと、空は先ほどと回じ色々に戻つた。
だが、俺の周囲にはマジコンと想しきものが落ちていた。
…これが、ほんとう真実なんだ。

プラネットユーヌに帰ると、街の中はすこし騒ぎだった。
特に子供達が。

「これ、すげーぞ。俺、このゲーム欲しかったんだよな」「うんうん。これで、この子のゲーム代にまわしていたお金を他に使えるわ」

「おおー、隠れキャラがこんなに簡単に出来るなんて。すげーんだな、マジコンヌって」

みんな、さつき落ちてきたマジコンを拾つたようだつた。
拾えなかつた人たちは、それを羨ましげに眺めていた。

「…マジコンヌを崇拜すれば、マジコン、もうひかるのよね」

「そんな思考、しちゃダメだー！」

俺はそう訴えるが、誰もそんな言葉に耳を貸してはくれない。
やつぱり、人間つて欲望には弱いんだな。
そつ思いつつ、教会へ帰ることにした。

.....
S
A
V
E

第24話 終わる平和な日々（後書き）

とつとつ、マジノコンヌが動き始めましたよ。

ケイス「とにかく、戦闘の描[画]が皆無なんだが

苦手なんだよ。

ケイス「じゃあ、何でこの作品を書いてるんだよ」

ま、いいじゃん、そんなことね。

とこうことで。

それでは次回、「4女神、集結」でまたお会いしましょう。

第25話 4女神、集結（前書き）

ケイスはマジHコンヌが送り込んだモンスターを打ち倒し、教会へ戻っていた。

そこで待っていたのは…。

11／13 ちょっと文章いじりました。ヘタレさん、サンクスです。

「ただいまー」

俺はそう言いながら、教会のドアを開け中に入った。
だが…そこには、誰もいなかつた。

いつもだったら、街のおばちゃんたちといーすんが世間話をしていたのにな。

やっぱり、状況は変わっちゃったのか。

そんな時、教会のドアが『ギイツ』と音を立てて開かれた。

「いーすんせーん、ただいまー」

「いーすーん、おなか減つたー」

教会でボーッとしている間に、ネプテューヌ姉妹が帰ってきたようだ。

「お疲れ、二人とも」

「あ、ケイスー。ケイスもお疲れー」

「あ、たすがに疲れましたー」

ネプテューヌはほほいつもどりおつ、ネプギアは…相当疲れてるみたいだな。

ネプテューヌに肩を貸してもらつて、歩くのも億劫な感じだつた。

「やついえば、いーすんがどこにいるか知つてる?」

いつもこの時間だつたら教会にいるはずなんだけどな、と続ける。
ま、多分だが自分の部屋にでもいるんだる。

「…私が何か?」

「どわあああつー。」

扉のほうを向いていたから、いーすんさんが後ろから近づいてきて
いるのに気づかなかつたよ。

「失礼な。淑女レディに向かつてそんな声を発するなんて」

いーすんさんは、いつも通りふふふと浮いていた。
まあ、顔はげんなりとしていたが。

「とつあえず、今の状況を伝えておきますね」

そつ言つて、いーすんさんは真面目な顔をして切り出した。
要約すると、こんなことらしこ。

- ・ プラネテュースだけでなく、ラステイション、ルウェイー、リーン
ボックスもモンスターに襲撃されたこと。
- ・ 4国とも、モンスターの襲撃を避け、今は一時的に平和になつて
いること。
- ・ 小型機械（まあ、おやじハマジハコンのことだらつ）が空から降
つてきたこと。
- ・ その機械のおかげで暴動が起つてこいる地域が存在してこる。
- ・ 4国のシェアが減少し始めていること。

「つてゆーことは、ゲームギョウ界全土でプラネテュースと同じ状

況が起きてるって事?」——すん

「やつ思つて間違いないかと」

「で、それらを打破するには、奴らの招待を受ける必要がある、つて事ですか」

「そうですね、おやうそれしかないでしう」

だけど、未知数の敵相手には、方策が立てにくいくとか。

「だったら簡単だよー。わたしがひとつ飛びギョウカイ墓場にいつて、誰かを倒してくれればいいんでしょ?」

おい、ネプテューヌ。短慮にも程があるぞ。

「お姉ちゃん、誰を倒せばいいか分かってるの?」

「そんなの…全部倒せばいいんだよつー」

ガクッ。

そうじやないだろ、ネプテューヌ。

「つたぐ。戦力が分かつてないのにどうやって戦うんだよ。ブランさんとかベルさんが100人ずついても、勝てるのか?」

「…そこは『氣合』で」

「氣合だけじゃ、どうじよつもないだろ」

まあ、実際はマジック・ザ・ハード一人なんだろうけどな。

原作どおりであれば。

しかも、4女神でかかつても勝てない相手だぞ。

「そこで、提案があるんです。ネプテューヌさん、聞いてもらえますか？」

そう言って、いーすんさんがネプテューヌに耳打ちを始めた。

「い、いーすん。なんかこそばゆいよお

あ、終わつたみたいだ。

「ということですが、いかがです？ネプテューヌさん

「他の女神に協力、か。…うん…いいんじゃないかなっ！」

「それじゃ、通信室に急ぎましようか」

そう言って、俺達はその通信室とやらに来たんだが。

「とりあえず、教祖と女神だけで話をします。だから、ケイスさんとネプギアさんはここで待っていてくださいね

「そう言うと俺達一人を残し、いーすんさんとネプテューヌは通信室へ入つていった。

「いらっしゃ、プラネットコースのイストワールです。皆さん、聞こえていたら返事をお願ひします。それから、できれば女神様も同席願います」

私は通信機のスイッチをオンにしてそう問い合わせた。
しばらくしてから、それぞのスピーカーから返事が返ってきました。

「いらっしゃ、ラステイションのケイだ。珍しいね、イストワール自ら連絡してくれるとは」

「リーンボックスのチカよ。ほんと、珍しいわね」

「すいません、ルワーのミナです。今組み上げてる最中なので、ちょっとだけ待ってください」

ルワーの映像だけ『SOUND ONLY』と表示されています。
あそこだけ、組み立て式ですからね。

「すいません、終わりました」

ミナさんのその声を皮切りに、話を始めました。

「さて、要件は分かっておいでとは思いますが

「まあ、そうだね。あんな状況の後では、それくらいしかないだろ
う」

流石はケイさん。

もうすでに情報を集めている、といったところですか。

「一応、イストワール様が何を言おうとしているかは分かっているつもりですが」

「まあ、世界の危機、と聞いて黙つているわけには行きませんからね」

ミナさん、チカさんのお二方も大体分かっているようですね。

「わかりました。それでは、単刀直入にお伺いします。女神様方の力をお貸しいただけますか?」

私はそう言いながら、頭を垂れる。

「そうだね、見返りはどうなつて……」

「……」

「いや、バカケイ!……私で良ければ、いくらでも貸すわよ」

ラステイションはOKですか。

「ルゥイーも異論はありません」

「ですが、女神様不在時の戦力は?」

「それについては」「安心を。女神様には劣りますが、有能な方が居りますので、心配は」「無用です」

「そうですか、ありがとうございます」

ルゥイーもOKのようですね。

「リーンボックスも、問題なしよ」

「あー、一番抵抗するかと思っていたのですが」

「それについては大丈夫ですわ。そのために、あとでお姉さまの写真を撮りためておきますから」

「は、はあ。やうですか」

「リーンボックスも〇〇…のようですね。」

「やういえば、プラネットコースは大丈夫なのかい？」

「他の国は出す、と明言ましたが、私は出すとは明言しませんからね。」

「はい、プラネットコースはネプテコースちゃんとネプギアさんをお出しよひとしています」

「ほう」「ええ?」「ふーん」

まあ、他の国は出るのは女神だけのようですからね。候補生は出せないでしょ?からね。

「それでは、集合はいつにしましょうか」

「正直、早いほうがいいとボクは思つてこる。明日でいいだい?」

ケイさんがそう発言する。

「これは願つてもない発言ですね。」

「問題ないと思います」「わかったわ、今夜中に何とかするよつ、努力するわ」

「ほんちも問題ありません。それでは、明日の暁くらいにブリネテユースの教会でお会いしましょう」

「わかった」「はい」「ええ」

「これで、準備は整いましたね。」

side イストワール END

時間は少し戻つて、イストワールとネプテユースが通信室へ入つて行つた後。

「どんな風になるんでしょう、ケイスさん」

「多分、どこかの女神様もみんなのことを考えてゐし、賛同してくれるんじやないかな」

多分ね。

一番の心配はリーンボックスだけビ。チカさん、お姉さま離れがちゃんとできるか心配だ。

「そういえば、ケイスさんは4国全部の女神に会つたんですね?」

「そうだね。みんない人だつたよ」

みんなシスコンだけだね。
つて、ここもそうか。

「…皆さん、美人でした？」

「うーん、どうなんだろう。美人って言つより、かわいいくつて方が
近いかな。でも、みんな綺麗だったよ」

…

そう言つたあと、ネプギアから黒いオーラが出る幻覚を見たんだが
…。
幻覚…だよね？

その次の日。

運命の日がやつてきた。

まず現れたのは、ルヴィーからの4人だった。

…4人？

「へえ、ここがプラネテュースの教会なんだ。結構いいところじ
やない」

「…」

「ロム様、ラム様。いい子にしてるつて約束、忘れてないですよね
？」

「もっちらん！」「うん、約束…した」

ああ、あの2人がついてきたのか。

「お久しぶりです。ブランちゃん、ミナさん」

「…ケイス?」「ケイスさん、ビラントン君?」

「いや、今ここに厄介になつてゐるんですよ」

「うん、家族四人、水入らずつて感じか。あれ、そういうへん」

「グリさんはお元氣ですか?」

「まあ、とりあえず。流石に昨日の襲撃が思いのほか厳しかったみたいで、今日は寝入つてますけど」

グリさん、がんばつたんだねえ。もう信用されてるんだ。

くいっ、くいっ。

大体分かつてゐるけど、ね。

「「めぐ」めぐ、ロムちゃんにラムちゃん。無視してたわけじゃないんだよ」

「ジーだか」「…」

この二人は…どうしよ。とつあえず、ネプギアに預けるか。

「ネプギア、ちょっと来てもらひやるか?」

俺は少し大きめの声でネプギアを呼んだ。

「ケイスさん、何ですか？」

「すまん、この二人の相手をお願いできるか？ 確か、冷蔵庫にジュー
ースがあつただろ？」

「は、はい。それじゃ二人とも、いらっしゃい！」

ネプギアは何かギクシャクしながら口ムラムラを連れて行った。

「あ、そうだ。イストワールさんがあつちで待つてます。早く行
たほうがいいのでは？」

「せうですね、せうですね」ということです」「…じゃ

side ラム

客間に通された、まではこいんだけど。

「……」
「……」

さつきから、ネプギアと呼ばれた子とロームちゃんがずっと睨みあつ
たままだつたり。

「…」の、泥棒猫

ロームちゃん！？

誰か助けて…。

ケイス、本当に恨むわよ。

side ラム END

次に到着したのが、リーンボックスの二人だった。

「ケイスさん、久しぶりですわね」

「お久しぶりです、ケイスさん」

つて、何で二人とも目の人下に隈があるんだよ。

「疲れてるみたいですね…」

「ええ、ちょっとの間ゲームできませんから、一晩中ゲームを」

…アンタって人は（笑）

「私は、昨日撮つたお姉さまの写真を現像していたら…もう陽が上つてました」

…アンタもか。

「ま、まあ、何も言わないでおきます。イストワール様が奥で待つてますから、そちらへ」

そう言つと、二人は歩き始めた。

…ヨロヨロ、と。

あとは、1国だけだな。
そう思つたときだつた。

「ケ、ケイスー!？」

不意にそんな声が聞こえた。

「ノワちゃん?」

その声は、どう聞いてもノワちゃんのものだつた。

「元気だつた?」

「ああ、うん。俺はね。ノワちゃんは?」

「…うん、私も

それだけ言葉を交わすと、お互に無言になつてしまつた。

ノワちゃんの顔は真つ赤だけ、俺の顔も負けずに真つ赤なんだろうな。

「はあ。ボクは先に行かせてもらひよ。じゃあへつ

ケイはそう言つと、先に教会に入つていつてしまつた。
逃げたな、奴め。

「じゃ、じゃあ、入るつか

な、なんか変な空氣だな。

卷之三

一 お嬢様、お手をどうぞ

はい / / / 「

うわ、何コレ。

俺達は顔をさらに真っ赤にして、教会に入つていつた。

「わ、本田圭佑集めの頂、ありがとうございます」と、圭佑さんからの言葉から、集会が始まった。

「早速ですが、皆わんすでに今の状況は把握してこないと想つてよい
しいでしょうか」

いーすんさんのその言葉に、その場にいる全員が首を縦に振り、肯定の意を表す。

無論俺も。

「ですので、今考えひる最強のパーテイーで」に埋めたいと考えています」

そつ書きで、いーすんせんせ手元の紙に墨を落とす。

「私が考へてゐるのは、4女神様および、ネプギアさん、ケイスさんの6人ですが。異議がある方は？」

いーすんさんのその発言に、ケイが反応し、手を挙げた。

「ひとつ、確認させてくれないか？なぜ、ケイスがそのメンバーに入っているんだい？」

「ケイさん、私は先ほど、『今考へつる最強のパーティー』と言いましたよね」

「ああ、そうだったね。それが何か？」

「であれば、女神に勝利したことのある方を入れるのは当然としますが、いかがですか？」

「ツ

うわ、いーすんさん、えげつなつ。

「他には……なにようですね。それでは、ネプテューヌさん、ノワールさん、ブランさん、ベールさん、ネプギアさん、ケイスさん」

「…………はい」

「辛い戦いになるかもしだせませんが、よろしくお願ひしますね」

「うんー。」

「ええ、もちろん」

「……できる限り」

「 もりのとですわ

「 はこつー。」

「 ああ」

全員、それぞれの言葉で答えた。
だけど、心は一緒にはずだ。

打倒、マジHコソヌ！

そして、俺達6人はそのまま転移室へと向かった。

side ロム

わざわざあわここの部屋でネプギアちゃんと色々お話をした。
オレンジジュースや色んなお菓子を出してくれた。
ネプギアちゃんは、私の敵だけど…そこまで嫌いじゃなくなつた。
そうしたら今度はリムちゃんがむつとしてきて。
変なの。

「 …ね、リマちゃん」

「 何です、ロム様」

ミナちゃんがそう優しい声で答えてくれた。

「 ケイスさんとお姉ちゃんとネプギアちゃん、無事に帰つてくれるよ
ね？」

「 セウですね。せつと、すぐ帰つてきまよよ

「 うんー。」

私はその言葉を信じて疑わなかつた。

s.i.d.e 口ム END

s.i.d.e イストワール

「それでは、今から眞さんをギョウカイ墓場へ転移します」

「後は、このスイッチを押すだけなのですが。
なのに、やけに憚られます。
そんなとき。

『おつけー、いーすん。いつでもいいよー』

そう、ネプテューヌさんの声が聞こえました。
いつもながら、間延びしている声。

この人は、こんな状況でも不安を一切感じないのでしょうか。

「眞さん、くれぐれも気をつけてくださいね」

そう言いながら、コンソールのスイッチを押す。

その後、部屋の中を映すモニタが紫色に染まっていく。
そして、色が正常に戻ったとき、そこには誰も残っていなかつた。
おそらく、転送が成功したのだろう。

「無事、眞さんが帰つてきますよつ」

私は何かにそつとぶやいた。

...
side イストワール
SAVE
END

「うわあ、書きたいこと全部入れたら、『いんないこと』になつた。

ケイス「うわあ。いつもの1・5倍くらい？」

まあ、そんな感じ。
けど、長さ的に削つたものもいくつもあるんだ。

ケイス「たとえば？」

ノワちゃんの告白シーンとか。

ケイス「作者、何で削りやがつた！」

いや、書いていて、何回か砂糖を吐き飛ばになつたんで、その部分
全部削つた。

俺、恋愛モノ無理みたいだわ。

とことことで。

それでは次回、「激突、マジHコンヌ」でまたお会いしましょう。

第26話 激突、マジコンヌ（前書き）

ギョウカイ墓場…。

マジコンヌのザ・ハードが待っていると思われる場所。

そこにネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、ネプギア、ケイ
スの6人が足を踏み入れる。

だが、そこは想像を絶する場所だった。

第26話 激突、マジコンヌ

「ここが、ギョウカイ墓場……」

俺はそうつぶやいていた。

確かに、原作で見たことのあるような景色。打ち捨てられたゲーム機、カセット、CD……。そんなものがあたりに散乱していた。

「嫌な場所だね、やつぱり」

ネプテューヌも、いつものような霸気がない。心理的に、ここに来るのは嫌なんだろう。

「やうね。正直、長居はしたくないわ」

そう言いながら、ノワちゃんはあたりを見渡す。まあ、彼女も同じなんだろう。

「……マジコンヌを倒したら、すぐに帰る」

ブランはそう言いながら、持っていた本を開く。
……ここまで来て、読書ですか……。

「夢のような場所ね、こんな空気さえなければ

ベールはあたりを見渡しながらそう言った。

確かに彼女にとつて天国かもな。薄汚れた空気が漂つていなければ。

「……」

ネプギアは一人、放心していた。

無理もない。まだ開眼したばかりの女神ハーデだしな。

「ネプギア、大丈夫か？」

俺はちつとばかり心配になり、ネプギアに元の声をかけた。

「……は、はい。なんか、怖いところですね、ギョウカイ墓場つて」

「ま、そうだな。所謂、死者の集まる場所だからな」

「お、脅かさないでくださいよお」

ネプギアは泣きそうになりながら、そう抗議をしてきた。
脅かしてはいけじゃないんだけどな、事実だし。

「さて、それじゃそろそろ行きましょうか」

ベールのその言葉に皆が頷き、全員がばらばらに歩き始めた。
ネプテューヌが先行し、ノワちゃんなどベールはあたりを警戒し、ブランは殿を務める。

なんだ。皆、なんやかんや言つて、チームワークいいじゃん。

そんな時、先行していたネプテューヌが俺達のところに戻ってきた。

「みんなー、なんか開けてる場所があつたよー」

俺達はネプテューヌの声に従い、その場所へ急いだ。

ネプテューヌが見つけた開けた場所。

それは、原作では4女神がマジック・ザ・ハードに敗れた場所だつた。

こういう流れにだつたのか。

そんなことを思つていると、向こうから人が歩いてきていた。

といふか、この状況で歩いてくる奴なんて、一人しか考えられない。

「やつと来たか、女神共」

そう言つと、こちらを見渡す。

そして、俺のところで視線が止まつた。

「ほつ、お前が一緒だつたとはな。面白い戦いになりそうだ」

「ねー、ケイス。あの人のこと知つてるの？…もしかして、元カノ？趣味悪いなあ」

「ケイスつて、ああいうケバケバしいのが好きだつたんだ。メモしとかなくちゃ」

「…正直、どうでもいい」

「だったら、二人にしてあげようではありますか」

「…ケイスさんの、不潔」

「だーつ。お前ら、そんなわけないだろ？がよ。どう考へてもマジ

エコンヌの奴だろ、あいつ」

「どうしてこうなつた！？」

「それじゃ、みんな。気を取り直して、行くよ!」

ネプテューヌのそんな掛け声で、ネプテューヌ、ノワちゃん、ブランド、ベル、ネプギアは変身をする。

「...」変身!」

「アーヴィング、こっちも行くぞ！」
マスター！」

俺も、アーンヴァルにそう言葉をかけ、アーンヴァルもそれに答えるようにラファールの召還を行う。

「融合合体！」
「召還陣開放、
コニンギン イン ゲート
召還ラファール」
「サモン

そして、ラファールに融合^{ヨニゾン}し、待機状態となつた。アハ、俺の番か。

「疾風よわれに力を与えん！疾風合体」
ラ・ファーナンビネーション

ラファールは空中で分離し、俺はそれを纏う。ラファール・ペガサスモード、合体完了。

そして俺は地面に降り立つ。

「話には聞いていたけど、それが貴方の新しい力なのね、ケイス」

そうネプテューヌが聞いてくる。

そういえば、ノワちゃん以外は初見だつたな、この姿。

「ああ。これが俺の射撃モードだよ、ネプテューヌ」「射撃モード？貴方は…」

「ネプテューヌは何か言いたそうだつたが、それを遮り
「さて、敵さんは待つてくれないみたいですよ」

と一言だけ言つた。

まあ、マジック・ザ・ハードが襲い掛かつてきている緊急事態だつたしな。

「ケイスは下がつてて。ここは私たちが止めるわ。ベール、行ける
？」

「誰にモノを言つてるのですか？もちろん大丈夫ですわ」

ガキイイインと音がし、マジック・ザ・ハードが振るつた鎌はノワちゃんの剣で止められていた。

そして、ベールの槍が突き出されていたが、それはマジックハードの左手によつて掴まれ、止められていた。

「隙あり、うりやあああつ！」

ブランがそう叫びながら後ろから襲い掛かる。

それと同時に、ネプテューヌが正面から斬りかかる。

「はああああつ！」

そんな2人の連携攻撃に、マジック・ザ・ハードは鎌を振り回し凌いだ。

「ふん、女神とはその程度の存在か。これならば、私一人で充分だ

な

そつ言つと、不敵な笑みを浮かべた。

「言わせておけばっ！」

ブランはそつ言つながらマジック・ザ・ハードに襲い掛かった。だが、すべての攻撃は紙一重で避けられ、逆に攻撃が加えられていた。

「私たちも行くわよっ」

ネプテューヌがそつ言つと、ノワちゃんとベールもマジック・ザ・ハードに襲い掛かった。

だが結果はあまり変わらず、全員の攻撃は避けられたり背中の羽を上手く使い凌がっていた。

そして、鎌を横一文字に振られ、女神達が吹つ飛ばされていた。その後、マジック・ザ・ハードは俺のほうを向き、こう切り出した

「さて、貴様はいつ来るのだ？まさか怖氣づいたか？」

「さて、ね」

俺はそつ言つながらランチャーを構える。

そして、マジック・ザ・ハードは俺の方へ突つ込んできた。

「スラスター全開、後ろに下がる。アーンヴァル、ココレットで奴に牽制をよろしく」

『了解です、マスター』

俺はスラスターを吹かし、後ろに下がる。

それと同時にココロレットが射出され、マジック・ザ・ハードに牽制を行う。

そして俺自身は、ランチャーを奴に向け、ぶつ放す。

「行けえつ！」

ランチャーから射出されたエネルギー弾は奴に当たったが、奴にはあまり効いていないようだつた。

「お前もその程度か。ならば、死ね」

そう言つて、また突つ込んでくる

今度はさつきよりも疾い！？

俺は、マジック・ザ・ハードの攻撃をランチャーで受けた。元々攻撃を受けるように作られていなしランチャーは、ギシギシと嫌な音を立てる。

『マスター、ランチャーの耐久力が持ちません。このままでは誘爆を起こしかねません！』

アーンヴァルの言葉は聞こえているが、今はこれで手一杯だった。だが、そんな時俺の元に援軍が現れた。

「隙だらけよつ！」

ノワちゃんはそう言つて、マジック・ザ・ハードに横から斬りかかつた。

「マジック・ザ・ハードは、そのまま横に吹っ飛んでいった。

「大丈夫? ケイス

「サンキュー、ノワちゃん。助かった」

そんな俺達のところに、他の女神達も駆けつけてきた。

「さて、どうします? 形勢逆転ですわよ?」

「よオ、マジック、随分苦戦しているみてヒジャネヒカ

不意にそんな声が、マジックが飛んでいった方向とは違うところから聞こえてきた。

ちょっと待て、この口調は…。

「ジャッジ、か。覗き見とは、随分イイ趣味してるじゃないか

「へへッ。随分いいカッコだなア、マジックよオ

そう声が響いてきたかと思うと、ドオオオオオンッと上から口体が落ちてきた。

何で、ジャッジ・ザ・ハードがこの場面にいるんだ…?

「さて、俺にも戦わせるや、マジック

そう言つて、自身の得物であるハンマーを構えた。

「はアアアアアツ!」

「そう言いながら突っ込んできたかと思うと、俺達の少し前でハンマーを振りかぶり、

「ウリヤアアアアアアツ」

と俺達のところに振り下ろしてきた。

それにいち早く気づいたのはプランだつた。

「そう言いながら彼女のハンマーを下から振り上げる。だが、そんなこともものとせず、ジャッジ・ザ・ハードのハンマーは俺達の元に振り下ろされるのだつた。

「うわあああああつ」

これが、ヤバいな。
気がつくと、全員が吹き飛ばされてしまっていた。

「みんな、あのジャッジって呼ばれてる奴は、俺一人で相手する。
マジックって呼ばれる奴は、任せた」

「無理よ、ケイス。全員でアイツを先に倒しましょ？」

勇敢と無謀は違うのよ、ケイス。

危険ですね、そんなこと

ノワちゃん、プラン、ベールは俺を心配してそんな声を掛けてきた。だがただ一人、ネプテューヌだけは違った。

「何か奥の手があるのね。貴方の得意な剣を、まだ使ってないからおかしいとは思つてたのよ」

さすが、ネプテューヌ。
相変わらず勘が冴えてるな。

「「「え?」」」

あ、そうか、この3人は、俺が剣で戦つてゐるの見たことないや。

「ま、そういうこと。それじゃ行くぞ、ゴーラーンモード」

そう言つと、ラファールが一度俺の体から外れ、装備の組み換えが行われた。

より接近戦重視に、より速度重視に。

そして組み換えが終わったとき、ランチャーなどの銃器は格納され、変わりに剣が装備されていた。

さて、ここから反撃だ。

.....SAVE

第26話 激突、マジノコノメ（後書き）

戦闘シーンですが、ちゃんと書けてるかなあ。
ちと心配。

ケイス「だけど、ジャッジがここで出でくるなんて予想外だぞ」

うん、俺も予想外。

書いてたら何故かこうなつてた。

あと、戦闘中なのにネプギアが空氣。

ケイス「あ、ホントだ。戦闘に参加してねえ」

一応理由は考へていいんですが、それがこの戦闘終結までにかける
か心配だ。

といつことで。

それでは次回、「ケイスの本氣」でまたお会いしましょう。

第27話 ケイスの本氣（前書き）

原作とは違い、マジック・ザ・ハード戦でジャッジ・ザ・ハードが乱入。

全員が吹き飛ばされた後、ケイスは装備を接近戦用モードに変更し、ジャッジ・ザ・ハードに挑む。

彼は、ジャッジ・ザ・ハードに打ち勝つことはできるのか。
そして、女神達の運命は……？

第27話 ケイスの本気

「へエ、一人で俺に勝つつもりでいるのか？」

ジャッジは俺にそう言つてくる。
だが、こちにも勝機はある。

『マスター、ゴーパーントモードでの活動限界まで残り20分程度です』

アーンヴァルの言葉が俺の頭の中に響く。

そういえば、ゴーパーントモードはエネルギー消費が激しいとか言ってたな。

武装姫にそんな設定あったか？

そう思つたが、俺は「了解」と返しておく。

まあ、20分以内にこの2人を倒せば問題ないわけだ。

「何やつてやがる。来ねエなら、こっちから行くぜ」

ジャッジはそういう言い、ハンマーを振りかぶりながらこちらに突っ込んできた。

「アーンヴァル、あの攻撃にシールドは保つか？」

後ろに女神達がいるため、俺はそう確認した。
保つな、一撃くらいは受けてみてもいいかと思つたんだが。

『受けてみないと分かりませんが、多分無理です。それよりも剣で捌くほうが効果的かと』

ジャッジって、そんなに強かつたか？

それとも俺のほうが弱いのか。

まあ、考えるのは後だな。

そう思い、俺は剣を構える。

「逃げねエのは、褒めてやる。だが！」

ジャッジはそう言しながら、ハンマーを振り下ろす。

「それは、選択ミスって奴だアアアアッ！」

ガキインと金属同士がぶつかる音が響く。

ハンマーを剣で受けながら、俺は後ろに手を向けながら「ひいひい叫ぶ。

「みんな、早くアイツのまことに向かってくれ。こつちは、俺一人でどうにかする

「分かったわ、気をつけて」

「あつちは、アタシ達にまかせろ」

「分かりましたわ」

ネプテューヌ、ブラン、ベールはそう答へ、マジック・ザ・ハードの方へ向かおうとした。

だが、ノワちゃんだけは、こう言つた。

「私は残るわ。ケイスだけじゃ心配だもの。みんなは、先に言つて。すぐに追いつくから

その言葉を聞き、3女神はマジック・ザ・ハードの方へ向かつた。

まあ、苦戦するかもしれないが、一いち早く早めに終わらせればいい話か。

ノワちゃんは剣を持ち直し、無防備なジャッジ・ザ・ハードに斬りかかった。

その攻撃に、俺に振り下ろされていたハンマーが一瞬緩む。俺は剣をナナメにしハンマーを荷重移動させ、ハンマーを地面に落とさせた

「ノワちゃん。礼は言わないぞ」

「いいわよ、そんなの」

「テメエら、正義の味方が一人で戦うって言つてるのに、実は一人で戦うとかやつていいと思つてるのかよッ！？」

斬りつけられたジャッジ・ザ・ハードはそう叫んだ。
まあ、ごもつとも。
だが。

「残念だつたな。俺達は…」

「正義の味方じゃないのよ

俺達は顔を見合わせ、頷きあう。

そして、ジャッジ・ザ・ハードに向かって剣を掲げる。

「ここからが、俺達のターンだ」「ここからが、私達のターンよ

「みんな、すうじな」

私にはそんな声しか出せなかつた。

だつて、お姉ちゃんを含めた女神はマジックつて呼ばれた人と戦つてたし。

ケイスさんだつて、女神に引けを取らない。

ううん。もしかしたら、もつとすうじいかもしれない。

「私、ここで何をしてるんだろ」

ふと、そんな言葉がポロつと出てしまつた。

これが私の本心。

だつて、私はまだそんなに経験を積んでないから、みんなの足を引つ張つちやうからここにでじつとしてた。けど…。

「やつぱり、私も戦わないダメ、なんだよね」

怖いけど、それを乗り越えて初めて女神になれるのかも。

そう思い、ケイスさんのほうを見る。

今、ケイスさんと一緒に戦つてるのはノーハークさん。

私もあそこに立ちたいな…。

私は、成長するためと自分に言い聞かせ、自分の中の勇気を奮い立たせる。

恐怖に押しつぶされないよ！」

そして、少しでもみんなの役に立つ様に。

そう思い、私はお姉ちゃん達の方へ向かつた。

「『』のヤロウ。チヨコママカ動きやがって。俺の攻撃を受けやがれエツ

ジャッジ・ザ・ハーデはいつにながら、得物のハンマーを振り回していた。

俺達には当たらなかつた。まあ、一人とも速度重視だしね。

「さて、ノワちゃん。どうする?」

「まあ、ヒートアンドアウトイを繰り返すしかないんじゃないかし

「ひ

そつだよなあ、と呴きながら攻撃をかわしていく。
けど、いつも活動限界がある身だしな。

「まあ、RAでどうにかするか」

そつ言ひて、俺は剣を構える。

「やつとヤル気になりやがったか!」

残念ながら、ちょっとだけ違う。
そつは思つても声は出さないが。

「アーンヴァル、小剣プログラムロード
『了解。RA小剣、ロードしました』

それじゃ、行くか。

「覚悟しやがれ、ジャッジ！」

そう言いつつ、スラスター全開で反時計回りにジャッジ・ザ・ハードに右側から迫る。

「そんな軌道はすぐ分かるんだよー。」

ジャッジは左からの攻撃に備える。

速度が速いから反応できなことも思つたが、きつちつ反応しやがったか。

そして、ジャッジに迫る寸前に軌道を派生させまつ一度回り込み、今度は左側から迫る。

そして、左側から攻撃を加える。

流石に今回は反応できなかつたようだ。

「なんだとオツー！？」

「上手いっ

だが、致命傷を『かる』ことはできず、俺は再びノロちゃんのところへ戻つた。

「さて、次はどうするかね

「それじゃ、今度は私が行くわ

やつぱり、ジャッジ・ザ・ハードに向かっていく。

「食らはなさいー！インフィニッシュ・スラッシュ！ー。」

そつぱうと、ノワちゃんのスピードが上がり、縦横無尽に動き回りジャッジ・ザ・ハードを斬りつけていった。そして。

「これで最後よ」

そう言つて斬りつけた後、指をパチンッと鳴らした。次の瞬間、たつた今斬りつけられたかのよう、ジャッジ・ザ・ハードにダメージが入つていく。

「グオオオオオオッ。何でオレがこんな目にイ……」

まだ倒れないのか。

それじゃ、こっちも必殺技で行くか。

「アーンヴァル、先々の閃改プログラムロード『了解。RA先々の閃改、ロードしました』

俺は腰を少しだけ落とし、タイミングを計る。今だつ！

「全スラスター全開を維持、行つけ！」

今の俺が出せる最高速を出し、ジャッジ・ザ・ハードに迫る。そして、斬りつける瞬間に剣にエネルギー・フィールドを発生させる。

それもフルパワーで。

最大の攻撃力を備えた剣での剣戟と、最高速での衝撃力。それをすれ違いざまに放つた。

先々の閃を受けたあと、ジャッジ・ザ・ハードは沈黙し立ち続けた。

「…ど、どうだ？」

手ごたえはあつた。

もう一回同じ技を放つ力は残つてないぞ。

そう思つていると、ジャッジ・ザ・ハードの体がズズウンと地面に沈んだ。

どうにか、勝つたみたいだな…。

「す、じいじやない、ケイス」

「…ノツチャさんに残つてもうつて正解だつたみたいだな」

俺とノツチャさんは、パアンと掌を打ち合わせ、お互ひを激励してい

た。

だが…。

「喜び合つのは結構。だが、こちらの状況は分かつてゐるか？」

俺たちに向かつて、マジック・ザ・ハードがそう言葉をかけてきた。声が掛けられた方向を向いて俺たちは愕然とした。

そこには、ボロボロになつたネプテューヌ、ブラン、ベール、ネプギアが横たわつていた。

ユーローンモード活動限界まで、残り5分。

.....
S
A
V
E

第27話 ケイスの本氣（後書き）

何はともあれ、今回初出の技の説明から。

R A 小剣

武装神姫 B M に出てくる、汎用のレールアクション。小剣を持っているときに発動することができ、動きは本文中を参照。大体同じ動きのはずです。

R A 先々の閃

同じく武装神姫 B M に出てくる特殊レールアクション。動き的には小細工抜きで真っ向勝負、けどスピードが尋常じやないつて奴。

避けるのが大変なんですよ、原作（武装神姫）では。

ケイス「なあ、ちなみに派生ってのは何？」

ああ、通常の R A 小剣の場合は、敵を右側から攻撃するわけだが、防御とか避けをされた場合はダメージを与えられないから、確実にダメージを与えるために再度 R A を発動するイメージかな？

ケイス「ってことは、今回はその派生版を出したのか」

そゆこと。

さて、ケイスとノワールがジャッジと戦っている間に、他の女神がマジックにノされてしまいました。

まあ、4人でも苦戦していたのに、3人じゃ……ね。

ケイス「4人だろ？ネプテューヌ、プラン、ベール、ネプギアの」

ああ、ネプギアは数に入つてないよ。

ガツチガチに固まつて、本来の動きができるない的な意味で。

といふことで。

それでは次回、「誤算」でまたお会いしましょう。

第28話 誤算（前書き）

ジャッジ・ザ・ハードを倒したケイスとノワール。だが、他の女神達はマジック・ザ・ハードに倒されてしまった。加えて、ケイスにタイムリミットが忍び寄る。この戦いの結末は如何に…。

ネプテューヌ、ブラン、ベール、ネプギア。

マジック・ザ・ハードの前には、4人が横たわっていた。

「貴様あつ！」

俺はそう叫び、奴に一太刀浴びせようと剣を振りかぶった。

「そう焦るな。こいつらの命までどううとは思っていない」

そう言いつつ、俺たちの前までやつてくるマジック・ザ・ハード。ああ、少しだけ浮いてるから足音がしないのか。

「ひとつだけ聞きたい。お前は何者だ？」

マジック・ザ・ハードは俺にそう尋ねてきた。戦いの最中に何を考えているのかわからない。そこが、すごい不気味だ。

「…俺は、ケイス。この世界の人間だ」

「なぜそんな力を持つている？」

「…答える義務はない」

これは、神様からもらつた力。少々胡散臭かつたけどな。

「やうか…まあ、聞けるとは思つていなかつたが…」

マジック・ザ・ハードはやう言つて、鎌を構えた。

「ならば、死ねッ」

そう言つて、鎌を横一文字に振つてきた。

俺はそれに對して剣を縦に構え、鎌を受け止めた。

「ますます、殺すのが惜しいな

やう言つながら、マジック・ザ・ハードはやうに力を込める。

「私を忘れてないかしらッ！」

そんなマジック・ザ・ハードはノワちゃんが後ろから斬りかかる。
だが…。

「女神よ、無粋な真似をするな。こいつの相手が終われば、次に相手をしてやる」

そう言つて、後ろの翼（？）を器用に動かし、ノワちゃんの剣を受け止めていた。

そして、俺の方に振つていた鎌で攻撃し、ノワちゃんを吹き飛ばしていた。

「あやああああつ！」

「ノワちゃん…」

吹き飛んでいったノワちゃんの元へ向かおおうとしたんだが…。

「私の相手は、まだ終わっていないぞ？」

と鎌を連続で振り回し攻撃をしてきた。

俺は防戦一方となってしまい、仕方なく一旦後ろへ下がる。

こうなつたら、もう1回先々の閃でダメージを『えるしかないか？

そう思い、アーンヴァルに確認を取つてみる。

「（アーンヴァル、もう1回先々の閃行けるか？）」
『無理ですマスター。エネルギーが不足しています』

先々の閃は無理か。

そうなると、普通のRAくらいしか使えないんだが。
結局、グランニコーは何故か使えなかつたしな。

「（残り稼動限界時間は？）」「
『すでに、5分を切つています』

ラスト5分で、マジック・ザ・ハードを倒せつてか。
どんな無理ゲーだよ、それは。
：腹を括るしかいか？

「さあ、どうした。逃げてばかりでは、私は倒せんぞ

そう言いながら、マジック・ザ・ハードが攻撃を仕掛けてくる。
考える隙も『えないつて感じだな。

俺はどうにか攻撃を掻い潜り考える時間を作ろうとする。

しかし、奴はそんな俺をあざ笑うかのように特攻を仕掛けてくる。

対抗策が見つからないまま、一刻と時間が過ぎ去っていく。

『稼動限界2分前です』

アーンヴァルの非常な通知が伝えられた。

あと2分で、俺は丸腰か。

：丸腰？

そう思つたとき、一つの閃きが頭の中を駆け抜けた。

グラニユーレはできなくても、擬似的にあればできるだろう。

「アーンヴァル、『コレットで奴の周囲を攻撃して土煙を上げてくれ』

『了解です。すぐに動きます』

アーンヴァルの回答からすぐにコレットが動き始め、マジック・ザ・ハードに攻撃を始めた。

正確には奴の周辺に、だが。

思惑通り、土煙が上がり、奴の視界を狭めることができた。

「それじゃ、行くぞ！」

そう言つて、俺はスラスターを吹かし、上空へ上がつていった。

side マジック・ザ・ハード

土煙で何も周りが見えないが…。

奴は、初めからこれを狙つたのか？

うん？

上へ上がっていくようだが、何を考えている。

：特攻か！

そんな幼稚な手が私に効くとでも思つたか！

side マジック・ザ・ハード END

現在、高度5000メートル程度か？

この辺りからでいいだろ。

そして俺は、ラファールのモードを変更する。

「ライディングモード、チエンジ」

ラファールは再び合体前の状態に戻り、その上に俺が乗った形になつた。

ここから特攻を仕掛けろ。

重力+加速力なら、速度は先々の閃と同等になるだろつか。

ただ、防具が薄くなるのが痛いな。

そして、俺はラファールのスラスターを吹かせ、下へ、マジック・ザ・ハードの元へ特攻を開始した。

高度がぐんぐん下がる。

それに伴い、速度も上がつていく。

「アーンヴァル、スピードは落とさずそのままマジック・ザ・ハードに攻撃できるよう調整頼む」

『了解です』

やつと、マジック・ザ・ハードを肉眼で確認できた。

だが、その眼はこちらをずっと伺っていた。

やつぱり、バしてたか。

だが、今やめるわけには行かない。

俺は黙つて武器を準備する。

マジック・ザ・ハードまで後もつ少し、ヒーリングまで来た。
これで一太刀浴びせられる。

そう思ったときだった。

「チョーストリーツ！」

俺とラファールは横から襲撃を受け、そのまま吹き飛んだ。
な、何が起こつた？

俺たちが飛んできた方向を確認すると、そこには。

「武士道には反するが許されよ。これも同志のため」

そう言いつつ仁王立ちするブレイブ・ザ・ハードの姿があった。
そんなのアリかよ…。

俺とラファールは地面に叩きつけられ、ラファールは行動限界時間
オーバーのため粒子化。

そして、融合していたアーンヴァルは投げ出され、意識不明。
最悪の結果だ。

side ノワール

「ケイスーツ」

私は、声の限りそう叫んでいた。

ケイス、どうか無事でいて…。

そう思いながら、私はケイスの元へ急いだ。

side ノワール END

体中が痛え。

地面上に叩きつけられたおかげで、あちこちが擦り傷だらけになっていた。

そんなところに、マジック・ザ・ハードとブレイブ・ザ・ハードがやってきた。

「人間。 答える気になつたか?」

「全然」

「そうか。 なら、死ね」

そう言つて、マジック・ザ・ハードは鎌を振り上げた。
…一巻の終わりか。

そう思い、俺は目を閉じた。

side ???

あらり。

覚悟しちゃつたみたい。

でも、約束だから一度だけ助けてあげる。

そして、わたしは目の前に魔法陣を展開する。
彼をわたしの元に召喚するために。

side ???

side ノワール

マジックの鎌がケイスに振り下ろされようとしていた。

「やめてえーーっ！」

私はそう叫びながらケイスの方へ向かった。
そして、振り下ろされた瞬間ケイスの体が光り、光が収まつた後には何も残されていなかつた。
ケイス…。

そして私は、抵抗空しくマジックたちに捕まつてしまつたのだった。

side ノワール END

いつまで経つても、衝撃がやつてこない。
どうしたんだろうか。

そう思い、目を開けてみると、景色が一変していた。
目の前には…。

.....SAVE

第28話 誤算（後書き）

ケイス「結局、誤算つて何？」

マジック・ザ・ハードに先々の閃を撃てなかつた事。
ブレイブ・ザ・ハードの出現。
この辺りかな。

ケイス「最後に出てきた人つて誰？」

今は秘密。
次回分かるから。

ということ。

それでは次回、「約束の場所」でまたお会いしましょ。

第29話 約束の場所（前書き）

マジック・ザ・ハーデに敗れ、武装も失ったケイス。そのケイスを転移させ救つたのは、とある少女だった。彼女の正体とは…

ちゅうじ、とこつか最後の呪いを呪えました。ヘタレやん、アイディアをあつがとひじれこめや。

第29話 約束の場所

目を開けた俺の前に、少女が立っていた。
だが、今いるこの空間が暗く、彼女の顔も見えない。

「君は…誰だ？」

「……」

彼女は寡黙に何も語らなかつた。

俺は何とか立ち上がり、彼女にもう一度尋ねた。

「君は…誰なんだ？暗くて良く見えないんだが

そう言つと、彼女は指をパチンッと鳴らす。

そうすると、今まで暗かったこの場所に明かりが差した。
そこにいたのは…。

「お前は…マジック・ザ・ハード！」

俺はそう言つと間合いを取り、マジック・ザ・ハードの動きを警戒し始めた。

だが、奴はポリポリと頬を搔き、まいつたなあとでも言つたげな顔をしていた。

そしておもむろに画用紙を後ろから取り出すると、何かを書き始めた。
きゅきゅきゅつ。

そして、今まで何か書いていた画用紙を一いちに見せる。

【やほー。あぶなかつたねえ】

画用紙にはそう書かれていた。

俺は「ケそうになるのを必死に堪え、」と切り出した。

「お前、マジック・ザ・ハーデじゃない…のか?..まあ、縮んでるみたいだが」

【ちつこつてこうな】

いや、言つてねえし。

だとしたら、「イツは何者なんだ?」

「で、お前は誰なんだ?」

ちつこつてこうなはちゅうと書くのをふりを見せ、何かを書いてちつこつてこうなを見せた。

【わたしはゆにみてす。つてゆーかちつこつてゆーな】

地の文に突つ込むなよ。

ゆにみてす?

……はあー?

ユーミテスつて、もしかして前作でマジコンヌが騙つてた魔王の名前?

【やー。そのゆにみてす。ほんとのなまえはまじっく・ザ・ハーデだけどね】

だから、地の文に突つ込むのはやめ。

【やだ】

「……ってこりゃ、マジック・ザ・ハードである」と認めめるのか?」

俺がそのまま転生させたあの神様なんだろ?」
そして、画用紙をじろりと見せる。

【「うとねちがうせかこのだけど?】

「ま、面倒臭いから、ユーモレスで統一せてもいいわ。

「で、なんでユーモレスがいい?」

【かみさまにたのまれた。いつかいだけたすけてやってくれって】

神様?

俺をここで転生させたあの神様なんだろ?】

【そそ、そのかみさま】

……もつ突っ込まないからな。

まあ、話が潤滑に進むからいいか。

【うわ】

……。

「で、どう助けてくれるんだ?」

【とあるばしょこ、きみたちをおくつとだければこいつてこわれた】

とある場所？

どーだ？

【きみに、どこつよつも、きみのしたでべつたりしてこるのにかんけいあるみたい】

「アーンヴァルに？」

アーンヴァルに関係すると云ふ、ねえ。

…思い当たらん。

【やしたら、おだちんもらつね。いつもはあめしかもらつてないけど、やつはこれで】

ゴーリテスはそう言つと俺の左手につけていたブレスレットを取り外そうとしていた。

「ちよ、おま。俺、それがなくなると魔法が使えなくなるんだが

【だいじょうぶ。だつて、たぶんぶようになるよ。それに、かみさまがくれるつていつてたし】

俺に画用紙を見せながら、器用にブレスレットを取り外したゴーリテス。
神様、アンタ誰に何を渡してるか分かつてます？

【それじゃ、おくれよ】

彼女がそう言つと、俺の足元に魔法陣が展開した。

「何せどもあれサンキューな、ユーモラス」

【ビートしましてー】

彼女はやつぱり、画用紙に文字を書き、それで答える。
が、予定調和だな。

「IRの世界の君達と俺は分かれ合えないのかな」

【たぶん、むりじゃないかな】

「そか」

【ん】

【わい。じゅんびせどとのつたはい。わざいになにかあるへ.】

「また、会えるかな？」

【たまにあつてんじやん。つかのれぐらで】

…最後の最後に、そんなメタを書つたなー。

【あ、いのうじゅんじだいかな。しょいじや】

「それじゅあた、いつか、ビックで」

【せこせーこ。それじゅ、こいつひしゃこめせーーー】

彼女のその文字が見えた直後魔法陣が強く光だし、俺は別の場所に転移した。

転移する場所がどこか分からぬけどな。

side ニュース

行つちやつたねえ。

これでよかつたの？神様。

『願いをきいてくれてありがとな、まじっくせん』

さて、それじゃこのブレスレットは『箱っぽい』こと。

それじゃ、今色々と忙しいから帰るねー。

『ほいほい、リアね♪ さてよろしくー』

じゃねー。

そして、私はまた次元を超えて帰つていった。
自分の世界へ。

side ニュース END

さて、転移後俺はどうなつていたかといつと…。
わけの分からぬ場所に来ていた。

何もない、白い空間。

その言葉が一番しつくり来る。

また、あのときの神様のところに来ちゃったのかな？

そう思っていたとき、人の声が聞こえてきた。

「ケイス様、でしょうか？」

声が聞こえてきた方を見ると、そこには所謂神官服を着た女性が立っていた。

「誰？」

「はい、そうですが。貴女は一体…」

「申し遅れました。私はここで神官をやつております、アルと申します」

なんとなく似ている人を見たことがある気がするんだが…。

「誰だつけ？」

そしてアルさんは、こちらに構わず話しかけてきた。

「下界での戦闘、拝見させていただきました。マジュコンヌの腹心に敗れてしまうのは想定内でしたが…」

アルさんはそこで一度言葉を切り、俺のほうを見ながらこう言つた。

「ですが、貴方の能力は想定外でした」

「この人、俺が戦闘をしていたのを見ていたのか？

だったら、あの後どうなったか知つていいはずだ。」

「なあ、アルさん。不躾で申し訳ないけど、俺があそこで負けて消えた後、どうなったか教えてもらえないか？」

アルさんは何か手を動かしながら、こちらの質問に答えてくれた。

「多分、『想像の通りですよ。あの後黒き女神は負け、女神達は幽閉されてしまったようですね』

俺が一緒に行つたつてのに、原作と一緒になつたりまつたつてことか。

「わい、と。準備ができました。いかがへお越しください」

アルさんがそう言い、他の部屋への移動を促す。

俺はそれについていった。

そして、その部屋の中で信じられないものを見た。

「神…姫？」

そう、そこには所謂神姫たちの武装が鎮座していた。

それも、1つではなかつた。

全部で8体の神姫が設置されていた。

「神機、ですか。言い得て妙ですね。こちらには神の鎧が設置されているのですよ」

そう言い、アルさんは神姫たちを見渡した。

「意図的に神の鎧の模造品を下界に落として正解だったようですね。あの、ファルコムという方には悪いことをしましたが」

「ファルコム？」

「落とした？」

神の鎧の模造品？

『「これさ、イクスの洞窟の中で見つけたんだ。何に使うものかは分からないんだけど、あげるよ』
あの時にもひつた、ラファールのことか！？

「もしかして、『』は…アーディンと『』に浮かぶ島ですか？』

『「お咎です。そして、貴方にこれらの神の鎧を託します。この力で、マジックンヌを封印してしてください』

アルさんは、ひざに向き直り、俺に頭を下げてきた

俺は、今一度神姫を見渡す。

そして、左端に設置されている赤の神姫、アークに手を触れる。

「『』からよろしくな

『はいっ、もちろんです』

うん、アークはやっぱいい子だ。

「神の鎧が…喋った！？」

「アルさん、この子たち変形とかできます？」

「い、いえ。今まで誰も操作できなかつたので分かりません

よっし。
んじゅやつてみますか。

「アーク、トライクモードに変形！」

『トライクモード、発動！』

アークはそう言い、トライクモードに変形した。

「ぐ、変形した！？」

アルさんはそういうながらかなり驚いているようだった。
まあ、今まででは鎮座していただけだからな。

「ケイスさん、初見でこんな扱いができる貴方は、何者なんですか！？」

「ただの、一戦士ですよ」

この後、ハウリン、ゼルノグラード、アルトレーネ、ツガル、ベイ
ビーラズ、ラプティアスにも挨拶し、最後は。

「アーンヴァル、これからもよろしくな」

『……』

アーンヴァルからの返答はなかった。

そのかわり、胸のポケットに入っていたアーンヴァルが光りだし、
アーンヴァル型の中に吸い込まれていった。

「アーンヴァル、大丈夫なのか？」

『……』

返答はなかつた。

でも、そのうちひょいこり顔を出すだろ？。

修行にて3年経過

「ふう、よつやく全部の武装を使いこなせるよつたのか

俺はそうひとりがむ。

初めは相手が強くて、しかも使いこなせなかつたけど。

今なら、マジック・ザ・ハード相手に、あんな無様な戦いをしなくて済みそうだ。

「ケイス様。よつやく、すべてモノこされたんですね」

アルさんが俺の横に来てそつ語つた。

「ええ。これで、マジコンヌとの戦闘が楽になります」

アルさんは俺が修行をしたいと言つたときに、色々と世話を焼いてくれたんだ。

モンスターの召喚をしたり、ターゲットを作つたりして。

「でも、3年とはあつとこり間ですね」

「…3年？」

俺、そんなに修行してたのか！？

「ええ。つい先日、紫の大地の女神候補生が帰つてきたらしいのです」

つてことは、もう原作突入してる?

「アルさん。俺、下界に行きます。行つて、今度こそ…」

今回は、ザ・ハードに負けるなんて失態は演じない。
そして、絶対にノワちゃんを助け出す。

「下界に行かれるのでしたら、一つ頼まれてもうえませんか?」

「俺にできる」とあれば

「グリに、たまには帰つてきなさい、と言つておいてください。知り合いでと、前に仰つてましたよね」

「けど、前も言つた通り記憶喪失ですよ、彼女」

「ですから、ケイスさんがいこまで連れてくればいい話ですよ」

はあ。

忙しくなくなつたらね…。

「それでは、行きますね

「はい。この世界を頼みます」

「任せてくれ。こなせんが善処します」

さて、まずはプラネットコースに行って、いーすんさんに状況を聞こ
う。

そう思い、俺はプラネテューヌへと向かつた

..... S A V E

第29話 約束の場所（後書き）

はい、ところが、今回ゲストに「リアルではね、ぷチタイプ」さんのところのマジック・ザ・ハードさん」と、まじっくさんに来てもらいました。

まじっく「……【とつづく、ぶれい、まーべる、みてるー?】

今日は、ありがとね、まじっくさん。

まじっく「……【ま、やーゅーけいやく? だつたからね】

ところが、今回はケイスのパワーアップ回だったんだけど、勝つ自信ある?

マジック「……【のー! めんど】

と書うこと、新装備の説明行きます。

アーク

地上での高速戦闘を得意とする。

重火器での攻撃から牽制まで基本的に何でもこなす。

高速射撃戦闘中の命中率はピカイチ。

超高速移動モードのトライクモードへ変形することができる。

ハウリン

地上での肉弾戦を得意とする。

拳での接近戦が主となり、火器の扱いは慣れなためあまり使わない。

ゼルノグラード

地上での遠距離戦闘を得意とする。

どう考えても固定砲台。

攻撃力特化のため、移動しながらの射撃の命中率は低い。

アルトーネ

空中での近距離戦を得意とする。

剣での攻撃がメインとなっており、遠距離戦闘は不得意。防御能力がハンパない。

ツガル

空中戦での遠距離戦闘を得意とする。

火力はあまり大きくなく装甲も薄いが、回避性能が高い。武装を合体させレインディアスターとし、高速離脱することも可能。

中の人ツンデレ。

ベイビーラズ

移動可能なアリ地獄型戦闘を得意とする。

あまり使い方が見出せない…。

ラブティアス

空中戦での近距離から遠距離まですべてこなすオールマイティ型。

このメンバー内では、空中でのスピードが一番速い。

アーンヴァル

現在、マジック・ザ・ハードとの戦闘でのダメージを回復中。

前回までが模造品であつたために、すべての能力が使えなかつたことを考えると、

かなり戦闘能力が上がる事が予想される。

こんな感じかな。

まじっく「……【ちーとなんてもんじゅねーぞ】

まあ、全員合わせると確かにフルレンジになるからね。
けど、基本的に使えるのは1人だから。
それと、あとから2人ほど合流します。

とこり」とだ。

それでは次回、「雪の中の再会」でお会いしましょう。

まじっく「……【りこしうつむ、でてるかもよー~】

第29・5話 ケイスの修行風景（前書き）

いや、加筆しようとしたら、全部追加しなくちゃいけないことに気づいて。

次から章が移るので、まとめ的な意図もあります。

それでは、どうぞ。

「アーク」

『マスター、何やつてんですか。敵は待つてくれませんよ』

アークの激が飛ぶ。

「アーク、やっぱりGがきついって。G抑制システムをONにしてくれよ」

『ダメです。まず、Gに慣れてください。話はそれからですー。』

「うおおおおつ、死ぬうううつ」

side アーク

本当に、今まで感性だけでやつてきたんですね、マスター。であれば、私がそれを覆さなくては。

本当は、あまりこんなことは言いたくはありませんが、。

『マスター。前に仰っていた、ノワちゃんさんといつの方はマスターの大切な人ではなかったのですか?』

その瞬間、マスターを取り巻く空気が変わったのを感じた。

「やつだつた。悪い」

そこからは、全く弱音を吐かなくなっていた。

この人マスターになら、すべてを預けられる。

そう感じた瞬間だった。

side アーク END

Gはまだ感じる。

けど、そんなことで弱音を吐いてたら、ノワちゃんに笑われちまつ。
だから、我慢する。

次は、絶対に失敗できないから。

⋮ 数ヶ月後

「アーク、トライクモード発動！」

『了解。ロードファイター、ロード完』

アークはそう答えるとトライクモードに変形する。
そして、ターゲットの横を通り抜け、反転した瞬間。

「シユート」

トライクモードのノーズに使用されているシルバーストーンが火を噴く。

そして、そのまま自分も突進していく。

「うん、よつやく形になつたな。これなら、相当な武器になるな」

通常のロードファイターEX版の派生に加え、反転中に相手を狙撃しそのまま突進を行う。

名付けて『ロードファイターAD』
アドバンスド

『マスター、正直私にはマスターと言つ人が解りかねます』

アークは口ではそう言つていたが、言葉が弾んでいるように聞こえた。

『ハウリン』

『ボクが言いたいのは、相手を自分の射程距離に入れて何回も殴るつてことだけです』

無理難題をあつしやる。

「で、相手がカウンターを打つてきたりどうすればいい？」

『え？ 避ければいいじゃないですか』

「だから、それが難しいって言つてるんだよ」

俺はそういうが、ハウリンには伝わっていない様子。

『だからですね、ダダダダダッつてこつちが拳を入れるでしょう？ それで向こうがヒュッて打つてきたら、サッと避けるだけですよ』

だから、擬音で説明するなどあれほど。
でもまあ、それができないとドッグサークスができないってことなんだろうな。

〈ゼルノグラード〉

バレットカー二バルがなかなか当たらなくて悩んでいた時。

『マスター、もっとメリハリをつけましょう』

ゼルにやつされ、はつと気がついた。

『バレットカー二バルは、静と動を組み合わせたRAなんです。それに、ボクは基本的には止まらないと当たらない。だから、撃つ時は完全に止まっている必要があるんです』

ゆつくりやってみると、良く分かる。

最低でも、打つ瞬間は止まっている必要があるのか。

『そうです、マスター。すいませんね、こんなに癖のある神姫で』

「大丈夫さ、ゼル。俺も結構癖が強いからな」

〈アルトレーネ〉

『マスター、すごいのです。私が言つことは何もないのです』

「なんことないだろ。俺は、今自分の腕しか使っていないんだ。本

当社、このもう2本の手を使う必要があるんだろう？」

そう言って、アーマーについている手を四方ともひらひらとせせてみる。

『 そ う の で す が 』 。 つ て 、 動 か せ る ジ や な い で す か ！ 』

「まあ、別々ならな。でも、一緒にいて訳にはいかない」

『だったら、この2本の手は私が動かすことにするのです。特訓をするには、一人羽織がうつてつけなのです!』

ちょ、アルトレーネ。

で、こんな言葉は入れてきた！

『アルさんが言つてたのを聞いたのです』

カ
ル
ガ
ツ
<

お前も擬音派か、ツガルよ。

「まあ、言いたいことはわかるが、そうじゃなくてな。ビーフ撒けば効率的にダメージを『えられるかを…』

『まあまあ、そんな硬いことは言わないでや、もつと気楽にいい』

『よ

はあ、疲れる。

けど、爆弾ばり撒きスキルは上昇したからよじよじよしが。

『ベイビーラズ』

『攻撃にも防御にもロックは必要ジャン?』

まあ、確かにそれはカッコいい事は認めよつ。

「どうすればいい?」

『フィールドをステージにすればいいジャン。それが、私のRA、
We Will Rock You ジャン』

この辺は、どうにもならん。

そのうち、5分間にでも聞いてみようか。

『ラプティアス』

『いつも言つてこますが、勝てばいいところのものではないのですよ

そう、俺はラプティアスによくお叱りを受ける。
解つてはいるんだけどな。

「ああ、解つて…」

『マスターは解つてません。先ほどマスターが倒されたとき、私が
どれだけ心配しているか知っていますか！？』

何か、いつもと方向性が違う。

『少しほは、私たちを頼つてください！そんなに私たちは頼りないで
すか！？』

「そんなことは…」

『だつたら、次はちゃんと頼つてくださいね。もう一一本行きましょ
う！』

えーーー。

〈アーンヴァル〉

アーンヴァル、いつになつたら起きるんだ？
お前の仲間達も、みんな心配しているんだぞ。
もちろん、俺もな。

また、一緒に戦おうな、絶対、約束だぞ。

『……』

アーンヴァルから、返事が聞こえた気がした。

第29・5話 ケイスの修行風景（後書き）

特訓の風景と言つよりも、ある日の情景つて感じだな。

ケイス「アーヴとラティアスへの愛を感じる」

ま、実際に『ゲームで育てるキャラだかんな。
愛情はあるぞ。

ケイス「他は？」

ツガルとベイビーラズも育てるけど、ビリしても先送りになっちゃうねえ。

ベイビー ラズもかわいいんだけどね。
台詞回しどか。

それでは、次回『そりゃんと本編に繋がりますので。

ケイス「やういえば、次章のタイトルは？」

『それぞれのセイギ』でいいかな、と。

それではー。

第30話 雪の中の再会（前書き）

新しい力を取得し、修行を終えたケイス。だが、すでに原作が始まっていることを知ったケイスは、ネプギアと合流するためにプラネテューヌを目指すのだった。

急げ、急げ。

俺はツガルをレインディアバスターに変形させ、一路プラネットユーヌを目指していた。

ギョウカイ墓場でマジック・ザ・ハード以外のザ・ハードも出てきたんだ。

どこでどんな改変があるか解らないから、早く合流しなくちゃならない。

「ツガル、もっとスピードは出ないのか？」

『これでも私の最高速なのよ、マスター』

そんなことをしていると、よつやくプラネタワーが見え始めた。

「もう少しだ、ツガル。がんばってくれよ」

『神姫使いの荒いマスターよね、まったく』

ツガルはそう言いながら、スピードを維持する。なんだかんだ言いながら、従ってくれるんだよな。

そして、教会の上空まで到着した。

「ツガル、下に降りてくれ

『了解』

そして、ツガルは垂直に降り始める。
だが、俺は失念していた。

ここがプラネットコースの繁華街だつてことを。

『マスター、皆さんの視線を感じるのですが』

「まあ、珍しいんだからしようがないだろ。空飛べるのなんて、女神と船くらいなモンなんだから」

そして、下に降りると、すぐにツガルを待機状態に戻し、教会に入つていった。

「どなたですか？表が騒がしいようですが。…つて、ケイスさん！？」

「いーすんさん、しばらくです。お元気でした？」

俺はいつも通りにそう挨拶する。

だが、いーすんさんにはそれが一大事だつたようだ。

「どこに行つてたんですかー皆さん心配していたんですねー…」

と、怒られた。

でも今は、ネプギアたちの方が優先だな。

「その話はまたいつか。今は、ネプギアの方が優先です。今、どこにいるんです、彼女」

その言葉にいーすんさんは驚き、

「ネプギアさんが帰つてきたことを存知なんですか？」

と聞いてきた。

「ええ、つい先日風の噂で聞きました。各国を訪ねていると聞いていますが」

まあ、原作の知識だが、その辺は変わっていないと思つんだが。

「そうですか。今、彼女はルゥイーにいると報告を受けています」

みんな、今はルゥイーにいるのか。

「じゃあ、俺もそちらに向かいます」

俺はそう言つて立ち去つとした。

その俺を「一すんせんは呼びとめ、NPGを渡してきた。

「これは、NPGといつ情報端末です。何かあれば、これで連絡してください」

「わかりました。それじゃ、行つてきますね」

「ええ。ネブギアさんを頼みます」

そんな会話をし、俺は教会を出た。
さて、ルゥイーに向かうか。

プラネットユースの郊外に出て、俺はアークを呼び出す。

『マスター、ワタシの出番かい?』

「ああ。ルウイーまで行くだ。お前の速さが必要なんだ」

『くわ～～っ、嬉しこ事言つててくれるねえ、マスター。それじゃ、いくよ。トライクモード。』

そしてアーケはトライクモードに変形し、俺はそれに乗り込む。

『マスター、ちやんとつかまってくれよ、ぶつ飛ばすからね』

やつこつが早いか、アーケはルウイーに向けて走り始める。

『やつば、走るつのは最高だねえ、マスター。』

やつば、アーケは早え。

近道をしたとはいえ、こんな短時間でつべとま。

流石に、変形解除したときには消耗がすごいかったけどな。

「「」苦労様、アーケ。また走ろうな」

『ええ、…マスター。…でも、こんな…長距離は…勘弁して…ぐだぐだ』

アーケも流石に長距離はダメか。
と嘆つよつ、長距離過ぎたか。

そして、街を見ると道の隅で少女が心配そつた表情である一景を見ていた。

あれは……。

side ロム

ネプギアちゃん、大丈夫かな。

ラムちゃんは『そんなの心配することない』って言つてたけど。

それに、世界中の迷宮の方で雷が鳴つたのを聞いたし……。

「……ネプギアちゃん」

ラムちゃんを説得して、わたしもネプギアちゃんの手助けをしたい
よ。

side ロム END

俺はそつと見かけた少女にそつ声をかけていた。

「ロム……ちゃん？」

「……え？ ケイス……さん？」

「おお、やっぱロムちゃんか。久しぶり、元気だったか？」

ロムちゃんは俺の顔を見ると、駆け出してきて、足にしがみついて
きた。

「……ケイスさん、ケイスさんだ。ぐすつ、ひつへ

俺は、ロムちゃんが泣き終わるまで待ち、落ち着いたといひで一回離れておひらつた。

そして、田線を合わせて頭を撫でながらいひつ囁つた。

「ロムちゃん、何かあつたのかい？」

そしてロムちゃんはひょつとずつ話し始めた。

3年前のあの日から、ブランさんが帰つてきていなくて寂しかつたこと。

そして、つっこみの間ネプギアが帰つてきたこと。

そのネプギアが、今世界中の迷宮に向かつていること。

…ん？このタイミングってことね。

「ロムちゃん、ネプギアが世界中の迷宮に向かつたのはいつ？」

「…今田の朝」

遅かつたか。

話から推測するに、もう封印が解かれてるだらうな。

今から追いついても意味はない、か？

そう考えて、俺に、ロムちゃんが服の裾をくいつと引っ張つた。

「…ケイスさん。ネプギアちゃんを助けて！」

「え？」

「…すゞく嫌な予感がする。だから…」

口ムちゃんが、もう悲痛な表情で訴えてくる。
これは、男として答えないといけないものだよな。

「わかった。それじゃ行つてくるよ」

そう言い、俺は踵を返し、世界中の迷宮に向かつた。

side 口ム

ケイスさんがいなくなつたのを確認して私は呟いた。

「ネプギアちゃん、貸しーだからね」

ネプギアちゃんが心配なのは本当だけど、それとこれは別。
私はそのまま教会へ帰ることにした。

side 口ム END

side ネプギア

「向でそう、ひどい」とあるんですかー！」

私はそつと端さんに話しかける。

「うーん。やーて、そんなこと言つてる場合かなつと」

下つ端さんがそう言つと、天井に魔法陣が映し出され、そこから口ボットが5体出現した。

口ボツト！？

かつこいばど、今はおいておひづ。

「わー、悪役の癖にかつこいいー」

…田本一也さん、あとで殴っておるわ。

「さて、キラー・マシンさん方、やーっとおしまい」

U
h

下つ端さんだから、『いつ』と聞かないのかな。
んともすんとも言わない。

一動かない口ボットなんか、怖くもなんともないわね」

「アキラ君、今更ながらお見送りを」

アイヒフさんも「ンパさんも、やつらにこながら端をとのせつく近づいてこく。

「お前ら、いい加減動きやがれ！」

トド^{トド} 謙^{けん}さん^{さん}が^がう^うニ^ニヒ^ヒ、キラーマシ^シンの頭^{かしら}を叩^{たた}き始^{はじ}めた。

卷之三

まあ、そのおかげで動き始めちゃったわけで。

ガアアアアアツ

「へいへ、日本一キーワード」

日本一さんがキックをするけど、全く効いていない。

「ソウルズコンビネーション！」

アイエフさんもスキルを発動するけど、全く効かない。だったら私が！

「変身！」

やつ面つて私は女神化する。

「フォーリーグリーナッジ！」

高速の剣で何回も斬りつける。
けど、キラーマシンには効いてなにようだった。

「さて、ソリデジ・エンドか？女神さまよお

下つ端さんはキラーマシンに命じて私に攻撃をさせようとしていた。
もうだめ、なのかな……。

そんな時、キラーマシン達に砲撃が加えられた。

side ネプギア END

「キラーマシンか、懐かしいなあ」

そう言いながら、俺はゼルを展開して砲撃を行つた。
そして、5体すべてのキラーマシンに命中させた。

そういうえば、原作だとここに1つ1体だけじゃなかつたつける。

…来て正解だつたみたいだな。

「誰だ、テメ！」

「お前、何者だよ！」

「効いて驚くなよ。私はマジヒコンヌの、マジパネ戦闘員、リーケイスさんっ！」…毎回言つが、最後まで言わせろつてんだー！」

やつぱり、お前を言わせてもらひえないんだ、下つ端。

「お、ネブギア。無事だつたみたいだな！」

「ケイスさんも。今までどうぞ～」

「その話は後だ。ま、ま、こいつらを片付けてからだ！」

俺は、キラーマシンたちを見ると、やつぱり一発だけじゃダメだよな。

「へっ。テメ、こいつらを倒すつもつなのか？無理無理、やめとけって！」

あ、下つ端が復活した。

「貴女にいい事教えてあげるわ」

そう、アイエフさんが口を開く。

「IJの人は、前回のキラーマシン事件を解決した人よ」

「…マイジッハ」

「はいです」

「あ、言つやせつた。」

「でも、前と同じ戦いはできないけどな。」

「だ、だけど5体同時は難しこと想つたが」

「あら、ケイスを見ぐびつてもうひがみ困るわ。10体くらい今まで
だつたら平気じゃないかしら」

「アイエフちゃん。

俺に何か恨みでもあります?」

「ま、できなことはないとは思ひなさど。」

「さて、じ。みんな、しばらぐがつ」

「…聞こたい」とほのぼのするほど、後にしておこなあざるわ

そりやビーチ。

「で、勝手はっ。」

「おのと想こます。」

「なけりゃここまで来ないんじゃない？」

そりゃそつか。

「ケイスさん、アーンヴァルさんは？」

「ああ、未だにマジックンヌとの戦いの傷が癒えなくてね。治療中

やつぱり、ネプギアとアイヒフの顔が引きつる。

「ね、ネプギア。もしかすると、まさこ？」

「私もそう思いました。どうしまじょう」

「二人とも、ひどいなあ。俺がアーンヴァルがいないと何もできないと思つてゐる？」

「「そ、そんなことないですよ（わよ）」」

ふーん、まあいいや。

パワー戦になるから、アルトレーネかな？
ハウリンだと、防御に難があるからね。

「アルトレーネ、スタンバイ」

『了解したのです』

「変身つ」

そう言って、アルトレーネを纏つ。

「さて、戦闘開始つと」

.....SAVE

第30話 雪の中の再会（後書き）

はい、とにかくで初めての再会者はロムちゃんでした。

ケイス「どうか、どこにも雪の描写がされてないが

いつもの事じやん。

ケイス「それで、そのロムちゃんに要請されてネブギアを助けに行つたんだ」

まあ、相変わらずロムちゃんが黒くて安心した。

ケイス「で、キラーマシンが一気に5体出てきてるんだが…」

お前なら大丈夫だろ？

それに、接近戦特化+防御力最高のアルトレーネがパートナーなんだから。

ケイス「多分大丈夫…かな？」

ということ。

それでは次回、「情報交換」でもたお会いしまじょひ。

第31話 情報交換（前書き）

世界中の迷宮にて、キラーマシンに襲われようとしていたネプギアたち一行。

それを、間一髪のところで助けに入ったケイス。さて、キラーマシンの運命は…。

12/5 文章を微妙に修正

キラーマシンか。

前に戦つたことがあるナビ、あの時はまともに戦つてないんだよなあ。

そう思いながら、キラーマシンに剣を向ける。

「ま、恨みは…あまりないが、倒されてもいいってくれ」

そう言い、俺はキラーマシンの方に突っ込んでいく。

そして、剣を一閃。

ガキイインと音がし、剣が止められる。

「へンツ。テカイロ叩いても、ロイツ等には敵いつしないのむ」

下つ端がそんなことを言つてくれる。

小剣じや、まあダメージは『えられんわな。

だったら、大剣に変えるだけだ。

そして、ブラオシュテルンを空中に投げ、粒子化させる。

「そつか、そつか。敵わないと見て、覚悟を決めやがったか」

…下つ端の癖に生意氣だな。

そつ思いながら、一振りの剣を呪喚する。

「来いつ、ジークムント」

俺がそつ言つと、俺の前に一振りの剣が現れる。

この剣は、ジークムント。

俺の力では扱えないが、アルトレーネの力なら。

「モード、トレス」

『了解なのです。アームをトレースモードで動かすのです』

そして、肩から伸びるアームがジーフムントを掴み、再び構える。トレスモードの場合は自分の腕を動かせば一緒に動いてくれるから、楽なんだよな。

「くっ、デカケリや いいつてもんじゃないぜ」

下つ端はそう言いながら、こつちを見ながら、ヤケている。
そんな顔をして、いられるのも、今のうちだけだぜ？

卷之二

そう言いながら、大剣を振り下ろす。

うん、本当に振り下ろしただけなんだが。

ガシャアーンと音かし、一体のキラー・マシンの腕が地面に落ちた。斬った場所はバチバチと火花が発されていた。

「「「「えええええつー!?」」」

そんな、多重で叫ぶよつなりとじやないだね。
わい。

「まだ、やるかい？」

答えはあまり期待していないが、キラーマシンに対して言ってみる。

「キケン、キケン。キョウセイハイジョタイショウハッケン。ゲイ
ゲキジュンビ」

…あら?

まさか、怒らせなくてもいいものを怒らせやつた?

「ヘッヘーン。自分から攻撃対象になつてくれるとほな。これだから、バカは扱いやすいぜ」

…よし、ブチ殺す。

「アイツ等を片付けたらテメエの番だからな、下つ端。

side アイエフ

「アイツ、何自分で墓穴掘つてゐのかしら」

私は、そんなことを言いながらコンパの入れてくれたお茶を飲んでいた。

人間、たまには息抜きが必要よ。
ネブギアは「いいのかなあ」なんて言つてたけど。
まあ、ケイスだから大丈夫でしょ。

「お前ら、そんなとこひどいんびり観戦とか、してんじゃねーよ」

ケイスのそんな声が聞こえてくるけど、ビコ吹く風。
だって、私たちじゃ太刀打ちできないじゃない。

そんな時だった。

キラーマシンが口をあんぐりと開けて、何かを出そうとしていた。

…って、あれはミサイル！？

さ、流石にケイスでもあれは無理かしら…。
私には、笑うことしかできなかつた。

s i d e アイエフ E N D

ミサイル！？

キラーマシンたちが口を開けたから何か出すのかと思つたら、ミサイルかよ。

しかも、5体同時に。

…これは、ちとまづいかな？

「アルトレーネ、ゲイルズゲイグル、行けるか？」
『はいなのです。…ゲイルズゲイグル、ロード完了なのです』

それじゃ、行つてみようか！

「ゲイルズゲイグル！」

俺がそう叫ぶと、宙へ舞い上がる。

そして、ジーブリンデを投擲用に変形させ、それをキラーマシンたちの中心に投げ込む。

ドオオオオと地響きがし、キラーマシンたちがいたところには、何も残つていなかつた。

「それで、まだやるかい？」

そつ言いながらひたきまで下つ端がいたところを見てみたのだが…誰もいない？

「キーラーマシンは、まだたくさんあるんだ。覚えとけー…」

そつ言いながら、どこかへ走つて逃げていった。ホントに、逃げ足速いなあ。

「さて、改めて。久しぶりだな、ネプギア。元気そつで安心したぞ」

そつ言いながら、ネプギアの頭をポンポンと撫でる。すると、ネプギアが目から涙を流し始め、俺の胸に飛び込んできた。

「うわあああん、ケイスさん。生きててくれて良かつたよお

そつ言いながら、俺の胸に顔をつづめ、泣きはじめた。

俺は、ネプギアが泣き終わるまで、背中を抱え頭を撫で続けていた。

「ぐすり、感動の再会なのです。ギアちゃん、よかったですね…」

「コンパ、今はそつとしておいてあげなさい

「はいです。で、あいちゃん。あの人ケイスさんって人ですか？」

「そうよ

「ま、そつてもひつたけど久しぶりね」

アイエフが俺にそつ声を掛けてくる。

「そうですね、本当に久しぶりですね。それに……」

といつて、あたりを見渡す。

ゲームでは見たことあっても、コンパと日本一には初めて会つからな。

「仲間が増えたんですね？」

「そうよ。一人とも、私たちの仲間よ」

そう言つて、コンパと日本一を紹介してもらつた。

「やつにえは、今までどにいたんですか？」

ネブギアがそう聞いてきた。

まあ、嘘を言つても仕方ないから、本当のことを言つてしまひうか。

「今まで、空に浮かぶ島にいたんだ。そこで、修行してたんだ」

「修行……？」

田本一がそう反応した。

ああ、確かにそういうキャラでしたね。

「アーンヴァルさんは？」

「アーンヴァルは、まだあいつらとの戦いのダメージが抜けてないみたいでね。まだ、目が覚めないんだ」

未だに目覚めないんだよなあ。

もうおきてもいい頃なんだが、何でだろ。

「それと、その鎧は何ですか？」

「ンパがおずおずと聞いてきた。

…とつて食つたりしないから、そんなに怯えなくていいよ。

「…」

『私はアルトレーネと同じなのです。よろしくなのです』

「…」

「まあ、というわけ。アーンヴァルと同じ存在だね」

セツニツツヒ、アルトレーネを待機状態に戻し、服にしまった。

「そういえば、今どんなことが起つたるんだい？またキラーマシンが復活するなんて」

「原因は知つてゐるけど、あえてそう聞いておく。

だって、普通は知らないはずだからね。

「ゲームキャラさんが…壊されちゃいました。こんな風に

ネプギアはそう答えながら、バラバラになつたゲームディスクの破片を見せてきた。

結構、クルもんがあるな。

「ねえ、ケイス。貴方の魔法で何とかならない？」

「無理だな。もひ、魔法使えないし」

「まあ、取られちゃったしね。」

「「これから、どうすればいいんでしょ、うか…」」

「「とりあえず、ルウイーに戻らないか?」」ナさんに報告した方がいいだろ?」

「「やうね。まあは、そうしまじょ、うか」」

そして、俺たちはルウイーの教会に来た。

「おじやましまーす」

そのまま、協会の扉を開ける。

そこには、ミナさんとグリさんが神妙な顔つきで話し合いでいていた。

が、こちいらに気つき、返事をしてくれた。

「はい、何の御用でしょ、うか…って、ケイスさん!…?」

「お久しごりです。ミナさん、グリさん」

俺はそのまま、頭を下げる。

「ロムちゃんが『ケイスさんが帰つてきた!』と言つていまつたが、本當だつたんですね…」

グリさんが、俺の顔を見ながらしみじみとしゃべった。

けど、今はそんな場合じゃない。

そう思い、俺はネプギアに報告をすみ分けに始めた。

「ミナさん、グリさん。大変なことになっちゃいました」

ネプギアはそう切り出し、ゲームディスクが壊されたことを2人に伝えた。

「そうですか。マジハコンヌが…」

「また、マジハコンヌなんですね…」

2人とも、同じような反応をする。

特に、グリさんは前回の当事者だしなあ。

「一応、壊された直後に出てきたキラーマシンは倒しておきましたけど、まだまだ出てくるでしょ？」

「今回ま、どうしたらいいんでしようか」

ミナさんは頭を抱え、考え始めた。

そんな時、誰かが教会のドアをノックした。

「ここにいらっしゃいますの」

第31話 情報交換（後書き）

と言つことで、31話をお送りしました。

今回ケイスが使つた技は、下の通り。

ゲイルズゲイグル

ジークムントを投擲用に変形させ、敵に投げつける技。
基本的には直接相手に投げつける技だが、今回のように対象物なし
で投げつけ、爆風で攻撃する方法も使える

ケイス「爆風で、つてのはオリジナルだよな」

だつてひ、当て辛いんだよアレ。

爆風くらいの補正がないと、当たらないつてば。

そういうば、アルトレー・ネとコンパつて会話の語尾が似てるよね。
二人だけで話をさせると、気が狂いそうだ。

とこつことで。

それでは次回、「鍊金術師」でもたお会いしましょ。

第32話 錬金術師（前書き）

ゲームキャラが壊され、封印を失った世界中の迷宮。世界中の迷宮にはキラーマシンが続々と召喚されている。この危機を脱する方法は…。

第32話 錬金術師

「 こ とに ち わ 、 で す の 」

俺たちが教会の中でも色々と模索している中、そんな声が聞こえた。
「 ど う じ ら 様 で す か ？」

ミナちゃんは突然の来客にそう答える。
今は、一分一秒が惜しい状況だしな。
でも、この声は…。

「 が す と は 、 が す と こ う で す の 。 街 か ら 街 へ 旅 を し て い る で す の 」

がすとはそう言いながら、俺たちが固まつてこないとひままで歩いてきた。
そして、俺たちの近くへ来たとき、彼女はこう言った。

「 何 か 、 困 つ て こ る こ と は な い で す の ？」

そう言いながら、俺たちの話の中に入つてこようとする。
まあ、彼女の性格からしたら、積極的に関わつてきやう…かなあ。
そう思い、助け舟を出やうとしたんだが…。

「 実 は … 」

ミナさんががすとこに今回のこきあつを話し始めていた。
ミナちゃん、口軽つ。

「やつこつ」とだったのです。

がすとは、そう言しながら自分が持っているカバンジッパーをおもむろに開け、その中をまさぐり始めた。

「えーと、確かにこに入っていたはずですの」

そう言いながら、カバンの中をずっと探っていた。
しばらくして、手をカバンから出して、こう呟いた。

「なくなりたのです」

そう言いながら、カバンのジッパーを閉めていた。

「何がなかつたんですか？」

「ゲームキャラの補修剤ですの。でも、取つてくればいいでもな
るですの」

そう言つと、ミナさんに紙とペンを要求し、それを受け取る。
そして、何かを書き始めた。

それは、ゲームキャラの補修剤を作るための素材リストだった。

「レアメタルにデータ二ウム、この2つが必要ですの」

そう言つて、その2つの素材の採取場所について説明を始めた。

「レアメタルは、この辺だとルウェー国際展示場あたりのモンスターが落とすですの」

「データームは、世界中の迷宮あたりのモンスターが落とすです
の」

そう言ひて、一息つく。

「」の2つの素材を集めれば、補修剤が作れるですの

「誰がよ

アイエフががすとの言葉に囁み付く。

だが、がすとは涼しい顔で「がすとですの」と答えた。

知つてゐる身からするとアレだが、普通は信用できないよなあ。

「それを取つてくれればいいんだな？」

俺はがすとに対してもう言葉をかける。

「ですの。物分りが早くて助かるですの」

「と言つてらじこ。」のは、協力して」の2つの素材を集めよつ
か」

俺がそつと、そこにはいた全員がうなずいた。
さて、どうやって集めようか。全員で一緒に行動するのもあれだし
なあ。

そう思つてみると、ネプギアが声を掛けてきた。

「ケイスさん、ここは私と2人だけで充分だと思いませんか？」

まあ、確かに女神化したネプギアと俺だったら、そこまで時間をか

けずに集められるな。

俺がそうだな、と返事をしようとした直前に、「ちょっと待ったー」と声が聞こえた。

この声は、ラムちゃん？

そう思つた瞬間、足のあたりに『とんつ』と何かがぶつかってきたのを感じた。

何だらう、と思い見てみると、ナーニはラムちゃんがナーニいた。

「…ケイスさん、わたしと…行こう?」

「ロムちゃんが行くなら、当然私も一緒に行くわよ?」

気がつくと、ラムちゃんも俺の近くにいた。
いつの間に…。

「ロム様、ラム様、」立派になられて…」

ミナさんは、そんな一人の姿を見ながら涙を流していた。
まあ、原作だとずっと遊んでいようとしていたしな。

「ロムちゃん、ラムちゃん。遊びじゃないんだよ? 2人はお留守番
して。私とケイスさんで取つて来るから

「…私たちの国の問題だから。ネプギアちゃんは、みんなと一緒に
待つてくれていいよ?」

そう言いながら、ネプギアとロムちゃんは『私が』『うつ』、わた
しが『を繰り返している。

もつ少しだったのに！

もつ少しだで、ケイスさんと2人だけで行けたのに！

口ムちゃんもラムちゃんも何で空気を読んでくれないのかな。
でも、ケイスさんなら、私を選んでくれるよね？

side ネプギア END

side ラム

もう少しで、ネプギアちゃんに持つていかれるところだった…。
ラムちゃん、Gー！

ネプギアちゃんには絶対に負けないから。
お姉ちゃんの本にあった、『アレ』を試してみようかな？

side ラム END

「まあ、ネプギアが言つたのも一理あるね」

俺はそつぱつて、ラムちゃんとラムちゃんを諭すために、彼女達の
田線に合わせるように屈んだ。

「ね、一人の気持ちも良く分かるけど、危険なんだよ？だから、今
回はお留守番してくれないかな？」

そう言いながら、2人の頭を撫でる。

俺の後ろでは、ネプギアが首を縦に振っているのが解った。うん、ネプギアは相変わらずやさしいんだな。

そう思つていたとき、ロムちゃんが下を向き小さな声でぶつぶつと呟いていた。

「ロムちゃん、どうしたの？」

そう言ひながら、ロムちゃんの頭を優しく撫でる。

「ケイスさん、わたしの」と、嫌い？

俺が「いいや、そんなことないよ。」と答えると、ロムちゃんは顔を上げ、俺のほうを見つめてきた。

その目に、涙が溜まつていて。

「ルゥイーのために、何かしたいって言ひのねわることなの？わたし、今まで何もできなかつたから……」

そうこうう彼女の目からボロボロと涙が次から次へと溢れてきて。俺は、罪悪感に苛まれ、気がついたらロムちゃんを抱きしめていた。

「ごめんな」と呟きながら。

side ロム

お姉ちゃんの本にあつた『アレ』、こいつかばほつぐんだった。うん、でも何回も使えないね、これは。

私はケイスさんに抱きしめられながら、ネプギアちゃんここにひとつ笑いかけたのだった

「それじゃ、2手に分かれて、素材集めをしようか」

ネプギアは未だにロムちゃんとラムちゃんが前線に出でたことを快く思っていないようで、ずっと口を尖らせたままだった。

「ネプギア、大丈夫だよ。2人は、俺が責任を持って守るから」

ネプギアの心配を払拭しようとそう言ったのだが、ネプギアはプリツとそっぽを向いてしまった。

やれやれ、本当に心配性だなあ、ネプギアは。

向かう先は、ネプギアたちがルウェー国際展示場で、俺とロムちゃん、ラムちゃんが世界中の迷宮となつた。

俺たちが世界中の迷宮になつたのは、キラーマシンが出てきたときの対処のためだつた。

side ネプギア

「全く、ケイスさんは女心つてのがわかつてないです！」

私はそう言ひながら、歩を進める。
レアメタルを落とす敵を探しながら。

「それが、ケイスつて奴よ」

アイエフさんがそう言いながらウサベーダーを切り裂く。

「そう言わても、なかなか納得できないんですね」

「だったら、告白しちゃえればいいのに」

そ、それは難易度が高いですよ、アイエフさん。

私は顔を真っ赤にしながら、アエルーを攻撃するのだった。

side ネブギア END

俺とロムちゃん、ラムちゃんは世界中の迷宮を冒険中。
さ・て、川鳥教授はどこかなー。

そう思いながら、目に付いたモンスターを3人で片つ端から倒していく。

「にしても、ケイスつて結構強いわよね」

ふと、ラムちゃんがそんなことを言い出した。

「まあ、色んな仲間が俺を助けてくれるからね」

今回は、高速離脱も考えて、ラブティアスを纏つて行動している。
一番フットワークが軽くて、攻撃力が高いからな。

そんなこんなで川鳥教授のところへ到着。

俺はすぐさまスーパー・ダブルナックルを発動し、川鳥教授を瞬殺。
そして、データーラムを手に入れ、すぐにルウェイーの教会へ帰った。

そこには、すでにレアメタルを手に入れたネプギアたちがいた。

... S A V E

第32話 錬金術師（後書き）

と並んで、32話でした。

今回ケイスが使った技は、下の通り。

スーパーダブルナックル
いわゆる、乱舞系必殺技。
1発1発の攻撃力が高い。
ガードすることは可能だが、いつも長くは続かない。

ロムちゃん無双状態。
びっくりになつた…。

とこりとで。

それでは次回、「ゲームキャラの復活」でお会いしましょう。

第33話 ゲイムキャラの復活（前書き）

ネプギア組とロムラム組に分かれて補修剤の素材を集めてきた。これでゲイムキャラ復活の舞台は整った。

第33話 ゲイムキャラの復活

「これなら、素材としてはばっちりですの」

がすとはネプギアと俺から受け取ったレアメタルとデーターウム確認するなりそう言つた。

まあ、ここからがすとに任せらるしかないか。

「さて、教祖殿。先ほどの部屋に案内して欲しいですの」

そつ//ナさんに言つて、案内を頼んでいた。

何でも、俺たちが素材集めをしている最中に、調合を行つ部屋を見繕つていたらしい。

まあ、広い部屋はあつたが散らかっていたため、そつきまで//ナさんとグリさんで片づけをしていたとか。

そして、俺たちは//ナさんに案内されるまま、その調合部屋へ案内された。

「さて、調合釜をセツトするですの」

そう言つて、カバンのジッパーを開き、調合釜を取り出そうとしていた。

「やつぱり、調合釜は、少し、重いです、のつー！」

ドカツと音がし、調合釜が床に置かれた。

：俺は夢でも見ているんだろうか。

なんで、カバンの容積より大きい調合釜が、カバンから出でてくるん

だらうか…。

「なあ、がすと。ひとつ聞いていいか?」

「なんですか?」

「その釜、カバンより大きいよな?」

「ですの」

がすとは『それが何か?』と言いたげな顔で俺のほうを見てきた。

「ひとつだけ言えるのは、『鍊金術はそれなりに万能』、ですの」

そつ言いながら、調合の準備を進めていった。

「へえ、これが調合釜なんだー」

「…す、本格的?」

ロムちやんとラムちやんは興味深々に釜を見ていた。
そして、その興味がカバンの方に移る。

「でも、このカバンもすげよねー。こんな大きいものが入っちゃうんだー」

「…（口ク口ク）」

そつ言いながらロムちやんがカバンに手を伸ばそうとしたとき。

「ダメですの。そのカバンに触つては、ダメですの」

作業を行いつつ、ラムちゃんにそう声を掛ける。

「えー、何でよー」

けち

ラムちゃんは、頬を膨らませながら、がすとをじつと睨んでいた。

「触つてもいいですけど、この手袋をしてないと触つた場所から腐つていくのです」

がすとほそう言いながら、自分が装備している手袋を見せる。あの手袋、そんな機能があつたんだ。

「そ、そんな脅しになんて引っかかるないわよ。でも、興味なくなつたから、触らないでおくわ」

ラムちゃんは、そう言いながらカバンから離れていった。

ラムちゃんがそんなことになつてこぬとせ、ロムちゃんはとこつと。

「…ネブギアちゃん、触つてみる？」

「え、遠慮しておめがわ」

「モル」

ネプギアにカバンを触らせようとしていた。

ていた。

…そりや、そりだみな。

調合の準備も終わり、後は調合するだけ。

そんなとき、近くで「オオオーン」という音が鳴り響き、教会が揺れた。

「何があつたんだ？」

俺はそう言つて、教会の外へ飛び出した。

飛び出た先で俺の目に飛び込んできたのは、街を蹂躪するキラー・マシンの大群だった。

ぱつと見、数十体はいるだらう。

俺は、急いで調合部屋に戻りみんなにそのことを伝え、俺は迎撃に出ると叫びついた。

「ケイスさん、私も行きます」

そつ言つたのは、グリさんだった。

グリさんは魔法も使えるから、実際ありがたい。

迷宮に向かってくれ

「ケイスさん、私も…」

「ネブギア。君たちはゲームディスクが復活したらすぐ世界中の

おやじぐ、一緒に戦つと言つてくれようとしたんだろうが。今回のまつ原作になつてイベントが起つたのなら、温存しておくれよとしたことはない。

「ロムルさとトロムルさと、まさとと一緒にで待機してお

「いってくれ

「何でー?わたしたちも戦えるわよー。」

「…（口ク口ク）」

ロムちゃんとラムちゃんはいつも戦って戦おうとしてくれているが。

「2人は、こじドリナさんどがすとを守ってくれ。いやとなれば、4人で逃げてくれてかまわない」

「これ、とこつ時が来ないことを祈るだけだけだ。」

そういうしてこぬひちに、グリさんの戦闘準備も整い、俺たちが出来る段となつた。

「みんな、あとほよろしく頼む」

「減らせるだけ減らしておくから、ね」

俺とグリさんはいつも教会を出発した。
キーラーマシンを迎撃するために。

ケイスさんとグリさんは、私たちに後を託して教会を後にした。

2人を見送った後、私はアイヒフさん、コンパさん、日本一さんのほうに向き直り、こつ言つた。

side ネプギア

「アイヒツさん、「ンパさん、日本一さん。お願いしまよ、私に力を貸してください…」

「何を今更…。決まつたるでしょ？」

「私は、ギアちゃんが嫌だつて言つても、ついて行くなつて決めてるです」

「女神様のお願いを断るヒーローなんていないよ…」

「嘘さん…」

みんな、力を貸してくれるつて言つてくれた。

だから、私は一生懸命自分が出来ることをやろう。やつて決めた。

「ぐるーるー、ぐるーるーん…」

がすとさんは一時も休まず調合釜をかき混ぜてこる。

額には汗が浮かんでこるがそれをものともせず、一心の下すつとかき混ぜてこる。

時にゆつくつとかき混ぜたり、ふに速くかき混ぜたり…。

「ふう、いのへりこですの」

そして、がすとさんが調合釜から離れた。
そして、皆の方を向く。

「あとは、いにしへゲームキャラの破片を入れれば終わりですの」

セツヒツヒ、ミナさんの元へ行きゲイムキャラさんの破片を受け取る。

そして、それを調合釜にじゆびゆびと入れ、3回かき混ぜた。あると、調合釜から光が溢れ、ゲイムキャラさんが復活した。

「あら? 私は何でここにいるんでしょう? 確か私は…」

「あなたは一度壊されてしまつたんですよ」

ミナさんが、ゲイムキャラさんとセツヒツヒた。

「ナホ…ですか。では、封印は…」

「ええ、解かれてしまつました。今現時点ではすでに街に影響が出始めてしまつています」

セツヒツヒ、ケイスケさんとグリさんが迎撃に出たことを説明した。

「セツヒツですが、彼らが…。ですが、彼らなら間違いなく、この状況を打破してくれるでしょう」

「ええ、状況は違いますが、4年前と同じです。それでですね、ゲイムキャラさん…」

「教祖、それ以上言わなくても分かっています。今一度、封印の任に就きましょ!」

これで、キラーマシン封印の準備は整いました。からは、再度封印するだけです。

s.i.d.e

ネプギア

E N D

第33話 ゲイムキャラの復活（後書き）

キラーマシンが復活、かつ街に被害が出てしまっている。

前回のキラーマシン騒ぎとはちょっと違う状況になっています。

さて、ケイスとグリは街に進行してきたキラーマシンにどう対抗するのか

ということ。

それでは次回、「蒼老翼」でまたお会いしましょう。

第34話 蒼き翼（前書き）

迎撃に出たケイスとグリ。

そこに待ち構えるは、数十体のキラー・マシンと……。

俺とグリさんが外に出ると、キラーマシンから逃げようとする人々で溢れていた。

「グリさんはどうあえず皆の先導をお願いします」

「わかりました。皆の避難が終わったら、私もすぐに駆けつけます」

俺は、「よひしへ」と言つてからキラーマシンの方へ駆け出した。キラーマシンたちは、家を破壊しながらこちらへ向かって来ていた。だが、何かおかしい。

下つ端の姿は見えないのに、統率がなされている。ワレチューの姿も見えない。

誰が、統率している?

「まあ、ロンドから報告を受けてきてみれば。やはりお前だったのか」

そう、声がする。

この声、聞き間違えるはずがない!

「…マジック・ザ・ハード!」

「生きていてくれて嬉しいよ、逃亡者」^{ケイス}

出来れば、したくない再会だった。
しかも、こんな時期に。

「…マジック・ザ・ハード。なぜ、お前がここにいる？」

声が震える。当然だな。

前回、敵わなくて逃げた相手に、一人で挑まなくてはならぬ。

「愚問だな。我等の障害となる者がいるのなら、排除するのが当然だろ？」「うう」

そう言つた後、マジック・ザ・ハードはキラーマシンたちに掃討を続けるように指示を出す。

「さて、これで邪魔も入らん。あの時の続きをじよりつか」

そして「今回はブレイブの邪魔も入らんしな」と言しながら、俺の方に鎌を向ける。

「ハウリン、スタンバイ
『了解です、マスター』

それに答え、俺もハウリンをセットアップする。

「前の鎌は使わないのか？」

「痛いところを突いてくれる。

お前らのおかげで、まだ用覚めてないんだよー

「…」

「まあ、そんなことはどうでもいい。私は我等の障害となる者を駆逐するのみ」

そつ言つて、鎌を構え俺の方へ斬り込んできた。
そして、鎌が振り下ろされる。

「くうつー」

俺はそれを左腕でガードしつつ、右腕を振りかぶりストレートを放つ。
だが、マジック・ザ・ハードは鎌の柄の部分を使い、それを防ぐ。

「人間にしては、いいパンチだ」

「それはそれは、ありがと、よつ！」

そつ言いながらもう一回右のストレートを放つ。
が、今度は後ろに跳躍され、避けられてしまった。

「ハウリン、ドッグサーパス行けるか？」

『了解です。ドッグサーパス、ロード完了です』

「今度はこっちから行くぜ。ドッグサーパス！」

そう言つて、俺はマジック・ザ・ハードの懷に飛び込み、パンチの連打を浴びせる。

流石にこれは防げなかつたようで、ほほすべてが手ごたえがあつた。

「これで、最後だああつ！」

そつ言いながら体を引き絞り、最後の一撃を入れる体勢に入つた。
左足を踏み込み、体のバネを最大限に使い右腕を打ち込む。

「ドッグ・インパクト！」

俺の右腕がマジック・ザ・ハードの腹に突き刺さった……かのようにな
見えた。

手ごたえが、薄い。

マジック・ザ・ハードが瞬間的に後ろに跳んでいたためだった。
だが、それでもダメージが蓄積しているのは明確だった。

「さて形勢逆転だ、マジック・ザ・ハード」

「ふふ。そのようだな」

マジック・ザ・ハードはそう言いながら邪笑う。
わいわい

「何が可笑しい！」

「君が私の策略に見事に嵌つてくれてそれが嬉しくてつい、な」

そう言いながら、マジック・ザ・ハードは魔法陣の中に姿を沈めて
いく。

どういう、意味だ？
……
そういうことか。

俺は、奴に嵌められたってことか。

ケイスさん、何をやつているんだ奴！

side グリ

私は、キラーマシンたちの攻撃が少なくなることに疑問を感じた。

「何か、不測の事態が発生した？」

そう思い、ケイスさんのいるほうを見てみた。

確かに、ケイスさんは何かと戦つてゐる。

けど、キラーマシンが放置されているから、攻撃が止まない。

「畠さん、教会まで避難をお願いします」

私はそう言って、キラーマシンの方へ駆け出す。

私が、守らなきゃ。

キラーマシンだつて、機械仕掛けなんだから、雷に弱いはず。そう思い、私は雷撃の魔法を唱える。

「雷より降れ、サンダーフォール」

雷撃の呪文は、確かにキラーマシンに直撃した。

直撃したキラーマシンは止まつたけど、まだまだ残つてゐる。

「止まつてー止まつてよー！」

私はそう言しながら、サンダーフォールを連発する。

だけど、キラーマシンの侵攻は止まることはなかつた。

かといって、街中で氷炎魔法を放つわけにもいかないし…。

『『だったら、わたしを呼んで!』』

頭の中に、そう声が響く。

誰? 私に話しかけてるのは。

『私は役に立つよー。それに、わたしをゲームギョウ界に喚べるのはあなただけみたいだし』

信じて、いいのかな？

『うん、わたしの名前は…』

私は、彼女の名を呼んだ。

side グリ END

不意に空に雷鳴が轟く。

そして空に亀裂が走り、空の一部が割れた。

「な、何だありや

俺は、そう口にしていた。

まるで、何かを召喚しているみたいだな。

そして、その割れたところから何かが出てくる。

俺は、それに見覚えがあった。

「ビック…バイパー？」

そう、往年の名作STGのプレイヤー機、ビックバイパーだった。だけど、何か小さいな。

side グリ

あれが、私が喚んだもの？

私はその飛行機を見ながらそんなことを思っていた。

『あ、おねーちゃんありがと。これで、わたしも「ますたー」に会えるよ』

そういつて、その飛行機はお礼だと黙つて、キラーマシンたちを全て破壊してくれていた。

side グリ END

その光景は、圧巻だった。

ビックバイパーが使用できる武器である、レーザー、スプレッドボムなどを使ってキラーマシンたちを破壊していた。

俺は興味本位で近くに寄つて行つた。

すると、ビックバイパーから声が聞こえてくる。

『ますたー、やつとお会いできましたー』

... SAVE

第34話 蒼き翼（後書き）

さて、ビックバイパーが登場したわけですが。

ケイス「彼女は何者？神姫みたいだけど、俺はビックバイパーの神姫なんて知らないぞ」

まあ、その辺は次回に。

今回使用した技は以下の通りです。

ドッグサーラス

敵の懷にもぐりこみ、パンチの連打を浴びせる技。

地味に痛い。

ドッグ・インパクト

本作オリジナル。

ドッグサーラスで削りきった後のフィニッシュショブロー。

渾身の力を込めて放つストレートパンチ。

ということ。

それでは次回、「使命」でまたお会いしましょう。

第35話 使命（前書き）

俺のことを『マスター』と呼ぶビックバイバー。
彼女は一体…。

第35話 使命

キラーマシンの大群を一掃する火力を持つたビックバイパー。そんなビックバイパーが俺のことをマスターと呼ぶ？ どうなつてんだよ一体！

『ますたー、何か問題でも？』

ビックバイパーが、心配そうに声を掛けってきた。まあ、怪訝そうに見ていたことは認めるけど。

『キミは一体誰なんだ？』

『わたし？ わたしは、ヴェルヴィエッタ』

『ケイスさん、無事だつたみたいですね』

そう声を掛けられ、俺はそちらの方を向く。声がした方から、グリさんが歩いてきていた。

『グリさん、そちらも無事な用で何よりです』

『無事と言つか…。その子がいなかつたら、大変なことになつていてですよ？』

『その件に関しては申し訳ない。で、グリさんはコイシのことを知つてるんですか？』

そう言って、ヴェルヴィエッタと名乗ったビックバイパーを指差す。

『お姉ちゃん、やつぼー』

「…まあ、私が喚んだみたいですからね」

そう言つて、ため息をつく。

「グリさんが喚んだ?..」

「ええ。なんと言つたか、頭の中に『私を喚んで』と響いてきて」

グリさんはそう言つて、ヴェルヴィエッタの方を見る。

『?』

ヴェルヴィエッタは、自分が何故見られているのか解らない様子だつた。

とはいって、ヴェルヴィエッタのおかげで助かつたのも事実だしな。

「まあ、何と言つたか。ヴェルヴィエッタ、助かつたよ。ありがとう

『ま、ますたーからそう言わると、すつじこ嬉しいよー』

「で、君は何者で何でここにいるか教えてもらえないかな?..」

そう言いながらヴェルヴィエッタの方をもう一度見る。
いや、睨んだと言つた方が良いか。

『またー、なんか怖い感じがしますー』

そう言いつつ、ヴォルヴィエッタは俺の質問に答えた。

「まず、存在としては神姫である、ということ。」

元々時空転移装置でゲームギョウ界に転移するはずだったが、座標がずれて亜空間に閉じ込められてしまつたらしき。

そして、呼びかけをしても誰にも気付かれず、やつとの時代で波長の合う人間グリさんを見つけてコンタクトした。

…とこいつことらしき。

『他の神姫はここにちゃんと転移できたのに、なんでわたしだけ…』

「お前も神姫なのか？」

『あ、はい！ちゃんとじごあこさつしてなかつたよね。ビックバイパー型神姫のヴォルヴィエッタだよー。』

ビックバイパー型？
まあ、フレーム型がビックバイパーってのはわかるが。

「で、どんな能力があるんだ？」

『元々、おねーちゃんたち他の神姫のサポートロイドとして作られたんだ。一応、武装もあるけど…他の神姫には劣るよ』

「サポートロイド？」

『うん。ヒューマノイド型に変形もできるんだよ』

そつまつて、ヴェルヴィエッタはヒューマノイド型へ変形した。
なんか、マクロスのバルキリー？

「…何か微妙だなあ」

side ネプギア

それじゃ、ゲームキャラさんも復活したし、そろそろ…。
そう思い、みんなに声をかける。

「それじゃみんな、行きましょう!」

私はそう言って階を促し外へ出た。

「うわ。何かすごい光景ね」
「けが人さんもいっぱいいるです」
「うわあ、家がたくさん倒されてるよ」
「げつ。何これ」
「…ひどい」
「残骸がいっぱいですの」

みんな外の景色に思い思いのセリフを呟く。

そして私は、その景色の中にケイスさんとグリさんの姿を見つめた。
その横には、何か青と白のロボット(?)が浮いていた。
か、かっこいい…。

「ケイスさん、グリさん」

私は手を振りながら一人に近づいていった。

side ネプギア END

「ケイスさん、グリさん」

ネプギアの声が聞こえる。

ああ、ゲームキャラの補修が終わつたのか。

そして、声のした方に田を向けると、教会にてたはずの皆が一いつ
に向かつてきていた。

「おお、みんな。とりあえずキャラマシンは駆逐したぜ？」

俺はそう声を発しているのだが、皆の視線が俺の横に集まつて
いるのに気付いた。

「ケイスさん、その横のロボットは何ですか？」

ネプギアがそう聞いてくる。

そうしている間にも、日本一せせらぐちあん、ラムちあんがヴェルヴ
イエッタにぺたぺた触つている。

「俺の新しい仲間、ヴェルヴィエッタだ」

『ヴェルヴィエッタです。よろしく』

軽つ。

まあ、エイが未成熟なんだろ? なあ。

『それじゃますたー、わたし帰るね。用があるときには呼んでねー!』
ヴェルヴィエッタはさつと光の珠となり、俺の懷へ飛び込んで
きた。

「ケイスさん、私たちゲイムキャラさんを元の場所に連れて行くんですけど、一緒に行きません?」

ネプギアが俺にそう聞いてきた。

「まあ、一緒に歩いてみるか。

「ああ、いいけど。ロムちゃんとリムちゃんも一緒に歩くの?」

「…ケイスさんが行くなら(ほんせん)」

「ロムちゃんが行くなら、私もー」

ロムちゃんとリムちゃんも行く気満々みたいだね。

ミナさんはどうかなあ。

そつ懶つてグリさんを見ると。

「ミナさんには、私がついてるから大丈夫ですよ」

グリちゃんはそう言って、ヒヒヒヒと笑っていた。

そして、ロムちゃんとリムちゃんに向やう小声で話をしていた。

「うん、わかった」

「めーわくなんてかけないわよ」

グリちゃんがロムちゃんとリムちゃんに向いて聞かせていたようだった。

「それじゃみなさん、歩いてらっしゃい

やつぱりて俺たちを送り出すグリゼン。

「それじゃ、みんな行ひつか」

そつぱり俺に、

「はいっー」
「そうね」
「はいです」
「うんっ」
「ですの」
「…うん」
「しょうがないわね」

それぞれが答えて出発したのだった。
目指すは、世界中の迷宮！

.....SAVE

さて、ビックバイパーの正体が明らかに。

ケイス「まあ、一応味方だつてのはわかつた」

ということじで、紹介をしておきます。

ビックバイパー型神姫 ヴェルヴィエッタ

まだ、武装神姫 BM Mk2に正式に出てきてはいけませんが、一応配信予定なので。

ケイスはこの情報が出る前にゲームギョウ界に来てしまったので知らないのも当然。

ただ、彼女は武装神姫のほうとはちょっと設定を変えています。個体でのセットアップは一応可能ですが、サポート的な役割の方が強くなるかと。

どうサポートするかについては、おおいおい説明していきます。

それでは次回、「フォームチェンジ」でもたお会いしましょう。

第36話 フォームチョンジ (前書き)

世界中の迷宮…そこは、かつてキラーマシンが封印されていた地。ケイスたちは、再びキラーマシンの封印に赴く。そこに現れしは…。

第36話 フォームチョンジ

この世界に来て、何回田だれい。

この『世界中の迷宮』に入つたのは。

間違いないのは、前々回も今回と同じくキラーマシンの封印のため
に入つたこと。

「あー、やっぱつまだキラー（略）が残つてゐるんだな」

世界中の迷宮に入つて早々にキラーマシンの大群を見かけて、おれ
はため息を吐く。

まあ、ここは俺が一肌脱ぐつかねえ。

side ロム

あ、ケイスさんがため息を吐いてる。
さつきもキラーマシンと戦つてたしね。
もう辟易しちゃつてるのかな。

私はそう思つて、思い切つてネプギアちゃんに提案を持ちかけてみ
た。

「…ネプギアちゃん?」これは、わたしたちが引き受けたから、先に
進んで?」

わたしの横でラムちゃんがびっくりした顔をしてるけど。

「本当に、任せちやつて大丈夫かな?」

ネプギアちゃんはそう言つて、ケイスさんにつ話しかける。
うん、ここまでは計画通り。

ケイスさんだつたら、絶対ここへ言つてくれるはず。
『あの一人だけじゃ危ないから、俺も残るよ』
つて。

side ロム END

むう、パーティー全員の視線が俺に集中してるような気が…。
まさか、ここつてそんなに重要な選択だつたりする…?

つて、ちょっと考えてみよ。

原作だとここでロムちゃんとリムちゃんが乱入してキラーマシンを
制圧。

ネプギアたちはハードブレイカーと戦闘…だよな。

ロムちゃんとラムちゃんが女神化できるかはわからないが…。
多分、ネプギア達についていくほうが正解…なんだろうなあ。

「ね、いえば、ロムちゃんとリムちゃんって女神化できるのか?」

俺は一応確認のためロムちゃんとリムちゃんにそう聞いてみる。

「もううん、できるわよー…」

「…うん」

だったら、答えは決まつたな。

「それじゃ、ロムちゃんとラムちゃん、ここは頼む。出来るだけ早く封印するからさ」

セツニヒー、ネプギアたちと一緒に封印の地を田舎し歩き始めた。

side ロム

…つれ。

何で。何でケイスさんが、ネプギアちゃんと一緒にに行ひやうのー?

「…変身」

わたしはまつりとそり言ひて、女神化する。
そして、ラムちゃんに声を掛ける。

「ラムちゃん、ごめんね。読み違えちゃった」
「だ、大丈夫よ。わたしとロムちゃんだったら、こんな奴らひくし
ょーだから」

ラムちゃんはそつ言いながら女神化する。
けど、ラムちゃんの体が少しだけ震えてるのが解る。
怖いよね、わたしも怖いもん。
だけど…。

「…言つたことは守らないとね。いい女の条件だから…」
「ルウイーの双子女神候補の実力、見せてあげるつー」

わたし達は自分たちにそつ言ひ聞かせて、キラーマシン達に向かつ
ていつた。

side ロム END

俺たちの後ろから、金属同士がぶつかる音が聞こえてくる。
きっと、ロムちゃんやラムちゃんが奮戦しているんだろうな。

「あの、ケイスさん。ロムちゃんとラムちゃん、大丈夫なんでしょうか」

ネプギアが心配そうにそう聞いてきた。
うんうん、ネプギアは優しいねえ。

「だいじょうぶだよ、ネプギア。あの一人だけ小さくても女神候
補生なんだろ?」

そつ言いながら、後ろの音に耳を傾けていた。
だが、さつきと音が微妙に違う?
違和感が気になって後ろを向いたとき、息を呑んだ。
読み違えたか!

「ネプギアっ!」

「はいっ! ?」

俺が出した声の大きさにびっくりしたのか、ネプギアも大きな声で
反応した。

「封印の方を頼む。俺はあの2人の方の加勢に入らないといけない
みたいだ」

俺はそう言つと、来た道を引き返し始めた。

side ラム

「ヨイツ等、こんなに強かつたの！？」
前回も今回もケイスが簡単に相手してたみたいだったから、今のわ
たしなら行けるかなって思つたけど。

「全然ダメじゃない！」

そう言つて、アイスストームを唱える。
けど、ヨイツ等には効いてない。

「ロムちゃん、大丈夫？」

わたしは、ロムちゃんが心配になり声を掛けた。

「…まだまだ、大丈夫」

そう答えが返つてきたから安心してた。
けど、ロムちゃんの方を見てみると、擦り傷だらけだった。
誰か…助けて！

side ラム END

「くそ、普通に走つてたんじゃ間に合わねえー！」

俺はそう言つて、ラプティアスを取り出す。

「ラブティアス、スタンバイ！」

『了解です、マスター』

そして俺はラブティアスを纏つ。
そして一気に加速し、ロムちやんとラムちやんのいるところまで翔
んでいく。

1体のキラーマシンがラムちやんを攻撃しようとしていた。
ラムちやんは防御体制を取り、少しでもダメージが少なくなつよう
にしていた。

ラムちやんに攻撃が当たる直前、ラムちやんをそこから腕に抱いて
救い出すことに成功した。

「…あれ？ 攻撃がこない？」

ラムちやんは俺の腕の中で恐る恐る目を開けた。

「ケイス？」

「ああ。ロムちやんも救い出してくれるだ

俺はそつぱつて、ロムちやんも救い出しほうとこらめ
で運んだ。

「あい、本当にここで謝りたいんだが

やつぱいながら後ろを向く。

そこには、2人をここまで追いつめたキラーマシンたちがいた。

「俺の大事な妹たちをこんなにしゃがって。ただで済むと思つなんよ？」

？」

俺は自分のじとほ棚の上に置き、キラーマシンたちを睨んだ。

『半分以上、マスターの所為のよつな気がしますけどね』
ラブティアス、そこは黙つてくれ。

俺も心が痛いんだから。

「かとこつて、ラブティアスはどつちかとこつと急襲型だからな。
そて、ビツするか

俺がそつぱつと、ヴェルヴィエッタが声を掛けってきた。

『ますたー、わたしだつたらラブティアスおねーちゃんをサポート
できわぬよ?』

そつこえば、『イツそんな事言つてたな。

「キラーマシン達に勝てる可能性は?』

『確實に100%だよ』

「ひつと、乗つてみるか?

「OK、乗つてみるか

『りょーかいー』

ヴェルヴィエッタはそつぱつと、まづ実体化しひックバイパーとな

る。

『ラプティアスおねーちゃん、今から送るプログラムを実行してね』
『わかりました』

ヴェルヴィエッタが何か送っているらしいが、何も見えない。
…電波だからか。

『実行終了。…なんですか?』の武装合体とこののは

『ますたー、いつでも準備完了だよ。モーウービーは武装合体ーだよ』

武装合体?

ビニゾのロボットみたいだな。
まあいい。いつてみるか。

「武装合体ー」

俺がそう叫ぶと、ヴェルヴィエッタが3つの部品に分かれた。
一つは武器のハンマーを模した武器に、残りの2つは主翼に。
そして、主翼はラプティアスのスラスター部に組み付き、ハンマー
はラプティアスの手に握られた。

『フォームチェンジ完了』、ラプティアス エアドミナンス』
『各部チェック完了。速度上昇、ハンマーはスラッシュヤーへ
変形可能』

……SAVE

第36話 フォームチョンジ（後書き）

ケイス「何ぞこれ」

ゲームには出てこないよ、このフォームチョンジとかは。
それでは、ラプティアス エアドミナנסの説明をば。

ラプティアス エアドミナанс

ラプティアスとヴェルヴィエッタが武装合体した姿。

基本的に、元々のラプティアスの翼を大きくしてハンマーを持たせたと思つてもらえれば。

手に持つているハンマーは、形的にはアックスって言つた方がいいのかな？

名称は↙ハンマー。命名は何となく。

で、上の↙ハンマーに合体の際についた主翼をハンマーの両端につけた武器。

武器種別は、ハンマーから大剣に変わる。

名称は↙↙スラッシュヤー。命名は↙ic viperslayerから。

（公式だと↙Gスラッシュヤーですけどね）

それでは次回、「ラプティアス エアドミナанс」でまたお会いしましょう。

第37話 ラプティアス エアドミナンス（前書き）

多数のキラーマシンとの戦闘に苦戦するロムとラム。

2人が苦戦するとは思わなかつたケイスだったが、2人の救出に成功。

ここから、ケイスたちの反撃が始まる。

第37話 ラプティアス ハアドミナンス

「2人とも、そこで休んでてくれ

俺は背中越しにロムサヤンとラムサヤンにしつ声を掛ける。
これが、2人にできる唯一の償いだから。

「ラプティアス、調子はどうだ?」

『駆動系は完全に掌握しました。いつでも行けます』

「ヴェルヴィエッタはどうだ?」

『ハンマーの制御はわたしに任せてもらつていいよ

こつちも大丈夫そうだな。
さて。

「ヴェルヴィエッタには懲りが、性能測定をさせてもうひづ

しつ言いつつ、一番近くのキラーマシンにハンマーで攻撃を仕掛け
みうとした。

だが、ここで違和感が生じる。

「ハンマーの重さが…感じられない?」

『^A_Gavity ^I_Mpact 反重力技術の応用だね。接触の瞬間だけ重力を発生する設定にな

つてゐるよ』

…どんだけ高等技術を突っ込んであるんだ、この世界の神姫は。
そんなことを思いつつ、キラーマシンの左側からハンマーをぶつけ
てる。

グシャツ。

そんな効果音が一番しつくり来る。
キラーマシンにハンドマーを当たした瞬間、キラーマシンが横からプレスされたかのように潰れた。

「おーおー、チート武装でしかないだろ、コレ

俺はあまりの光景に、そう口に出していた。
だが、神姫たちは…。

『ねね、おねーちゃん。これに技名付けた方が良くないかな?』
『そうですね、スプレンティッシュ・インパクトとでも名付けましょうか』

今の攻撃に名前をつけていた。

Splendid Impact
華麗な衝撃ねえ。

ま、せっかくだから使わせてもらおうか。

「まだまだ、行くぜ。スプレンティッシュ・インパクト!」

重さを感じないため軽々と振り回し、俺の周りにいたキラーマシンを潰して回る。

いつの間にか、俺の周りのキラーマシンは一掃されていた。

ケイス、わたし達が苦戦してたキラーマシンをあんなに簡単に…。
それに、すごい怒ってるわね。
じゃなければ、一撃でペちゃんになつたりしないわよね。

side ラム

「ありがとう、ケイス」

わたしは小声で呟く。
ロムがなんにも聞こえないから、この小声で。

だけど、私たちに無茶をさせたり、壁の手紙を読むれないからね。

side ラム END

side ロム

「ムサちゃん、わたしに聞こえないようになつたつむつだらけなび、
聞こえなかつた。

これで、『ケイスさんルウェー』の『かべ』の第一段階完成へ、
だね。

ひよつと外へと変わつちやつたけど。

「話題通り（ニヤニヤ）」

side ロム END

「わい、おとせあつちの申集団だけが」

俺は、そつと離れたところにリリーフマシンの集団を見る。
る。

…もしかして、俺に怯えてたりする?
近寄っこないしな。

そう想いながら、一步一歩歩を進めてみる。
俺が歩を進める度に、キラーマシンたちは後退する。
だから、距離が縮まらない。

「さて、どうしようかねえ

後退してこくキラーマシン達を見ながら俺は向気なく呟く。

『まあ、滅ぼすのも視野に入れないとけませんが…』
『でも、また出できたら悪さするよね?』
『…』

ちゃんと封印を施して、2度と出てこなければ悪さをすることがないしな。

そう想いつて、ロムちゃんとラムちゃんとネプギアの方へ向かおつかと思いつて、キラーマシンに背を向けた時だった。
キラーマシンの数体が腕に装填されていたミサイルを発射した…ロムちゃん、ラムちゃんに向けて。

『マスター、キラーマシンがあの2人に向けてミサイルを発射しました!』

目で追つていたら間に合わないと思いつて、ロムちゃんとラムちゃんと向かって飛翔する。
ビビリがミサイルに追いつき、ハンドマーを振るひ。

「スプレンティッシュ・インパクト!」

爆風を最小限に押さえ込み、ロムちゃんとラムちゃんには何も影響がないようにすることが出来た。

「ケイス…」

「…ケイスさん」

「…怖かったよお（です）」

2人は、俺の足にしがみつき、泣き始めてしまった。
俺はそんな2人を安心させるためしゃがみ、頭を撫でた。

「怖かったよな…」

俺の甘さが招いた結果だった。

一步間違えば、この2人を失っていたかもしれない。

「ちょっとだけ、もうちょっとだけ待っててくれ、な」

そう言つて、俺は一人の頭から手を離す。

「「あ…」」

「あいつらを…ブツ潰す！」

そう言つて、キラーマシンを睨みつける。

「ヴェルヴィエッタ、剣を頼む」

『うん…』VVスラッシュジャー形態にフォーム変更

ヴェルヴィエッタがそう言つと、ラブティアスのスラスターに付いた主翼が離れ、Vハンマーに組み付く。

そしてそれは、一振りの剣となつた。

ラブティアスの大きさから考へても相当大きな剣、▽▽スラッシュ
ーが俺の手に握られていた。

「行くぞ」

そう咳き、スラスターを全開にしてキラーマシンに突っ込んでいく。
キラーマシンに肉薄する直前、剣を水平に右腕の方に構える。
そしてすれ違う瞬間。

「せいやあつ」

右からの一閃。

「もう一回ー」

返す刀でもう一閃。

その一閃を振るつ。

キラーマシン達を通り抜け一息ついたところだ。

ドゴォォン。

キラーマシンたちは、爆散した。

side ラム

「ケイス、カツコイイわね

わたしは自然にせり声を出していた。

強くて、優しくて。

「これじゃ、ロムちゃんが魅かれちゃうのもしょうがないかな。

「…うん」

わたしの横で、やう声がする。
ロムちゃんだった。

「ロムちゃん、ケイスのこと好き、よね？」

わたしがそう言つと、ロムちゃんは恥ずかしそうに顔を伏せた。
そして、「うん」とだけ答えた。

「わたしも好き…なのかも」

そういうわたしを、ロムちゃんはこいつものよつに柔らかく微笑んで
見ていた。
何か、恥ずかしい。

side リム END

ふう、よひやく片付いたか。

そして俺は、ロムちゃんとラムちゃんのところに戻り、武装を解いた。

「怖いと思こわせちゃって、『めぐね?』

俺はそう言つて、2人に頭を下げる。
何て言われてもしょうがないよな。

「ケイス！」

ラムちゃんが怒つたよつて口ひきを張り上げる。

…まあ、当然だよな。

「い、一回で許してあげるから、しゃがみなさい。」

「しゃがむ？」

いつもだつたら、腹にイイ拳が入つてきたりするんだが。
何でしゃがむ？

そう思つてみると…。

「~~~~~つー早くーーしゃがむの？しゃがまないの？」

そう言つて、急かしてくる。

「わかった、わかったから。しゃがむよ

そう言つて、俺はラムちゃんの前にしゃがんだ。

「それで、目を開じるの。いい?目を開けていいって言つままで開け
ちゃダメだからねー！」

目を開けたらひどいんだからね、と続けられた。
まあ、元から逆らつ氣はないから、ここで目を閉じておく。

side ラム

今、目の前ではケイスが目を閉じたまましゃがんでいる。
「う、気にしだしたらどうぶんぶんデキドキしてきた。

そんな時、ロムちゃんに肩をつつかれ、ケイスの右側を指差される。
わ、わかつてゐるわよ。

わたしは声を出しそうになるのを必死に堪え、ケイスの右側に移動
する。

そしてロムちゃんとアイコンタクトをとり、タイミングを合わせる。
それじゃいくわよ。

3・2・1：

side ラム END

ちゅつ。

左右の頬に柔らかい感触がした。

え？え？

俺は驚き、目を開けてしまう。

「 もう。 田を開けちゃダメって言ったのに」

俺の両横には、頬を真っ赤に染めた2人の恥ずかしそうな笑顔があ
つた。

その後、ハードブレイカーを倒しキラーマシンを再封印したネプギアたちが戻ってきた。

…加勢に行くの、忘れてたな…。

…SAVE

第37話 ラブティアス ハドニアス(後書き)

ネプギア「わたしの扱いがぞんざいすぎですー。」

しうがないだろ?

今回はルウェイーの姉妹がヒロインの回なんだから。

ネプギア「ううー、そんなことを言われても…」

れて。

次回は、ルウェイーの事件も解決したし、いよいよリーンボックスへ向かうためにラステイション入りします。

ネプギア「下つ端さんの妨害に遭うんですね、わかります」

…それはどうかな?

ネプギア「え? それってどういつ…」

それでは次回、「変わり始めた歴史」でまたお会いしましょう。

これは、もしかしたら未来に起こるかもしれない物語。

……Quick Load

「うーん、やっぱり寒いねえ」

俺はひとり、ちりながら、はあっと手に息を吹きかける。
ここは、ルヴィーのある街角。

ここで、俺ことケイスはとある人物を待つて居たのだつた。
つて、何か説明臭いな。（笑）

「ケイスー！」

そう声のした方を振り向く。

そこには、今まで俺が待つて居た人、ノワちゃんが手を振りながら走つてきていた。

「ごめんね、待つた？」

「いや、全然」

まあ、浮かれていたから1時間以上待つて居たとは言つまい。
流石に恥ずかしすぎる。

「それじゃ、行こつか」

そう言つて、ノワちゃんが俺の手を引いて行こうとしたんだが。

「あれ、手が冷たくない？」

「ついで、両手で暖めるかのように俺の右手を覆つ。

「まあ、寒いからね」

「それでも冷たすぎるわよ。一体何時間待つてたの？」

俺は言い訳するも、簡単に看破されて…。

「う…1時間近く

俺は渋々真実を口にする。

「…まったく」

ノワちゃんは、しうがないなあとでも言いたげな顔で笑う。そして、俺の右手に添えていた手を離し、俺の頭をコツンと打つ。

「あいたつ

「だから、喫茶店とかで待つけさせよう、って言つたじゃない

そう言いつながら、彼女が持つてゐるポーチに手を入れ、何かを取り出す。

「はい、これをつけておけば寒くないでしょ？」

そう言つて、黒い手袋を差し出してきた。ポーチにいつも入れてるのか？流石女の子。

「まったく。買つたばかりで一回も使ってないのよ…感謝してよね

置つたばかり？

どつ見ても手編みですが…。

俺はその言葉を飲み込み、受け取つた手袋を装着する。

「つさ、あつたかいな。ありがと、ノワリちゃん

そう言つて、左手で彼女の右手をとる。

そして、一人で街を歩いていく。

side ネプギア

「うー、ノワールちゃんねえ。

ケイスケと手をつないで歩くななど、羨まし過ぎる。

「ネプギア、早く行へやつ

「ラムちゃん、私はその声をかか、路地から出てきていた。

「……ラムちゃん、これもつて行つて？」

「……ラムちゃんがやつてラムちゃんに渡したもの…。

それは、田へ塗つた段ボール箱だった。

「……れな、みつからなこか」

「ラムちゃん、その皿はどうか？」

side ネプギア END

うん、今日もルウェイーの街は平和だ。
平和なのはいいことだよね。

そう言いながら、以前の出来事を思い返していた。

第2次マジココンヌ大戦と呼ばれることになつた戦い。
もつ、あの戦いは終わつたんだから、平和なのは当たり前。

「セヒ、あとはターキーくらいか？」

ミナさんとグリさんからの頼まれ物。
まあ、所謂クリスマス会の準備だ。

「まつたく。何で私が…（ブツブツ）」

「『めんね、ノワちゃん。初めから買い物だつて行つておけばよかつたね』

そう言つてノワちゃんに謝る。

確かに、デートの誘い方みたいだつたからなあ。

「へ、うひ。期待してたのは確かだけ…」

ノワちゃんは、顔を紅く染めながら言つた。
まあ、こつちも半分はその気だつたけど。
つていうか、セヒから何か視線を感じるんだよなあ。

「離れすぎて、何の話をしているのか分からなことがあります」

「…だから、これで身を隠せば…」

ロムちゃんが例の段ボール箱を出すが。

「「「それは無理……」」」

セリヒコの全員でそれを否定する。

「でも、歸匠とお姉ちゃん、いいカンジじゃない?」

ユーリちゃんにとっては、ノワールさんはお姉さんだし、ケイスさん

もお師匠様だし。

両方とも尊敬の対象なんだよね。

「うーん、ネプチさんの的にはヨメを取られたカンジなんだよねえ」

お姉ちゃん、ヨメって。

「この小説じゃ、そんなこと何も書いてないじゃない。」

「ユリは私が正義のために…」

「「「ヤメテ…」」」

私たち、何をしてるんだろう。

side ネプギア END

頼まれたものを全部貰つて、俺とノワちゃんはルウェイの教会へ来ていた。

「ケイスさん、すいません。買い物なんか頼んでしまって」「ノワールさんと一人で過去すよていだつたところが、本当にermenね？」

グリさん、や二じでひりとバーナーぐくださー。

「それなので、一室用意させて貰きました。や二じでお貰ください」

そう言つて、ミナさんにある部屋に案内された。

そこは、整理の行き届いた、本当に綺麗な部屋だった。

「あ、逆に落ち着かないね、じつこう部屋は」

「や、そうね」

大きな暖炉、それに大きなテレビのある部屋。

その部屋の中で、座ることが出来るのは、ベッドとソファのみ。

そんなところに、女の子と一人きり…。

「す、座るっか」

「え、ええ」

俺もノワちゃんも「うなづく余韻を交わし、ソファに座る。

…右端と左端に。

もちろん、手を伸ばせば聞く距離なんだが、その距離が遠く感じる。

「け、ケイス？」

ノワちゃんがそう、俺に話しかけてくる。

な、何？」

「今まで、色んなことがあつたよね。私は助けられては、かりだけ

— そんなことない。俺も、助けられてる上

これが空せ種のこと 聴けてくれる?」

「… よかつた。 ねえ、 ケイス。 キス、 して？ ケイスがその約束を違えないように」

ノワちゃんは、そう言つてこちらに顔を向け目を閉じる。

「ノワちゃん…」

俺はそう言つて、ノワちゃんの肩を抱き、顔を近づけていった。

ドアがバンッと開けられ、そこからネプギア達が顔を出す。

「ちょっと待つたーーっ！」

それにびっくりし、ノツカちゃんも皿を開けてドアの方を見る。

「あーんーたーらあー」

ノツカちゃんのそんな低い声に皆が驚き、ただただノツカちゃんを見つめる。

「よべも…よべも邪魔してくれたわねつー」

「ハイバーード そう言いながら女神化するノツカちゃん。
と、とにかく止めよつ。

「ノツカちゃん、止まつてくれー！」

「ケイスー・アンタも監に味方するのー。」

「ヒーハー そう言つて、駄々つ子のように暴れ始めるノツカちゃん。
ええい、まよ。

そう思つて、ノツカちゃんの正面に行き、ノツカちゃんにキスをする。

「「「あああああつー。」」

ネブギアたちがそんな声を上げるが、気にしない。

その間にノツカちゃんの女神化は解け、擬人化状態に戻る。

時間は経過し、クリスマスパーティー会場。
部屋の中心のテーブルにはターキーやらケーキやら、色々な食べ物
が所狭しと並べられていた。

部屋には4国の女神と候補生、教祖といつもの協力者達。さすがにファルコムどがすとは放浪中といふことで捕まえられなかつたらしい。

「みんな、飲み物は行き渡つたかな？」

「「「はーい」「」」

未成年はジュース、大人はシャンパンの注がれたグラスを持つ。

「それじゃ、乾杯の音頭はケイスさん、よろしくー

「はいよ

俺はそう言つて、一歩前に出る。

「それじゃ、みんな。いっせーの一でっ！」

「「「メリー・クリスマース」「」」

キインと、グラスを軽くぶつける音がこだまする。

その部屋には、笑顔が溢れていた。

とこ「」とで、クリスマススペシャルでした。

まあ、ゲーム、ギョウ界が平和になつた後の一幕とこ「」とか。

ケイス「戦いが終わつた後か。本当にこんな話になるのか？」

いや、マジで読めん。

本当にこんな未来が繰るかも分からぬしな。

もしかしたら、ノワールの配役のところにネプギアが来るかもしけないし、ロムちゃんやラムちゃん、はたまたファルコムって可能性もあるわけだ。

ケイス「まあ、今のまま進めば、こんな結末つてとこ「」なのか」

とこ「」とで、1日遅れではあります、こんな物語を書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6621w/>

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 もう一人の協力者

2011年12月25日19時49分発行